

犠牲とす。故に往々人を害するとあれば、檻中より引き出す時、その跳躍を禦ぐに種々の方法あり。かくて小刀に刻痕ある器にて、熊の齒を斷ち去るを例とす。又壓殺せずして射殺すなりといへり。

カンカムイノ

イナオ

カンカムイノミは病人ある時、酋長及び親族等相集り、秘藏の木幣寶物をば、悉く出して小屋の神を祭るをいふ。熊祭につぎてまた有名なり。

アイヌは、種々の祭または祈禱の時には、イナオ(又ヌシャともいふ)を用ふ。削り掛けの類にて即ち幣帛なり。祭事により種類を異にす。多くは柳を以てこれを作る。

六 交通

交通

總説

北海道の開発は比較的近年に拘り、移民の招來今猶、年に萬を以て數へ、土地の開墾經營も未だ全程の七八分を成したるに過ぎざれば、交通の發達も未だ本州島に及ばず。道路の幹線は未だ全道に洽からず、縦貫鐵道も僅に東西線を完成し、都會若しくは近距離の地に設けらるべき人車鐵道馬車鐵道の

如き補助交通線も現時漸く二三を算するのみ。但し海運は稍、之と趣を異にし、上代既にその端を啓き、現今に及びては全道の沿岸殆ど大小船舶の影を見ざる莫く、聚落はために先づこの方面に起り、以て全島内陸開發の第一線を形成せり。

本島のうち陸上交通の割合に開けたる處は、中央低地帯殊にその西北部より石狩灣の南邊に亘れる地域にして、石狩平野ことに發達し、その中に起れる幾多の都邑は、政治的、經濟的優秀の地位を利用し、全道陸地交通系の中樞を支持せり。札幌小樽の二區を連れ、東して岩見澤に及べる道路並に鐵道線は實に是が基線を成すものと見做すを得べし。是より西南、本島の半島部に至れば其位置全道の中心部と本州島とを連結する處にあるに拘らず、山嶽一面に起伏し、陸路の開發容易ならざるが故に、交通は専ら海運に依り本島の門戸函館と札幌とを連ぬべき一條の幹線さへ今猶、完成を見ずして開發當時の假道をその儘に存するところ尠からず。

従つてこの間の鐵道の如きも、その開通小樽幌内間のものに比し後るるこ

と二十餘年に及べり(明治三十八年)。幹線にして既に然り、半島内部の道路の發達せざる推して知るべし。翻つて本島幹部に於ける中央低地帯以外の地域を觀るに、地形中央に隆起し、殊に中部は山脈四方に馳せ、高山峻嶽各處に群るを以て本島横斷の交通線は其發達甚遅々として僅に二三ヶ處に於て漸く之を通ずるものあるに過ぎず。鐵道の如きも、其東西兩海岸の連絡を見たるは、漸く數年前のことに屬せり。若し其れこの東西横斷線より岐れ、上川盆地より天鹽川溪谷を北進する南北縦貫線の全部開通に至りては、その期今猶、豫想すべからざる状態にあり。本道に特殊なる驛遞所の必要と利便とを感ずるは實にこの方面なりとす。之を要するに本島の陸上交通は、現時猶ほ未だ創設の時期を脱せず。石狩平原の一部分にあるもの若くは主要都會の附近にあるものを除けば、他は大抵當初驛馬の通行に堪ふるを程度として築設せる道路その後改修を加へられざる儘に存するもの多く、又車馬その他の交通機關の如きも本州に比しては迥に下れり。現今當局者が本道の道路橋梁の新設若しくはそが改修に對し、汲々たるものあるは蓋し事宜に適合するものと謂ふべし。

是に反し沿岸水路の交通は、古來比較的盛に行はれ、中にも本土との間は、夙に日本海岸に沿うて航運開け、漸次太平洋沿岸にも及ぼし、今日にありては、一局部一季節を除けば、他は四時共に船舶の往來概ね活潑なり。本道開發の方向の必ずしも日本本土との距離の遠近に關することなく、常に海陸聯絡の便を得たる沿岸より内陸に向ふもの、一にこの舟運の盛況なるに基かずんばあらず。只本道の海陸聯絡を滑かにすべき港灣は良好なるもの極めて少なく函館室蘭小樽等の二三を除けば、他は始ど悉く灣形を成さず、従つて船舶の碇繋安全を缺き、荷役の不便言ふべからざるものあり。殊に本島の軀幹部にある港を以て然りとす。然れども經濟上必然の要求は海陸連絡の良否を辨するに遑なく、盛に之を利用せんとする傾あり。港灣として最も重要なるは津輕海峡に臨める函館港にして、本道諸港中其開港最も古く外國貿易は本道第一にして内外國船舶の出入最も頻繁なり。蓋し位置の良好なるに加へて港形最も優秀なれば、商業上の中心は漸次小樽に移りつゝあるに關せず、依然と

してその名内外に喧傳せり。小樽港は函館に比すれば、創設新らしく港形も彼に劣ること數等なりと雖、築港工事略ぼ成り、殊に本島軀幹部の開發は逐年その重要な程度を増し、今や商業港市としては、全道の覇者と稱するも誣言にあらず。その他室蘭港の盛衰浮沈多き、釧路港の鐵道の開通に依りて新に活躍の度を加へ來れる、根室港の殆ど固定して敢て隆替を見ざる等算し來れば諸港各其特質なきにあらず。

千島は大小數多の島嶼より成れるを以て、その交通は海路を主とし、陸地交通は極めて不完全なり。本島との間は根室港を以てその航路起點となせり。本道の交通は氣候と密接なる關係を有し、陸上にありては冬季は夏季に比して最も活潑旺盛を極む。これ積雪上の通行自在なるの致すところにして、橋は實に當時の最良交通機關たるなり。是に反して海運は一般に夏季を便とし、東部海岸即ち根室北見釧路の近海のみは、この頃濃霧連日に亘り冬季沿岸海水往々にして凍結し、流水浮動して航行爲に危険を感ずること尠からず。本道の道路につきて更に之を詳述すれば、當初は所在に發達せる聚落の間

道路

に極めて不完全なる道路の設けられたるのみにして、遠距離の間に豫め計劃を設けて之を築成するが如きことは後代に至りて漸く發現せしが如く、蝦夷草紙にもいひけんやうに人々得手勝手に通して自然に出來たる道路なりき。寛政年間に至り幕吏近藤重藏等の東蝦夷地山道開鑿事業起るに及び、膽振日高の沿岸道路先づ通じ、國後擇捉の二島亦是が恩惠に浴したり。尋いで安政年間には同じく幕府の西蝦夷地の道路開鑿となり、後志石狩の沿岸より天鹽の西南に至る間、山道新に成り、尙半島部には二三の横斷道路も新設せられたり。明治に入り五年にはアメリカ人の設計に基き函館札幌間の道路築造の工を起し、尙各處の道路を改造し、昔日の駄送道路は漸く車道に改まり、森室蘭間には陸運を補助すべき連絡航路さへ開始せられ當時の主要都會は各盛に街路の改築を行へり。爾來今日に至るまで幾星霜、開拓歩を進むるに従ひ、軀幹部の縁邊より内部地方に向へる道路漸次延長し、遂に二三横斷線をも見るに至りたれども、素と本島の開發は各般の事業の漸進に俟つもの多きが故に、道路の開鑿整頓遅々として進捗せず、政府及び道廳の方針も専ら延長主

義を採り、既成道路の改築は漸を以て完成すること、せり。今明治四年より同四十一年に至る間に開鑿せし道路の總延長を見るに二千五百九里餘、明治四十三年末には道路の總延長二千六百里を超えたり。左に主要線路に關して述ぶる所あらんとす。

國道

函館、青森間

日本本州島より北海道に渡るものは、青森港より函館港若しくは室蘭港に上陸するを常とす。函館よりは本道の半島部を縦に通ずる主幹道路北に馳せ、概ね鐵道函館本線と併行して札幌に向ふ。此道路の函館を發するや、函館の北々西に開展せる桔梗平野の東縁に沿ひ、龜田七飯等の名邑を經、北の方渡島山脈の低部無澤峠(二九九米)を越え、大沼小沼の窪地を右に望み、駒ヶ嶽火山の西麓を繞りて内浦灣の一小港森に達す。この間桔梗平野は到る處村落盛に發達し、傍系をなせる大小の道路いづれも坦々として四方に通ずれども、一たび無澤峠を北に越ゆれば、滿目の光景突如として更まり、北海の原生林山を封じ谷を埋め、路邊草深くして行人稀に、身は既に本土を去る遠きの感あるもの、蓋しこの邊より始まる。この幹線より西に岐るる主要なる支線二

福山・江差街

つあり。一は概ね津輕海峽の岸に沿ひ福山に通ずる道路にして、他は松前半島を横斷し、江差に達する往還なり。前者は大野川の河口に起れる上磯を始め、茂別泉澤木古内知内等の名邑を過ぎ、海岸を離れて知内川筋に入り、知内嶺(一八四米)を南に下り福山に出で、津輕海峽西口の北角たる白神岬の背後より舊松前即ち今の福山に至る。福山は本島の開發史より觀て、極めて重要な處なりと雖、政治的・經濟的の中心この地を去つてより既に數十年、今や市街の凋落特に著しく、廢墟樓門徒に松前氏三百年の盛衰を語るのみ。後者は大野河畔なる大野を過ぎ、同溪谷を西北進して、松前半島の脊梁山脈を中山峠(四〇九米)にて横ぎり、日本海に注げる厚澤部川の流域を經て海濱に出で、南して江差に至る。沿途聚落の發達稍見るべきは、厚澤部川の小平野にして、農産頗る豊かに、古港江差はこれが重要咽喉たり。尙この線とは厚澤部川の河口附近にて岐れ、概ね日本海岸に沿うて後志の西南岸なる瀬棚に通ずる道路あり。起源と利用との古きは函館福山間の道路と等しく、街村著しく發達し、中に乙部蚊柱熊石等の小都會あり。

森・黒松内間

再び本島の幹線道路に還り、森より以北を見るに、道は内浦灣の西岸を廻り、渡島の落部・膽振の八雲・長萬部等を経て海岸を離れ、國境を越えて後志國朱太川の上源黒松内の開墾地に出で、其より東北轉して尻別川の溪谷に入り、蝦夷富士の西北麓に開展せる俱知安平原に至る間、道は恰も内浦灣・日本海の兩岸に對して等距離の軌跡を行くが如く、毎に岡阜・山嶺の間を曲折せり。この線のうち内浦灣を廻れるものは、その創設起源頗る古く長萬部より尙同灣の北を經、虻田・蚊鼈の小都會を過ぎて室蘭港に至る。この間有名なる禮文華山道後志・膽振の境に横はる。又内浦灣の西岸と日本海岸とを連ぬる横斷線は、八雲及びその北に方れる國縫にて幹線と岐れ、いづれも後志國の西南岸にある瀬棚に通ず。二者共に内浦灣斜面に屬する河川即ち遊樂部川及び國縫川の谷を傳ひ、半島頸部の低き分水嶺を越え、日本海に下れる利尻川流域に下り相合して瀬棚に至る。有名なる稻穂嶺はこの北方往還にあり。

幹線の膽振後志の國境を越えて黒松内の開墾地に入るや、炭岱と稱する一小驛に於て北方壽都に通ずる一支線を出だす。この線もまた半島部の頸部を

室蘭街道

黒松内・俱知安間

壽都街道

横斷する道路にして、後志國內にては朱太川の左右に展開せる壽都平野を貫き、黒松内熱帯その他この間に起れる主要農村を連ねて壽都に至る。炭岱より東北に向へる國道は、尻別川の畔に達してより之に沿うて東に溯り、後志・膽振の國境を過ぎて膽振の西北隅に入り、蝦夷富士の西北麓に發展せる俱知安の平野を貫く。俱知安の平野にてこの國道より岐る、支線の主要なるものは南方内浦灣の北岸に達するものを推すべく、初め尻別川の上流に循ひ東俱知安の團體農場地を經由して洞爺湖の西岸に出で遂に虻田に至りて内浦灣岸を廻れる往還に合す。この線は東俱知安を過ぎてより比較的廣濶なる山間地を繞り、處々に新移住者の聚落を見る。尙この線には蝦夷富士の東南方なる後別岳の東北にて之より分岐し、膽振・石狩の國境を越えて山道傳ひに札幌に至る一小支線あり。

俱知安を經由せる國道は幾もなくして國境にある稻穂嶺(二七五米)を越えて再び後志に入り、口を岩内灣に開ける堀株川の上源諸流の間を縫ひ、前と同名異處なる稻穂嶺四〇八米を過ぎ、余市川に沿ひ後志の北岸に出で、東轉し

俱知安・札幌間

岩内街道

て小樽に達す。本線より分岐する道路のうち、最も重要なものは西岸岩内に通ずる往還にして、その分岐點は小澤と稱し、是より西に向ひ、堀株川の流域に發達せる農村を連ねて岩内の港市に至る。此地と小澤との間馬車鐵道通す。國道は余市川の左岸を河口に達してより急に東方に轉じ、全市岳の西方なる毛無^{オヨバチ}等の小山岳の北邊を経て小樽に至る。此間道は崎嶇たる海岸を辿り、一方常に海波の渺茫たるを望み、蘭島鹽谷の勝地脚下に在り。小樽も其占むるところの地點殆ど市街建設に餘裕なき海岸の傾斜地なれども、本道軀幹部の開發と南樺太の獲得とは漸次この港市の發達を促し一躍して經濟上本道第一の都會となれり。長大なる防波堤の半ば成れる處四時大小の船舶集せるを見るもの誰か其四十餘年前一漁村に過ぎざりしを想ふ者あらんや。小樽を過ぎてより國道暫らく懸崖多き海岸を傳ひ、海水浴場錢函より石狩平野に入り、手稻の山麓を繞りて札幌に達す。札幌は全道政治上の中心にして、兼ねて石狩平野開拓の主腦をなせる地とて、本島の各處に通ずる諸種の重要交通線は悉く此處に集り、市街の建設の用意亦新式にして、街路井然

札幌岩見澤間

室蘭街道

として條劃の體を得、火防線若しくは間曠線縱横に走れり。札幌にて幹線より岐るる支線には北方石狩川の下流に沿ひ同河口の石狩より河を渡りて石狩灣の東北岸なる厚田に至る者と、東南方千歳を過ぎて岩見澤より室蘭に達する國道と合するものとあり。前者は石狩を始め漁業にて有名なる街村數多を連ね後者は膽振火山群の東北に起れる農村を過ぐ。後者より起りて北方に馳せたる別線は江別にて札幌岩見澤間の本道に會し左折して對雁^{ツインカ}に至り石狩川を越えて當別に及び、是より西進して石狩、東北進して月形に至る者と合す。國道は札幌より東北東に向ひ岩見澤に至る。是は嘗に石狩平野開拓の基準線たるのみならずその修築全道道路の第一に位す。沿道の名邑は江別と稱し、石狩川を上下する船舶の重要寄港地たり。岩見澤は札幌の小規模なるものと謂ふべく、近傍農場の發達特に著しく、鐵道函館室蘭の二幹線茲に會同して上川盆地に向ふ。別に又運炭鐵道幌内線此地より發す。街道に於ても亦之と同じく、國道は是より北に向ひ、その南支室蘭に至るものまたこの地より發す。後者は栗澤由仁等を中心として發達せる夕張川流域の水田地を過ぎ、國

日高街道

境を南に越え、膽振に入り、安平の西方なる美々にて札幌より來れる道路を合せ、苫小牧にて膽振の南岸に達し、是より西南海岸を傳うて室蘭に至る。この線は石狩膽振の國境附近より苫小牧の北方まで、殆ど常に樹幹亭々として繁茂せる原生林中を穿ち時には又牧草芊々たる間を過ぐ。苫小牧は室蘭岩見澤間道路上の要驛にして日高の海岸を浦河に通ずる一支線はこの地より起り、門別・静石・三石等の沿岸名邑を経て地方の主要都會浦河に達す。此線は徳川時代既に東蝦夷地の主幹道路として初めて開鑿せられしものなれども浦河より海岸傳ひに十勝に至るまでは坂路毎に相繼ぎ交通機關また進歩せず。更に本線に還り、苫小牧以西を一瞥するに、道路は毎に海岸段丘の麓を走り、その西北方には緩傾斜を以て之に近接せる膽振火山群の諸峯を望む。アイヌの部落として有名なる白老その他幌別はこの線上の名邑なり。室蘭は本土との間の連絡港にして、港形頗る宜しく、且夕張方面より運送し來れる石炭を賣買搬出すること甚だ盛なれば、一般經濟上の勢力は小樽・函館の二港に劣ること遠しと雖、本道の開發に對しては、極めて重要な港市なり。

岩見澤・旭川間

留萌街道

岩見澤より北に向へる國道は、漸次北方に細まりゆく石狩平野を貫き、東に此の平野の東邊をなせる第四紀古層の丘陵を掠め、西は屢之に接近し來れる石狩川と並走し、遂に江部乙の北方にて漸く東に轉じ神居古潭の峽流に入る。岩見澤以北、道はこの地方開拓の基線をなせることとて、坦直なるを常とし、中には五六里の間寸毫の屈曲をも伴はざる處あり。左右は又整齊の美觀を擅にせる新耕作地にして、美唄・砂川・流川・江部乙の如き小都會この中に起る。多くは屯田兵村の發達せるものなり。尙この主幹線と併行し石狩川の右岸を溯れる支線は、前述月形より東北進し、浦臼・新十津川・雨龍等を過ぎ、石狩川の一支流雨龍川の右岸を傳うて北龍に至り、國境を西に越えて天鹽國日本海岸なる留萌に達するものあり。これは北龍の北方國境近くの處より鐵道留萌線と併行し、留萌川の谷に發達せる農村を連ねて留萌に至るものにして、もと漁業地の一小市街として起れる留萌は此後背地の發展に依り、近年著しく活勢を呈し來れり。尙留萌より日本海岸を南北に通ずる道路起れども北するものは漸次里道と化し、南する者は留萌の競争都會たる増毛に至り、是よ

り増毛山塊に阻まれ、有名なる濱益御殿の山道となりて石狩の西北岸に及ぶ。尙上述石狩川右岸の道路とは月形新十津川等の名色にて岐れ増毛山塊を横断して西岸に達する山道あり。

江部乙の北方より東偏せる國道は、肥沃なる石狩平野の北端を貫き音江の新開地を経て漸く神居古潭の峡谷に入る。國道は河の南に沿ひ鐵道はその北を過ぎ共に上川盆地に入れば地再び展開し、本道内陸の中央都會たる旭川に達す。是は盆地の西邊石狩川上源諸流の會同する處に在りて、神居古潭横谷の東を扼し、國道此に窮ると共に更に北の方天鹽、東の方北見等に通ずる第二位の道路を分派せり。アイベツ、チラベツ、ビエの諸流に沿ひ幾多の農場美しく發展し、この間に設けられたる縦横の大小路は飽くまでも一直線をなし四邊の山麓に及ぶ。

天鹽街道

旭川より出づる主要道路のうち、北方天鹽に入るものは、國境を通せる低き嶺(約三〇〇米)を経て天鹽川の溪谷に出づ。鐵道天鹽線北進するに従ひ、地漸く開けゆくこととて、道路の改修と聚落の發達とは因となり果となり、兩

々並進の状態なれば、劍淵士別名寄等の大邑を連ねたる道路は、北するに従ひて不完全なる徑路と化し、天鹽川筋を下りて本島の北端稚内に達すべき將來の幹線も現時樵徑と擇ぶなく、寒帯針葉樹林の下、熊笹左右より茂り合ひて行人殆ど全く絶ゆるの觀あり。この路の常に天鹽川に沿ふものは、その河口なる天鹽に至る。沿岸郡邑と内部を貫通せる主要道路とは、斯の如く未だ完全なる連絡を見ずと雖、沿岸聚落の間には必要に従ひて諸處に修築稍見るべき道路あり。稚内のその補助港坂下と東北方なる舊邑宗谷との間にある道路の如きは是なり。

北見街道

本島の中央地帯即ち石狩の東部並に天鹽の天鹽川上中流域よりオホーツク海斜面なる北見に通ずる道は、北するに従ひ漸次その長さを減じ、殊に東北山脈は南より北に向つてその高度を減するが故に、一見行旅割合に容易なるが如しと雖、地猶未だ邊陲なれば、道路の以て見るべきものなく、行旅馬背によりて僅に通ずるのみ。其うち通行稍盛なるは天鹽川の支流ナヨロ(名奇川)に沿うて東し、東北山脈の低處を越え、北見の奥部に至りてオホーツク海岸

道と連絡するものなり。又上川盆地より北見に入るものは、アイベツの河谷に循ひて東進し、天鹽岳の東南石狩北見二國の境にある八四六米の嶺を越え、北見湧別川の谷を下りて北見の海岸にある湧別に達す。是は分水嶺附近即ち北に天鹽岳(一五八五米)チトカンニウ(一四二九米)南にヌタカウ(別名旭岳二二〇八米)ニセイカウ(一七六八米)を望む邊に於ては、聚落の發達未だ比較的初期に在りと雖、その東西兩端に近けば開拓漸く歩を進め、移民の定着想像の外にあり。されば道路も本道中央地帯よりオホーツク海岸に通ずるものうちにては、人馬の交通最も頻繁なり。

本道の中央地帯より東南海岸即ち十勝釧路の方面に至る道は、上川盆地の南方富良野盆地より日高山脈の北部を越え、十勝川の流域に出でて海岸に達す。富良野盆地も上川盆地と同じく、本道の中央開拓地として有名なる處にして、石狩川の一支出知川は諸流を爰に集め、森林密生の地と着手後日猶淺き農牧場と交互し、一見有望の開拓地たるを想はしむ。旭川より南下せる道路は、ビエ川に沿うて幾多の村邑を連れ、名邑美瑛ビエの南方にて一小低丘を越

旭川・金山間

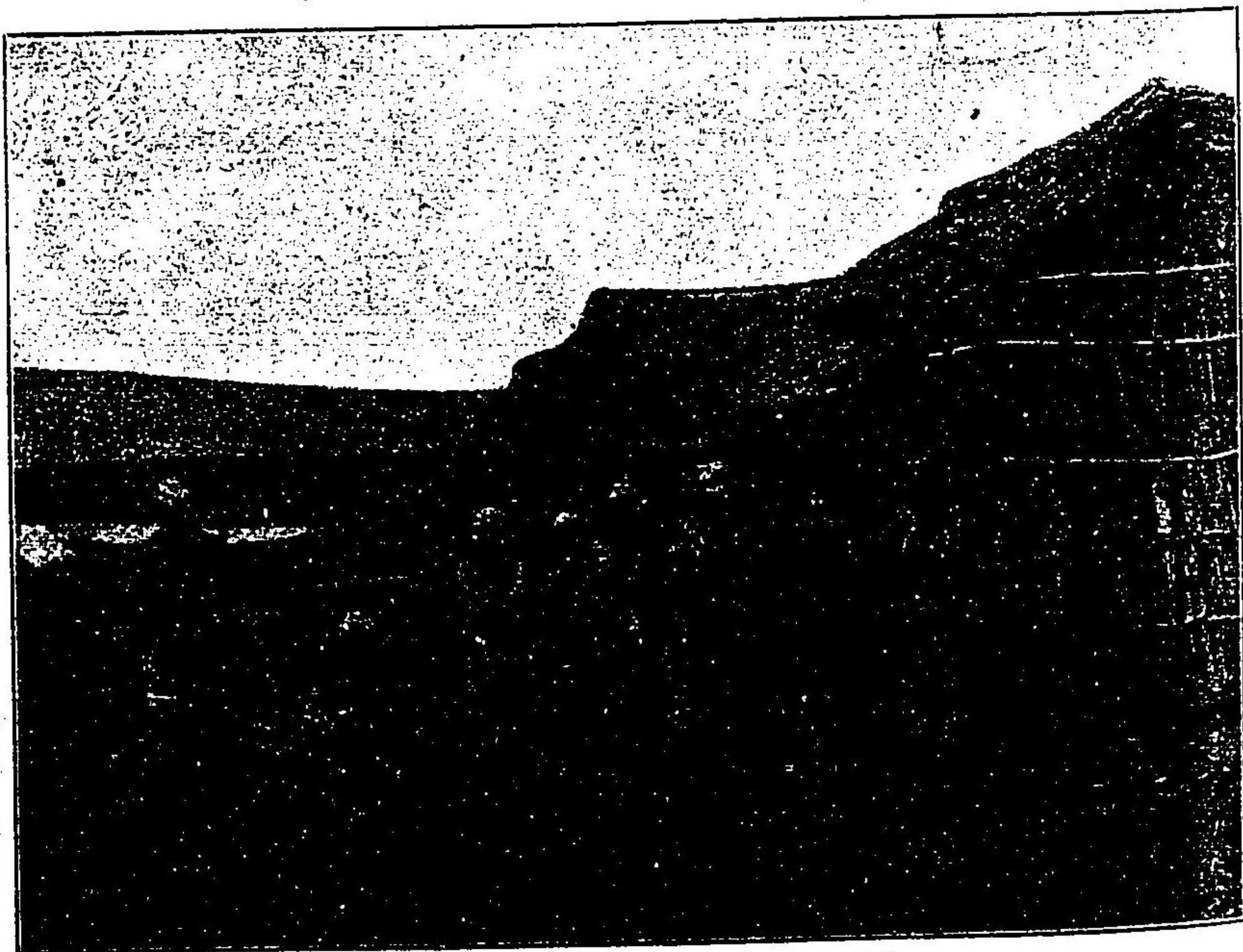
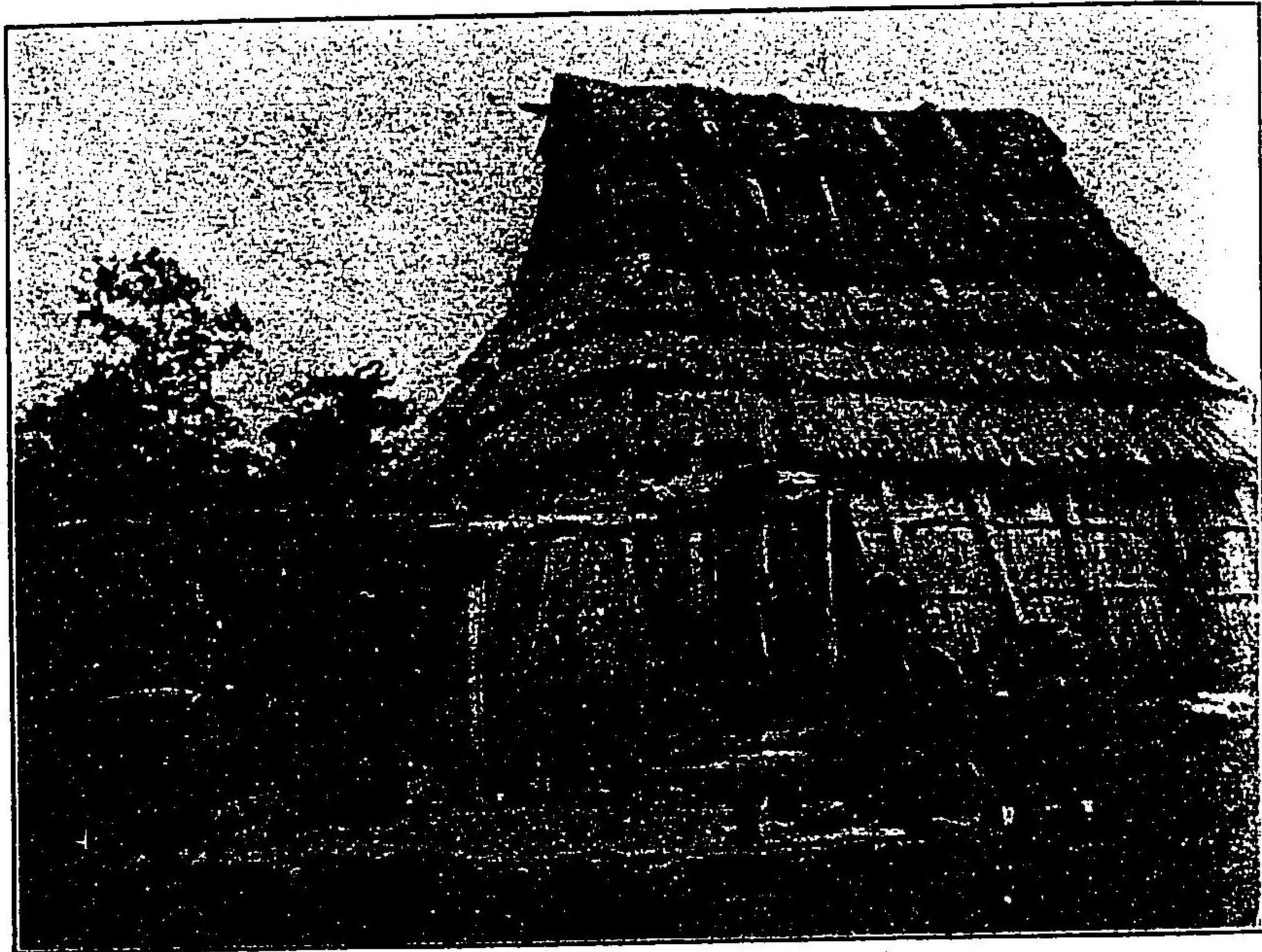
金山・帯廣間

え富良野盆地に入り、上富良野を経て下富良野に至る。上下の兩富良野は共に富良野盆地開拓の主要村落にして、下富良野は空知川に沿ひ、石狩平野の瀧川より來れる支路を合せ、交通上の要衝に當れり。旭川より此に至れる往還は、更に延長して夕張山脈の東麓なる一小村落金山カミヤに至りて盡き、是より東、空知川の上流に在る落合との間約七八里の距離は道路の改修未だ完成せず。この間南富良野の新開村あり。但し旭川より釧路に至る本道横斷鐵道の便あり。尙金山より南方國境を越え、膽振の東隅を西南流せる鶴川の溪谷に出で、その河口にある鶴川にて、日高の海岸に通ずる道路と合する間道あり。落合より東南行すること幾ならずして、石狩十勝の國境を互れる日高山脈の低處を越ゆ、標高一一五五米、鐵道はこの北方二三里の處を過ぐ。落合より東南下せる道は十勝川の一源サオロ川に沿うて東し、人舞芽室フタノキ帶廣オホノ幕別等を連れ、然る後東南轉して十勝川下流の右岸を下り、同川の分流大津川の河口にある大津に達す。この間十勝川の河邊に發達せる新開地の條劃は、上川盆地若しくは石狩平野に於けると同じく、概ねこの往還を基線となし、新興

網走街道

の都邑之に沿うて建設せらる。このうち帯廣は十勝平野に於ける經濟上の中心にして、創設以來僅に三十年を閱するのみなれども、市街頗る盛況を呈せり。この地より南方新開拓地を經、十勝の南部海岸なる茂寄に通ずる道路あり。又帶廣の東方幕別にて本往還と分れ、十勝川を渡り、十勝川の一流利別川と本流との會點に近きて洞寒シロヤメに至り利別川の河筋を縫うて北上し、釧路の西北部にある達別リケンベツに至りて二線に岐れ、一はその北々東を指し、國境を越え、北見網走川の上源を流に循うて下り遂に網走に達し、一は之と終點を同じうすと雖、その徑路を異にし、北進して國境を越え、北見常呂川の中流より野付牛ツクシの新開地を經るものなり。後者は北見國に入りて以來は、毎に前者と並進し、野付牛の南方にて、別に湧別常呂の兩河谷を連絡する内陸往還と相會す。但しこれは湧別川の畔なる野上にて、既述旭川と湧別とを連ぬる道路と結合するなり。上記の諸往還のうち、洞寒野達別間は、鐵道網走線の沿線に當り、數年來特に開發著しと雖、達別より北にあるものは、概ね陸路としては甚だ不完全なるを免れず。只野付牛より網走湧別に通ずるものは稍優良な

屋家のヌイア(甲)

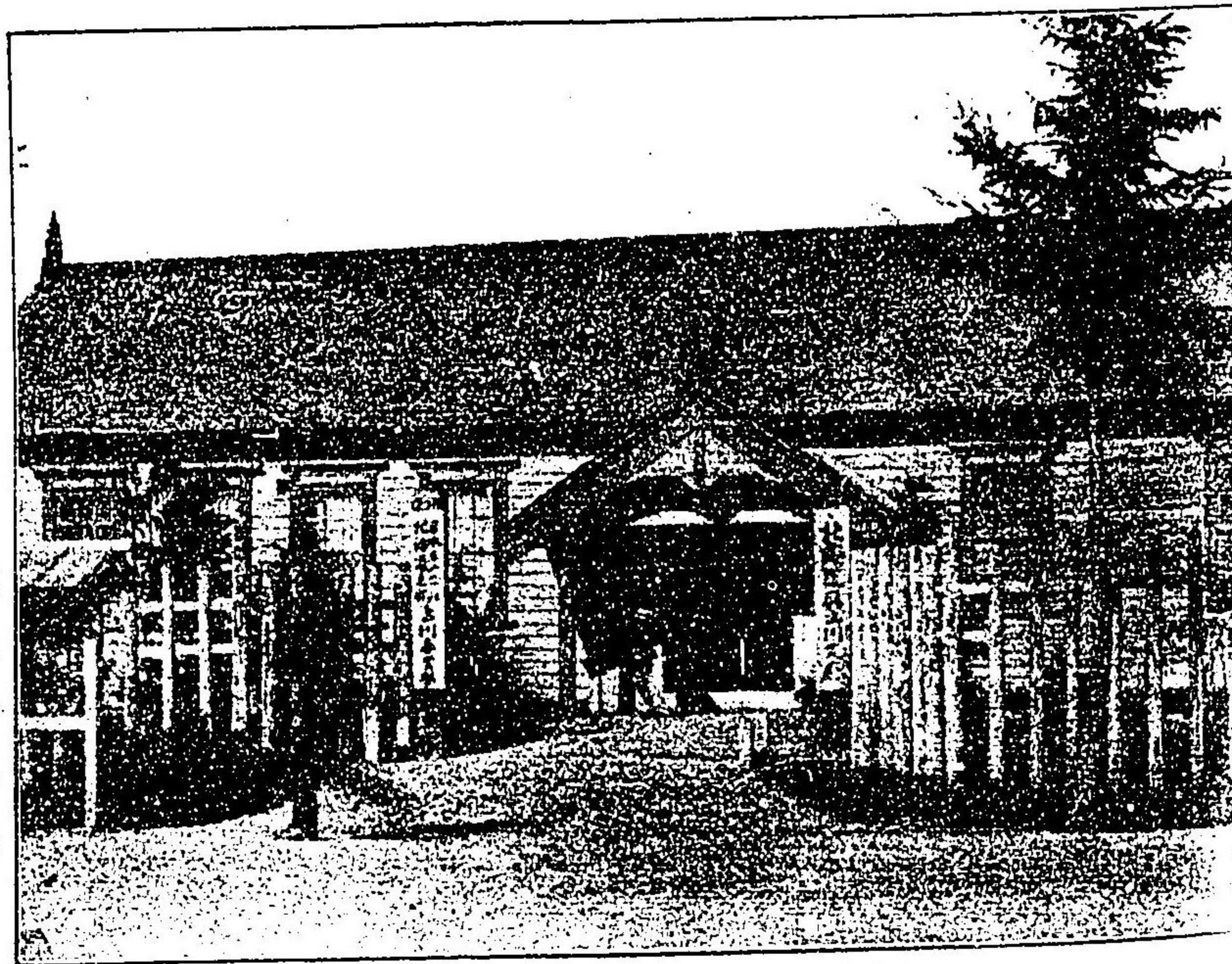


屋家及人婦ヌイア(乙)

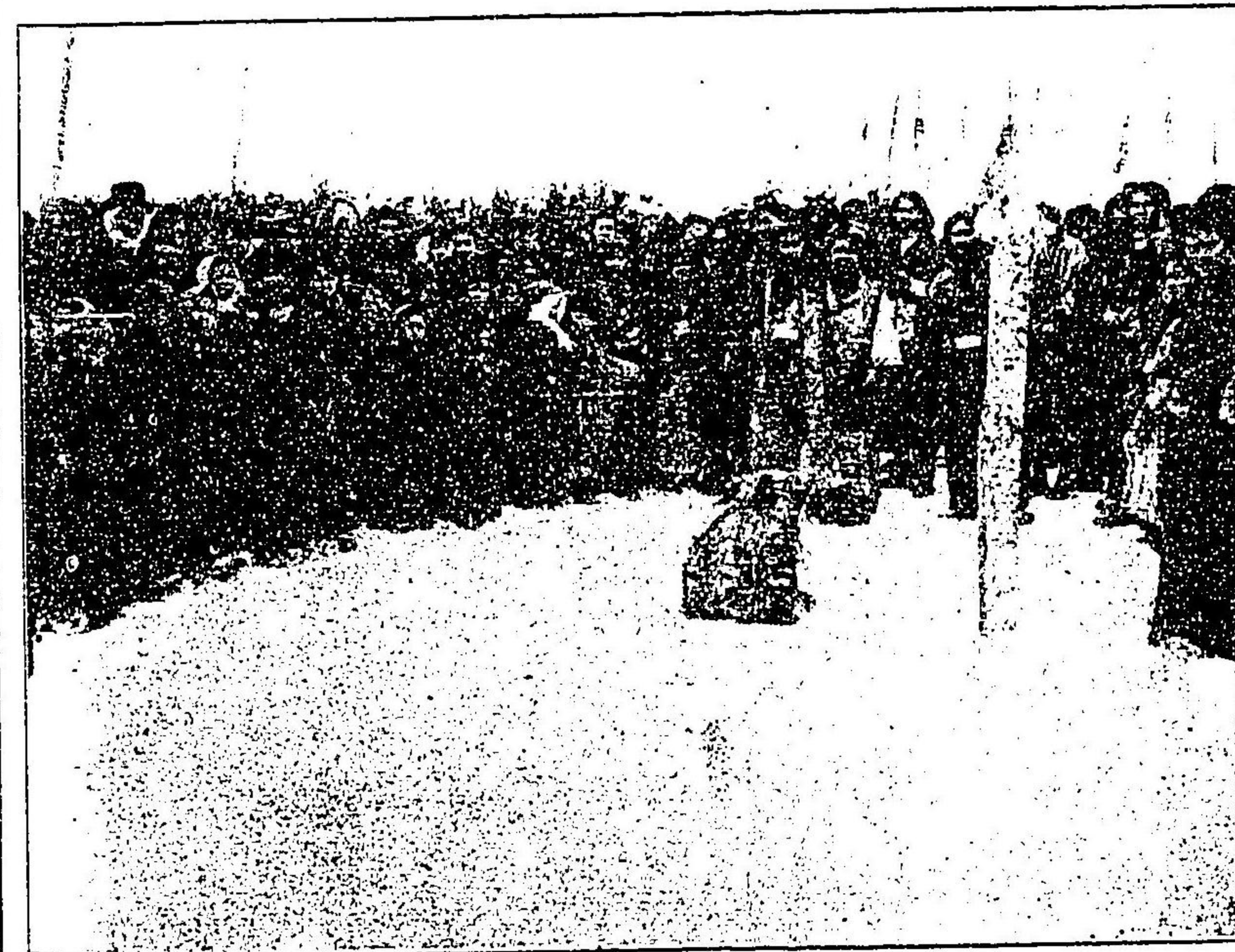
廳道海北(甲)



祭熊のヌイア(甲)



廳支川上(乙)

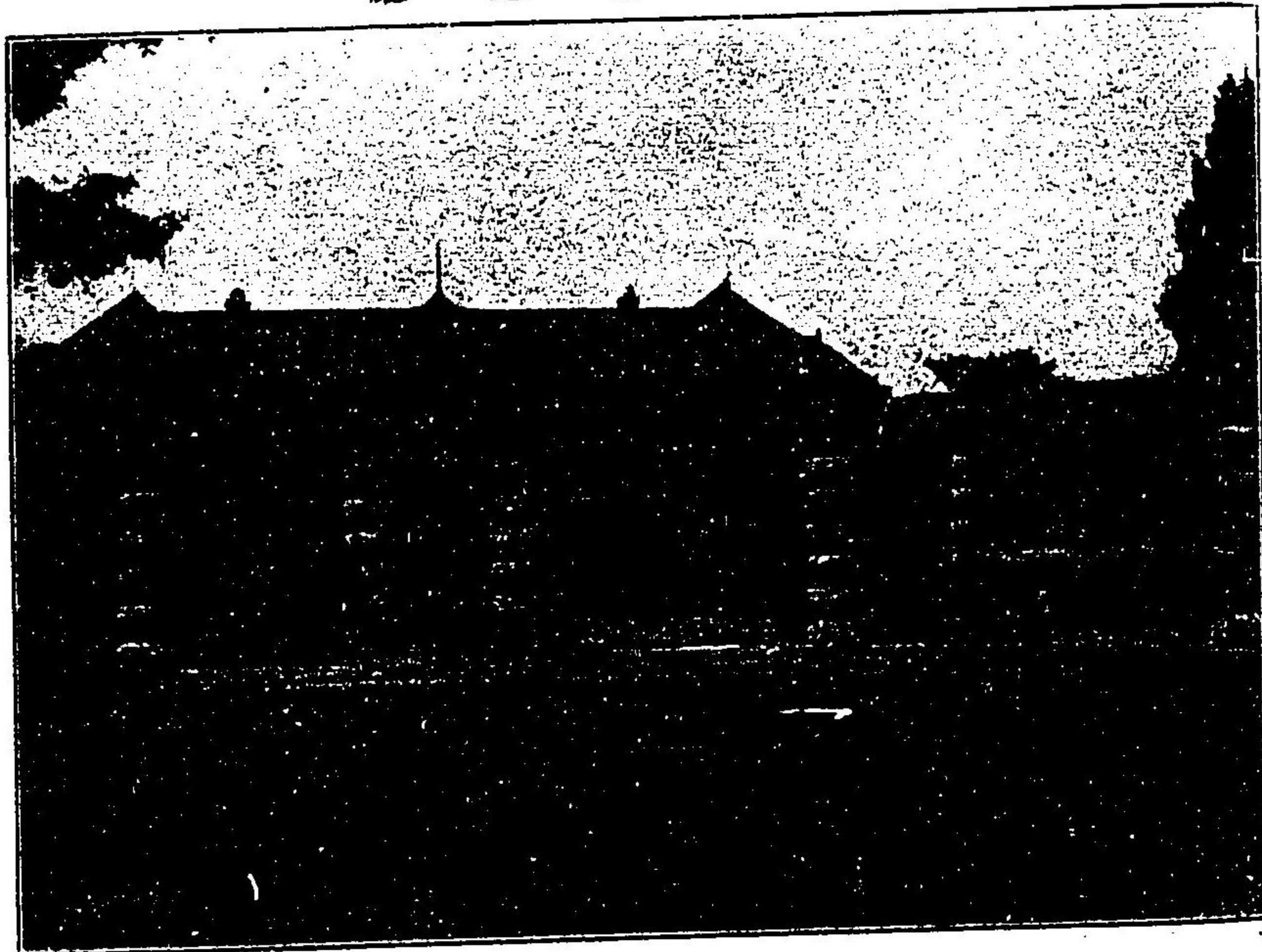


上同(乙)

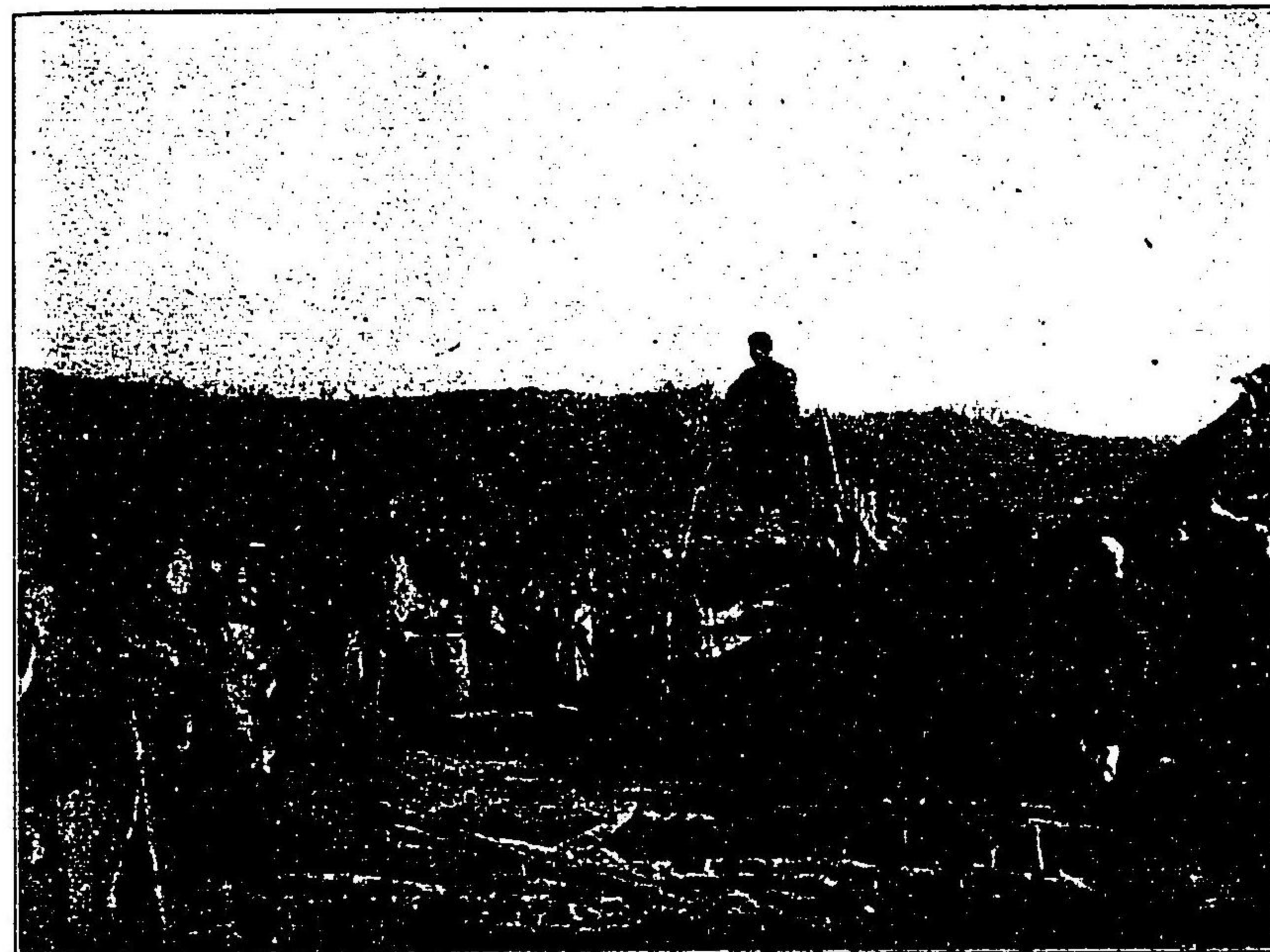
(第二十八圖)

(第二十七圖)

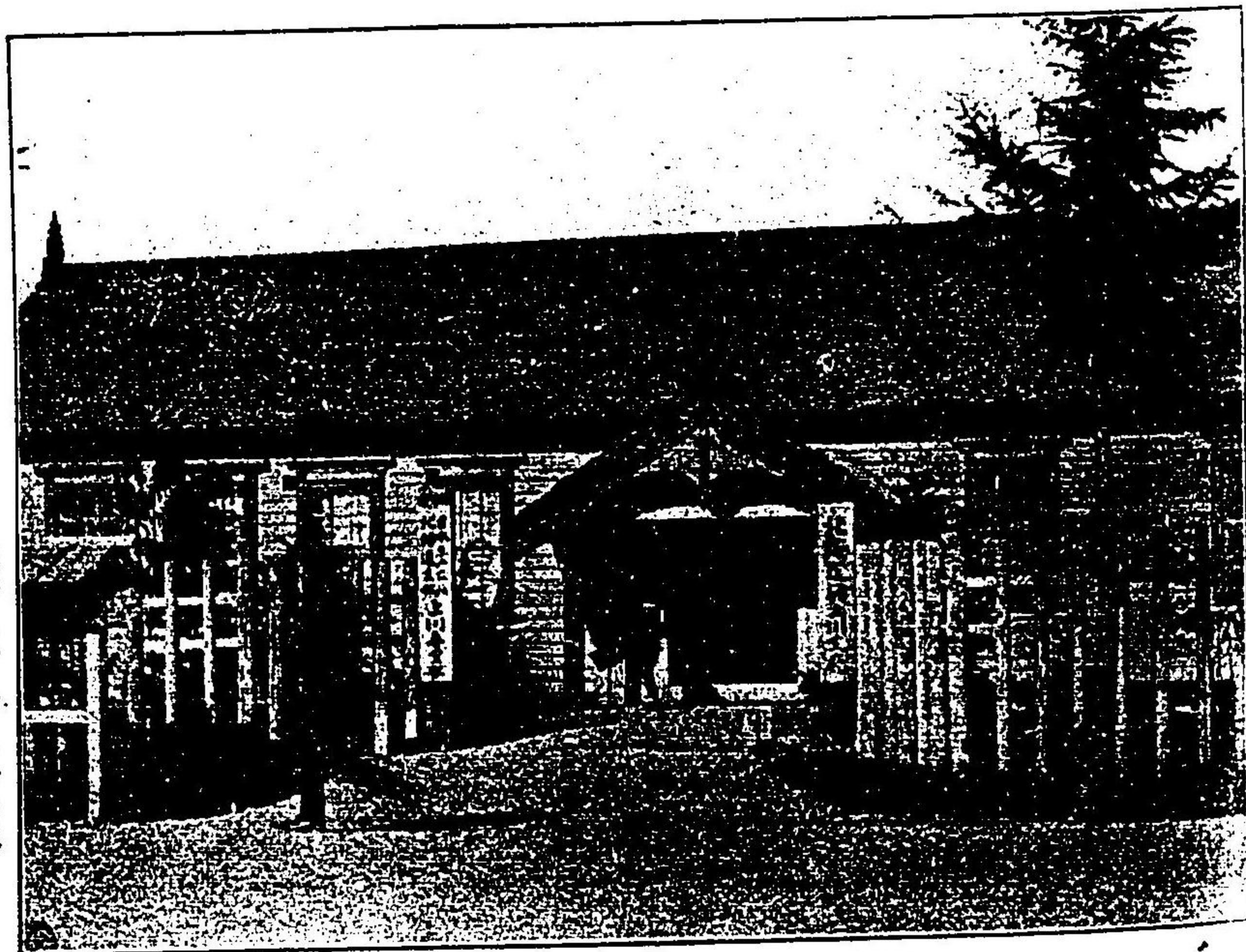
廳道海北(甲)



祭熊のヌイア(甲)

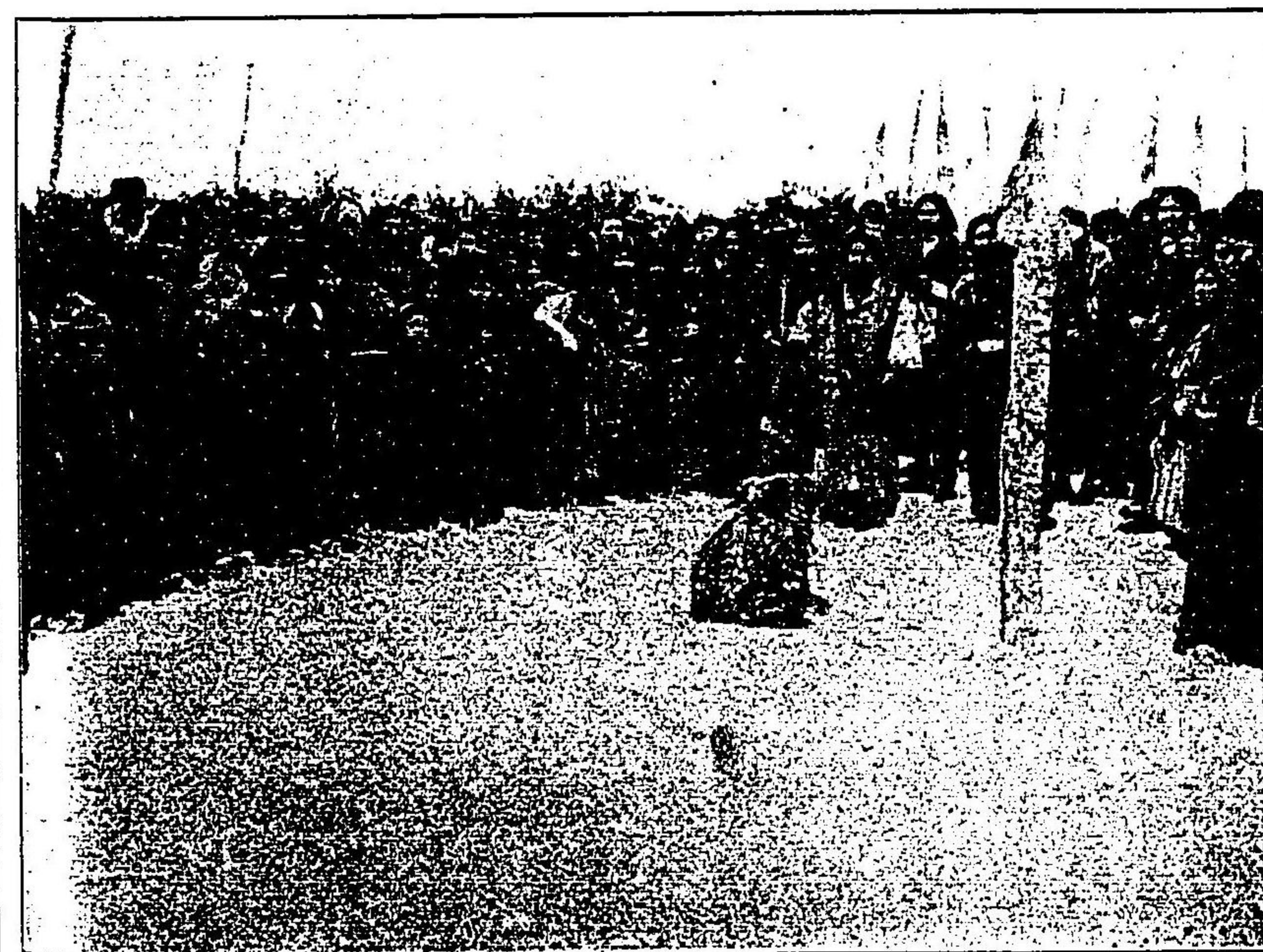


(第二十八圖)



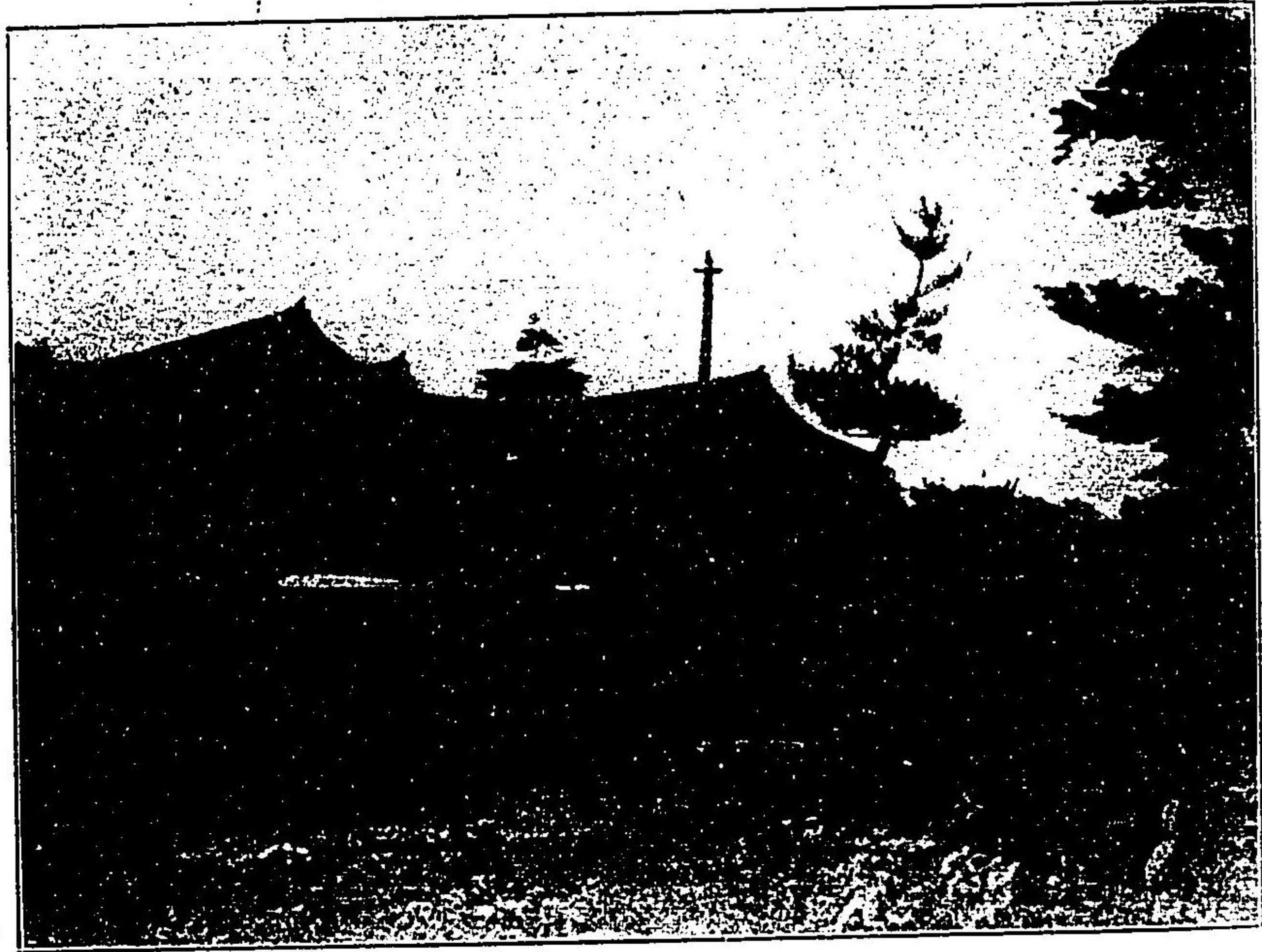
廳支川上(乙)

(第二十七圖)

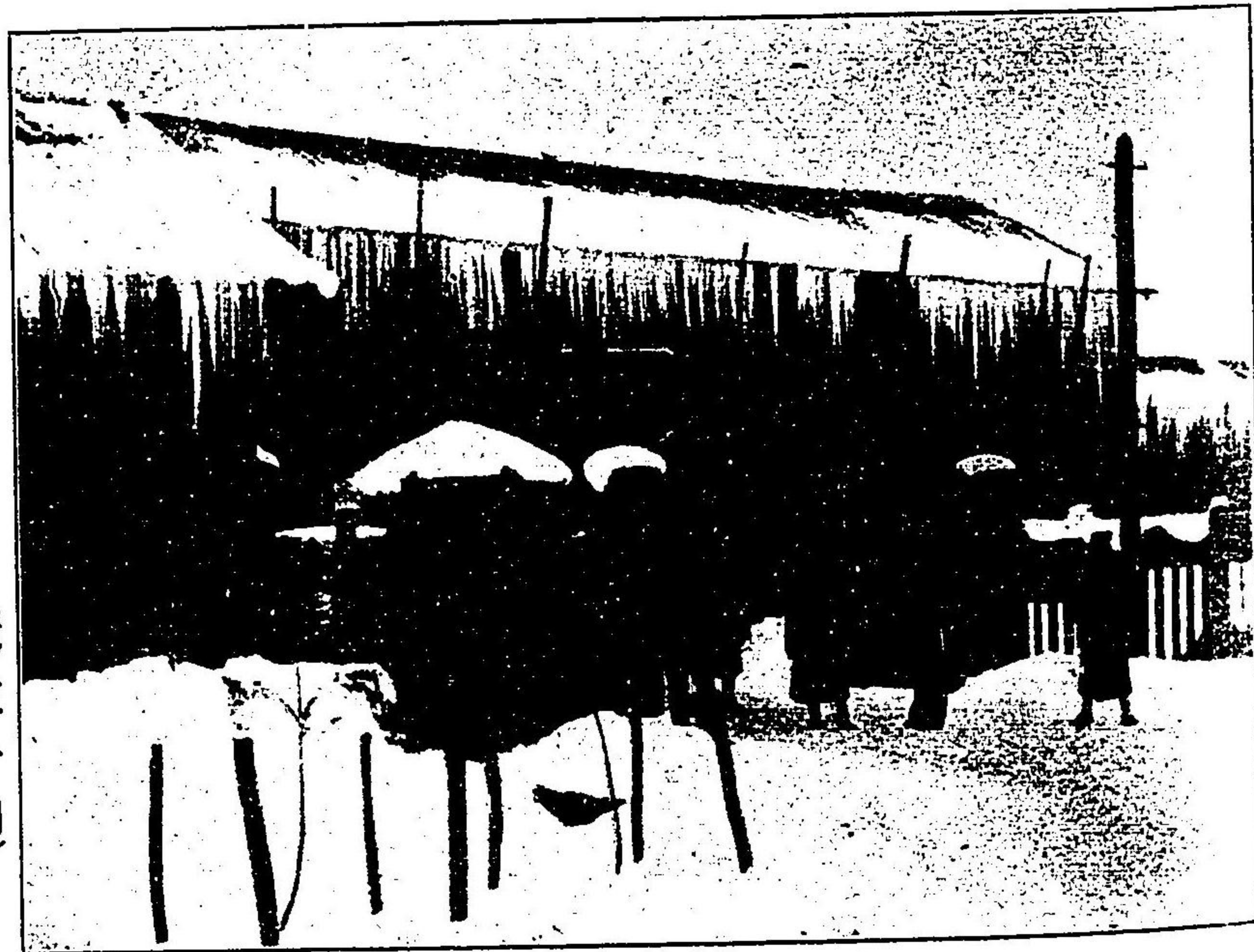


上同(乙)

院 訴 控 館 函 (甲)

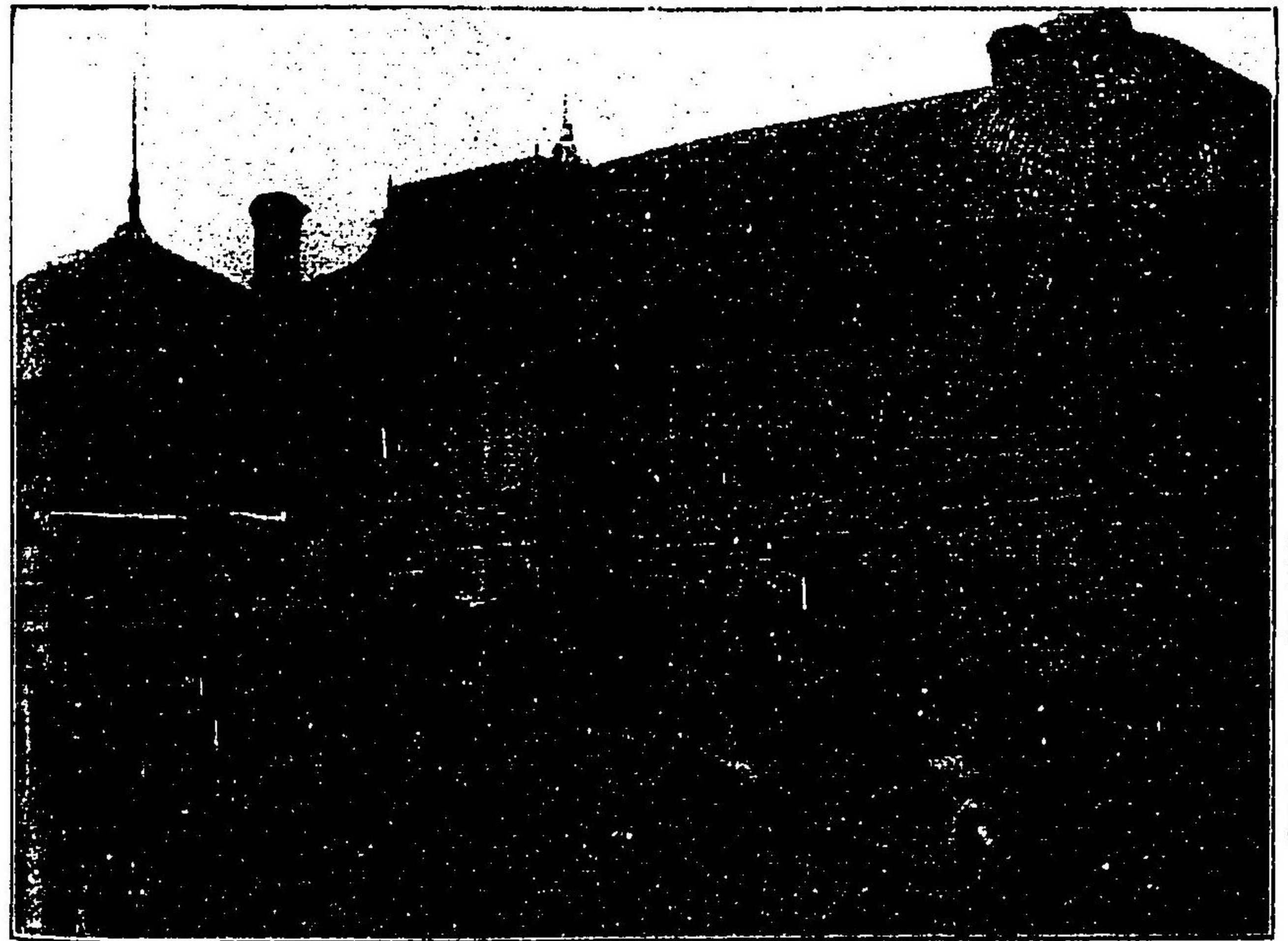


所 役 區 幌 札 (甲)



(第三十圖)

營 兵 川 旭 (乙)



所 役 區 館 函 (乙)

(第二十九圖)

館物博園物植學大科農幌札學大國帝北東 (甲)



所習實海臨路忍同 (丙)

(乙) 同附屬農場

(第三十一圖)

帶廣根室間

り。
 大津に於て東南海岸に達したる道路は、日高の海岸より來れる舊東蝦夷往還と合し、東北方十勝沿岸を傳うて根室に至る。沿道の地形は殆ど常に低き臺地性原野の海に終るところなるを以て、景觀頗る雄大に坂路は一般に甚だ乏し。耕作地も諸處に之を見れども、概ね自然の牧場をなし、通じて全道有数の牧業地を以て目せらる。この間上川盆地より來れる鐵道は、殆ど之と併進して現時釧路に終る。沿岸聚落はこの道路に沿うて起り、漁季には殊に頗る活氣を呈すれども、市街をなせるものは甚だ少く、十勝國の大津・釧路國の白糠・釧路厚岸霧多布濱中根室國の根室を除けば他は未だ言ふに足らず。釧路は釧路川の河岸に沿ひ、北方國境を越えて北見の網走に通ずる道路を會し、海陸の交通東南海岸中第一位にあり。又この道路の終點根室は本島極東の港市にして、その建設頗る古く、前諸港と同じく夏季漁業の中心地となすと雖、冬季は沿海凍結し、初春には流水凍り、夏季また濃霧の來襲多き地として、船舶の出入四時意の如くならず。

北見沿岸街道

尙根室より起り北見の海岸に通ずる道路あり、是は西別・標津等の沿岸名邑を過ぎ、知床半島の頸部を越えて五一〇米北見の海岸斜里に出で、それより網走能取常呂湧別を連れ、尙西北に海岸を辿り、紋別・奥部・幌内・禮文・枝幸・頓別・猿拂・泊内等を経て、本島の北端に近き宗谷に至り、既述稚内より來れるものと合すれども、一般に道路不完全にして行旅發達せず。

驛傳

本道の道路を述ぶるに際して一言附加すべきは驛傳の制なり。此制は徳川時代に起り其始め途上屋と稱へ人馬繼立所の名を冠し一は宿泊處となり一は人馬の繼立貨物の運送等行旅に便せしが明治三十三年以來官設驛傳所と稱し道廳は馬匹を貸與し補助金を與へ以て此業の勵行を力め現時全道中人馬繼立所なき處なきに至れり。驛傳所にて旅宿と人馬繼立以外郵便繼立を兼ねしめたるは軀幹部の北方に多く明治四十三年末には其數二十九ヶ所に及び尙今後毎年若干所の新設を豫定し以て内地の開發に便せり。

鐵道

鐵道 北海道の開發は交通の進歩と相俟ちて其歩を進むるものなるが故に鐵道の開設に關しては開拓の當初より銳意力を用ひ現時にありては概ね本

鐵道の疎密

島を通じて縦貫線の貫通を見るに至れり。然れども之を本州及び九州等の如く鐵道網の發達せる所に比較すれば、僅に其幹線を完うしたるに過ぎずして支線の發展の如き未だ幼稚なるを免れず。

今本島のみに就て之を見れば中央凹地帯即ち石狩平野に於ては鐵道の發達稍著しく、大小の支線を分ち内地諸地方の鐵道系を髣髴せしむるものあり。然れども此地方を除けば僅に一線の他の海岸地方に向うものあるに過ぎず。然も軀幹の北部を通ずるものありては未だ其豫定の終點に達するに至らず抑も本島に於ける鐵道の起源は九州島の鐵道の如く其始め石炭運搬を目的となしたるものなるが故に、比較的早く設けられ、何れの鐵道も炭田より起り石炭積出の港灣に到れるものなり。中央凹地帯の鐵道の如きは畢竟この種類に屬し當に其の建設最も古きものにして現今にありては又乗客貨物の往來亦瀕繁なり。而して一方半島部を通ずる鐵道線は内地と本島とを連絡する重要交通線たるに拘らず、其布設は前者より遙かに後くれたるものなり。

北海道の鐵道は種々の點より觀察して内地の鐵道と其趣を異にするもの多

色 鐵道營業の特色

しと雖、就中之が經濟上の性質より大に注目せざる可からざるは創設以來現時に於ても鐵道營業の方針は乗客よりも寧ろ貨物を本位とするの點にあり。次に注意すべきは其速度の内地の諸鐵道に比して一般に小なる點なり。蓋し第一に其貨物本位なるが故に、必ずしも瞬時を争ふの必要なきにより、第二に人烟甚だ稀薄なるが故に人口の密度大なる地方に於けるが如く速度の大なる必要を見ざるにより、第三に經濟上の一般現狀と相待ちて鐵道の速度のみ獨り特に甚大ならざる可からざる理由少なきによるなり。

鐵道の發達

北海道鐵道の起源は九州島に於けるよりも古く、既に明治十三年に於て始めて汽笛の聲を聞しなり。當時開拓使に於て拓殖の開始は第一に先づ地中の富源たる鑛物の採集にありとし、明治五年米國より地質鑛山の技師を聘し煤田地方に於ける鐵道架設の事をも調査せしも、財政の豊ならざりしため容易に其實行を見るに至らざりしが。明治十三年一月幌内炭山の開鑛と共に、幌内手宮小樽の一部間に鐵道敷設の工事を起すに至れり。之れを本道に於ける鐵道工事の嚆矢とす。同年手宮札幌間竣工し同十六年に至り始めて全線五十

函館本線

哩の開通を見るに至れり。明治二十二年北海道炭鑛株式會社は其拂下を受けて益線路の延長を力め、現時の所謂室蘭本線第一に敷設せられ、次で夕張山脈の西麓にありて運炭を主とする室蘭支線の敷設を見るに至れり炭鑛線是れなり。後別に政府は拓殖の進運を謀り、明治四十一年空知太旭川間三十六哩の敷設を了し、爾來線路の延長を力め遂に天鹽線十勝線釧路線等を完成せり、所謂北海道鐵道部線是れなり。一方には私設北海道鐵道株式會社起り本島の半島部を縦貫して函館より小樽に至る所謂函樽線(俗稱北鐵線)の敷設に着手し、明治三十七年に始めて竣工せり、是に於て炭鑛線北海道鐵道部線と相俟ちて本島縦貫の幹線成就するに至れり、明治三十九年鐵道國有法の公布と共に以上の諸私設線は相踵で買収せられ、現今に於ては全道の鐵道交通統一せらるるに至れり。而して現時其總延長は約七百餘哩に及び、尙各方面漸次延長しつつあるを見る。今先づ前例に従ひ幹線より順次支線に及び之を觀察せん。

函館より旭川に至る線路は鐵道統一以來函館本線と稱せられ、其延長實に二百六十五哩四鎖に達す。就中函館小樽間は元北海道鐵道會社の創設に係り、

室蘭線

小樽砂川空知太間は炭鑛鐵道、砂川旭川間は北海道鐵道部の建設なり。函館旭川の間は前述せる本道の國道に沿ふが故に、半島部にありては概ね山間を通じ、時に内浦灣に出づることあるも、山坡の終る處にあたり幾多の隧道竝に開穿せられ、線路の迂曲少しとせず。冬時は積雪線路を埋め汽車の進行を妨ぐることも屢あるは要するに地形の然らしむる處なり。函館小樽間にて驛の大なるもの獨り俱知安(一一哩)を推すべく貨物の聚散乗客の昇降最も著し。尙森(三〇、八哩)黒松内(八二、三哩)余市(一四五、五哩)之に次ぐ。小樽より札幌(一七九、一哩)を経て岩見澤に至れば、此處にて室蘭本線を合せて北進し砂川(二二六、三哩)深川(二四五、一哩)等の驛を連ね旭川に達す。此間深川より西に向つて留萌に至る留萌線を分派す。

函館本線より分岐し若しくは之と連絡せる線には室蘭本線留萌線並に運炭を目的とせる三支線あり。

室蘭線は前述せし如く元炭鑛鐵道會社に屬せしが、夕張山脈邊縁に横はれる煤田開掘に伴ひ、之が運搬線として敷設せられたるものにして現時にあり

留萌線

ても貨物運搬上本島有数の地位にあり。起點室蘭は函館と共に内地に向つて開かれたる咽喉をなし、内地連絡汽船の常に發着する處にして、殊に石炭輸出を以て著はる。本線中苦小牧追分は主驛にして、苦小牧は日高方面に出だす木材線(私有)載積の本線に連絡する處又追分は所謂夕張線を出だす處なり

留萌線は前述せし如く函館本線中深川驛より起り、天鹽山脈を横斷し西岸留萌港に達するものにして、此終點留萌港は西海岸中重要なる港市なり。

石炭運搬の鐵道は夕張線幌内線歌志内線の三とす(室蘭本線もおれど)共に北海道の幹線より東して夕張山脈の炭田に至るものなり。

夕張線

夕張線は既に述べたる如く室蘭本線追分に起り紅葉山(追分紅葉山間一五、五哩)を経て楓(楓紅葉山間三哩)に至るものと紅葉山より夕張(追分より二七、二哩)紅葉山より一一、五哩)に至るものとの二つに分る、夕張炭田の豊富なる石炭を運搬するを以て有名なり。

幌内線

幌内線は岩見澤より起り幌内太(岩見澤より幌内太六、八哩)を経て幌内(幌内太より幌内一哩)及び幾春別(幌内太より幾春別四、五哩)に通ずる小距離の鐵道なり。

歌志内線

天鹽線

幾春別は幾春別炭山産出の石炭聚散を以て有名なり。

尙砂川より起るものは東方歌志内炭山に至り其間九哩あり。

旭川より北方北見の稚内に向ひ敷設工事中にあるものは天鹽線と稱し將來本道縦貫線の一として重要なるものなれども、現時竣工せし處は七十哩一鎖にして天鹽川中流の沿岸恩根内迄とす。是は天鹽の東北部より北見の西北端に互り地方開拓上大切なる一線にして、此線の明治三十年始めて敷設せられたる以來漸く地方移民の業緒に就き線路に沿うて開拓事業發展せり。北端稚内に通するまでは地勢甚しく峻悪ならずと雖、全く荒蕪の地方を進むものなるが故に、全通を見るまではなほ多少の年數を要すべし。

旭川より東南樞幹の中央を斜斷して釧路に至るものを釧路線とす。函館本線と共に現時本島を縦貫する重要鐵道にして長さ百九十二哩一鎖に達す。初め上川盆地より富良野盆地を南走する間は新開地に屬し、沿道耕作地點々相連れども、樞幹部の中央山脈を横斷するに當り、線路の傾斜頗る大にして屈曲も亦甚し。石狩十勝の國境狩勝驛附近を通過するや長大なる隧道を過ぎ始

釧路線

網走線

めて十勝川の上源に至り、こゝに本道東斜面に於ける新開地に入り帯廣(旭川)帶廣間一一九哩(洞寒)利別(旭川)利別間一二五二哩(幕別)等の都邑を過ぎ、太平洋沿岸に出で更に東北に進みて釧路に達す。此線成るに至る迄は本道東西岸の交通は専ら船運によりて行はれ、冬期は殆ど全く交通機關杜絶し不便之に過ぎざりしが、此線竣工せし以來東西經濟上の連絡保たれ、樞幹部陸上交通の面目を一新せり。釧路の如きも開港場として並に奥蝦夷地方の重要港灣として近時市況頗る活潑となり種々の製造工業此の地に勃興しつゝあり。

釧路線上の一驛池田驛(旭川)池田間一二六九哩より起り北方千島火山脈の山地を貫きて北見の網走に至る鐵道を網走線と稱し、本別上利別野付牛等を経て北見の海岸網走に達し、池田網走間は百二十哩四鎖にして概ね十勝川の支流利別川及び常呂川の本流に沿ひ、兩者の分水界上比較的的低處に敷設せるため、工事の如きも容易に進捗せしと云ふ。沿線亦新開拓地として名高く大邑名村諸處に勃興せるを觀る。

以上の諸線以外に猶未だ全く着手せざる鐵道線には釧路より東して根室に

至るもの及び其途次厚岸附近より別れて北進し北見國止別に至り網走に通ずる諸線路計畫せらるゝも此工事未だ着手するに至らず。
今左に明治四十二年本道鐵道の乗客數及び貨物噸數を掲げん。

線路名	區	間	距離	主要停車場乗客數	主要停車場貨物噸數
函館本線	函館旭川間		二六五、四	函館 一、五七、七 大沼 一、五七、七 黒松内 三、〇三、三 余市 七、七、七 小樽 三、〇三、三 札幌 三、〇三、三 岩見澤 一、七、七 砂川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 旭川 三、〇三、三	函館 三、〇三、三 大沼 一、〇三、三 黒松内 六、七、七 余市 一、七、七 小樽 三、〇三、三 札幌 三、〇三、三 岩見澤 一、七、七 砂川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 旭川 三、〇三、三
釧路線	旭川釧路間		一九二、一	下谷野 一、五七、七 落合 一、〇三、三 利別 六、八、八 白糠 一、九、九 旭川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 砂川 三、〇三、三 札幌 三、〇三、三 岩見澤 一、七、七 砂川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 旭川 三、〇三、三	下谷野 三、〇三、三 落合 三、〇三、三 利別 六、八、八 白糠 二、九、九 旭川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 砂川 三、〇三、三 札幌 三、〇三、三 岩見澤 一、七、七 砂川 三、〇三、三 深川 三、〇三、三 旭川 三、〇三、三
網走線	池田網走間		一一〇、四	調査ナシ	調査ナシ

軌道

留萌線	天鹽線	室蘭本線	夕張線	幌内線	歌志内線	留萌線
旭川恩根内間	旭川恩根内間	岩見澤室蘭間	追分夕張間 紅葉山楓間	岩見澤幌内間 幌内太幾春別間	砂川歌志内間	深川留萌間
六九、六	二六、六	八六、七	二五、二 三、〇	一一、三 八、五	九、〇	二六、六
士別 三、三、一 名寄 三、六、七	士別 三、三、一 名寄 三、六、七	栗山 三、三、一 由仁 三、三、一 追分 三、三、一 早來 三、三、一 苫小牧 三、三、一 白老 三、三、一 室蘭 三、三、一	夕張 三、三、一 紅葉山 三、三、一	幌内 三、三、一 幌内太 三、三、一 幾春別 三、三、一	歌志成 三、三、一	調査ナシ
士別 三、三、一 名寄 三、六、七	士別 三、三、一 名寄 三、六、七	栗山 三、三、一 由仁 三、三、一 追分 三、三、一 早來 三、三、一 苫小牧 三、三、一 白老 三、三、一 室蘭 三、三、一	夕張 三、三、一 紅葉山 三、三、一	幌内 三、三、一 幌内太 三、三、一 幾春別 三、三、一	歌志内 三、三、一	

本道は内地の諸地方に比して小規模の軌道鐵道の敷設せらるゝもの甚だ少なし。而して其動力として汽力若しくは石油發動機、電氣等を用ふるものは全く之を缺き、僅に馬匹を使用するもの函館岩内旭川の三市街附近に設けられたるに過ぎずして、單に市街地と附近の重要村落若しくは鐵道驛間の交通を

函館馬車鐵道

岩内馬車鐵道

上川馬車鐵道

圖る。

函館より起るものは函館馬車鐵道株式會社線と稱し、函館區内より發し東進して湯川温泉に至るものにして僅に十五哩に過ぎず。

岩内に起るものは岩内馬車鐵道と稱し岩内町附近の小澤驛に至る線にして其長さ約十一哩あり。

旭川市街に起れるものは上川馬車鐵道と稱し、旭川停車場より起り町の北方に在る第七師團兵營地附近に至る線路にして其長さ僅かに四哩に充たす。

郵便・電信・電話 本道に郵便方法の制を實施せしは明治五年以後にして爾來年を追うて延長し其線路は鐵道並に主要なる街道に沿ふ、又電話も近時大都會には漸次架設せられ比較的遠距離なる處にても不便を感ぜざるに至る唯本道の通信事業に於て注意せざる可からざることは通信力の甚だ大なることなり。明治四十三年度遞信省の統計によれば人口に比較し通信力并に一般郵便物の集配力の大なること實に本邦中有數の地位にあり、今内外國通常引受高に就て之を觀るに人口一人に對し四七・八六にして本邦各府縣中千葉九九

二六東京(九二・五三)大阪(六六・五三)の次に位し、内外國小包郵便物の引受高一〇〇・二・二六一にして東京(五三・六二・七五九)大阪(二〇・四九・〇〇)五京郡(一・三九五・九二二)の次に位し其配達數に至りては東京(二・五三八・五〇三)の次にありて一六四八・〇二一なり。殊に内國發着電報數に至りては殆ど東京と比肩し、發信數は東京の三・五〇一・三三一に對し二・九四八・一五七、着信數にては東京の三・二八〇・八三二に對し二・九〇一・七〇〇とを算し殆ど遜色なし。此一例に就て觀察するも本道經濟上の事業は其内部に於て絶大なる潛勢力を有することを推測することを得べし。

本道の郵便管轄は札幌遞信管理局に屬し其區分左の如し。

一等郵便局	二等郵便局	所在地
札幌 大通二丁目	釧路國釧路郡釧路町大字入舟町	釧路國釧路郡釧路町大字入舟町
函館 函館區	根室國根室郡根室町大字花咲町	根室國根室郡根室町大字花咲町
船場町	北見國宗谷郡稚内町大字仲通一丁目	北見國宗谷郡稚内町大字仲通一丁目

小橋區
 旭川
 石狩國上川郡
 旭川町大字宮
 下道十二丁目

千島國國後郡泊村
 千島國紗那郡紗那村

今本道郵便物電信の發着數及び人口に對する比例率を掲ぐ(明治四十三年)

地 方	郵 便		物		電 信	
	引 受	配 達	件 数	口 交 換	發 信	着 信
北 海 道	七,五三,四二〇	七,三〇,九六五	四,七,六	二,九八,一五七	二,九〇,七〇〇	五

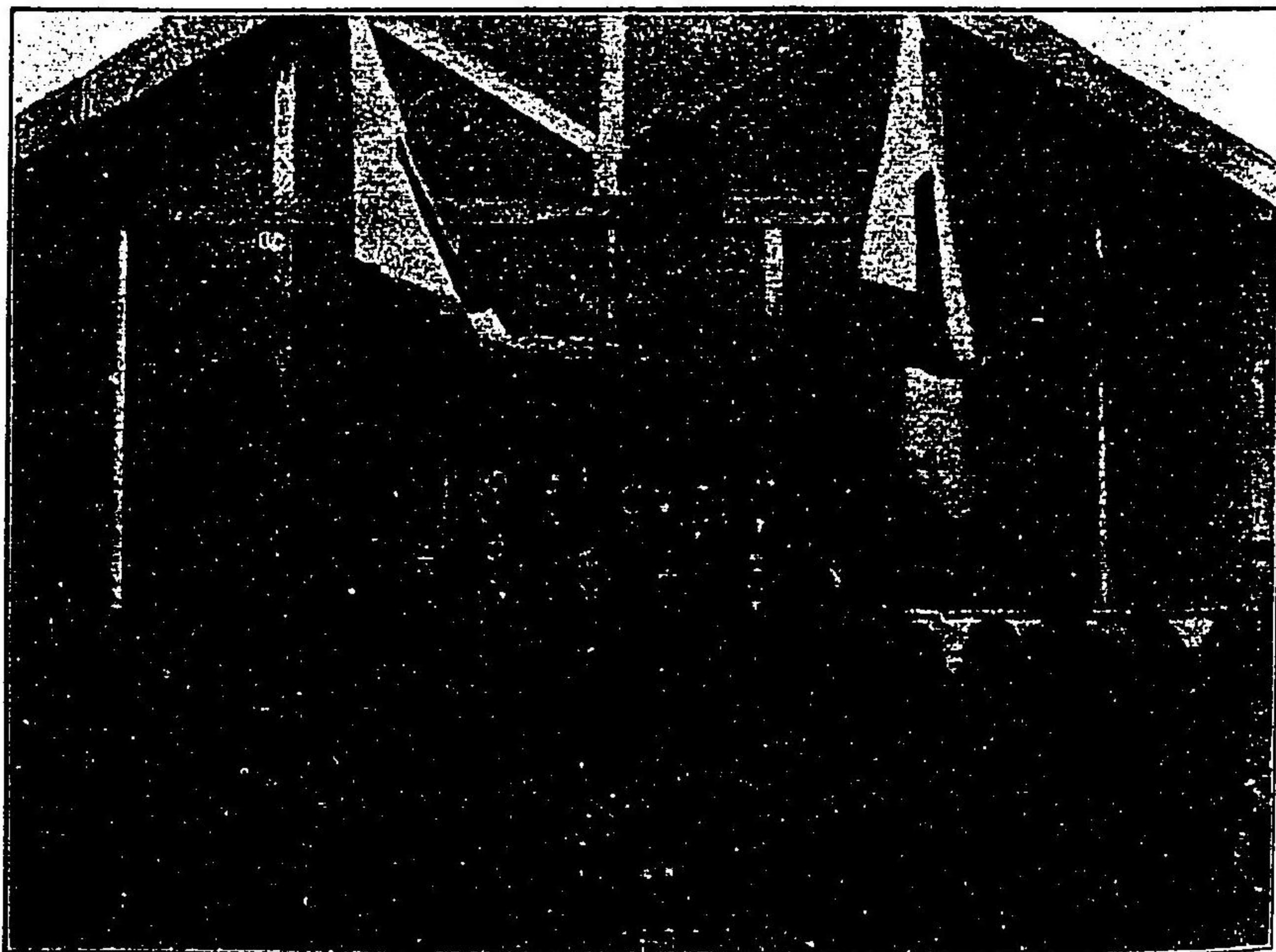
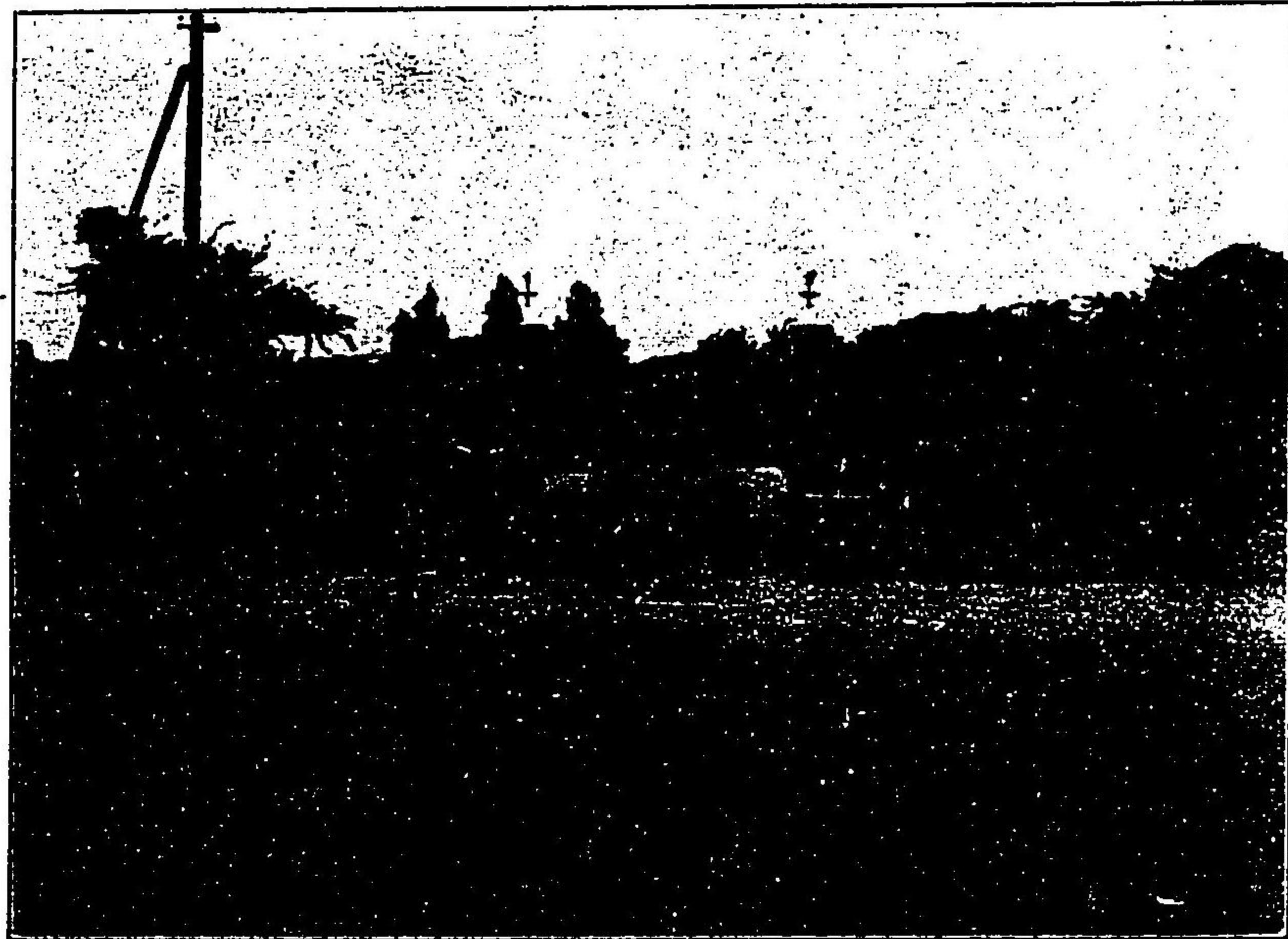
無線電信局
 本道には無線電信局根室國落石岬に設けられ(明治四十一年建設)本邦アメリカ間航行の船舶に對し無線電信の交換を行ひ成績甚だ顯著なり。特に其通信距離從來の經驗によれば最小限五百哩、最大限二千哩に及び、臺灣朝鮮を除き他の本邦内にある海岸局五局に比して單に銚子局に對して一步を譲るのみなり。

水運 本道の水運は主として海運にしてその發達専ら内地本道間の航海

に基、は言を俟たざるところなれども、尙この以外、別に本道開拓の大勢に支配せらるゝこと多し。蓋し前述せし如く本島の開拓は概ね沿岸より内地に向つて進行せるが故に、海岸の地先づ開けて大小種々の港市を生じ海陸交通の門戸を造りたりき。内地との交通關係の起源は之を詳にせざるも鎌倉時代の當時已に内地人の來往せし者あり、又内地よりの商船貨物運搬の目的を以て本道に航せしは足利氏の中葉以後なりし如く、而かも専らその衝に當りたるは福山江差函館の如き本道の西南沿岸に於ける諸港なりき。是等諸港の發達せしは其距離本土に近きことも一因たるべきも、武田氏松前氏等の居城地となりしより政治上内地商人の移住する所となりしこと與りて力ありきと云はざるべからず。而して内地にて此方面との航通を開始せしは、重もに敦賀新潟等の如き日本海岸の諸港にして下關大阪等の如き他方面の諸港より本道に航するにも亦日本海を通過したりき。而して本州東海岸地方よりの航通は其の開始前者に比して著しく遅れしは、東部地方の沿岸並に海上の天候に影響せられ、夏季濃霧深く海上を被ひ東風其勢を逞うすると多きによるなり。

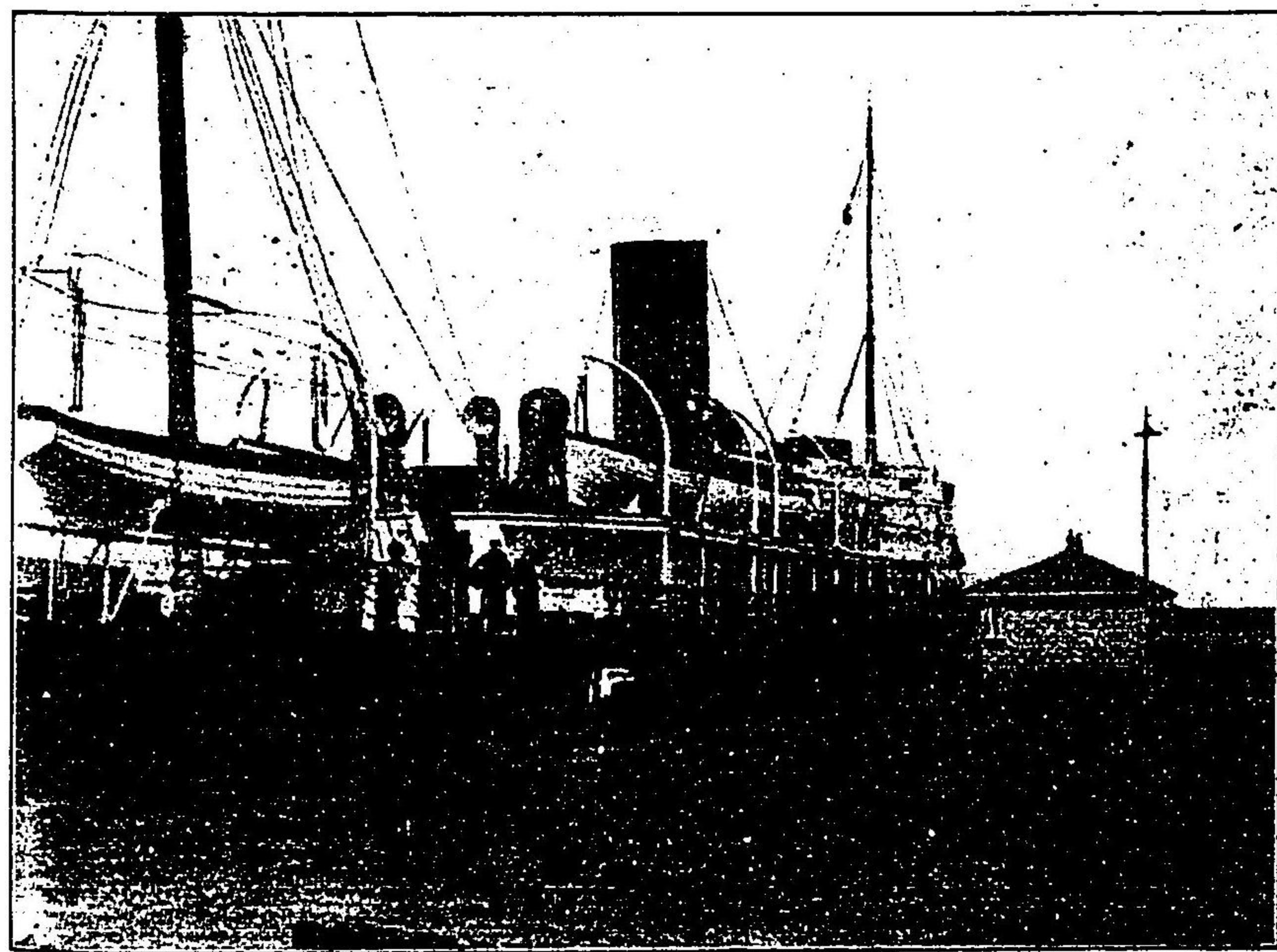
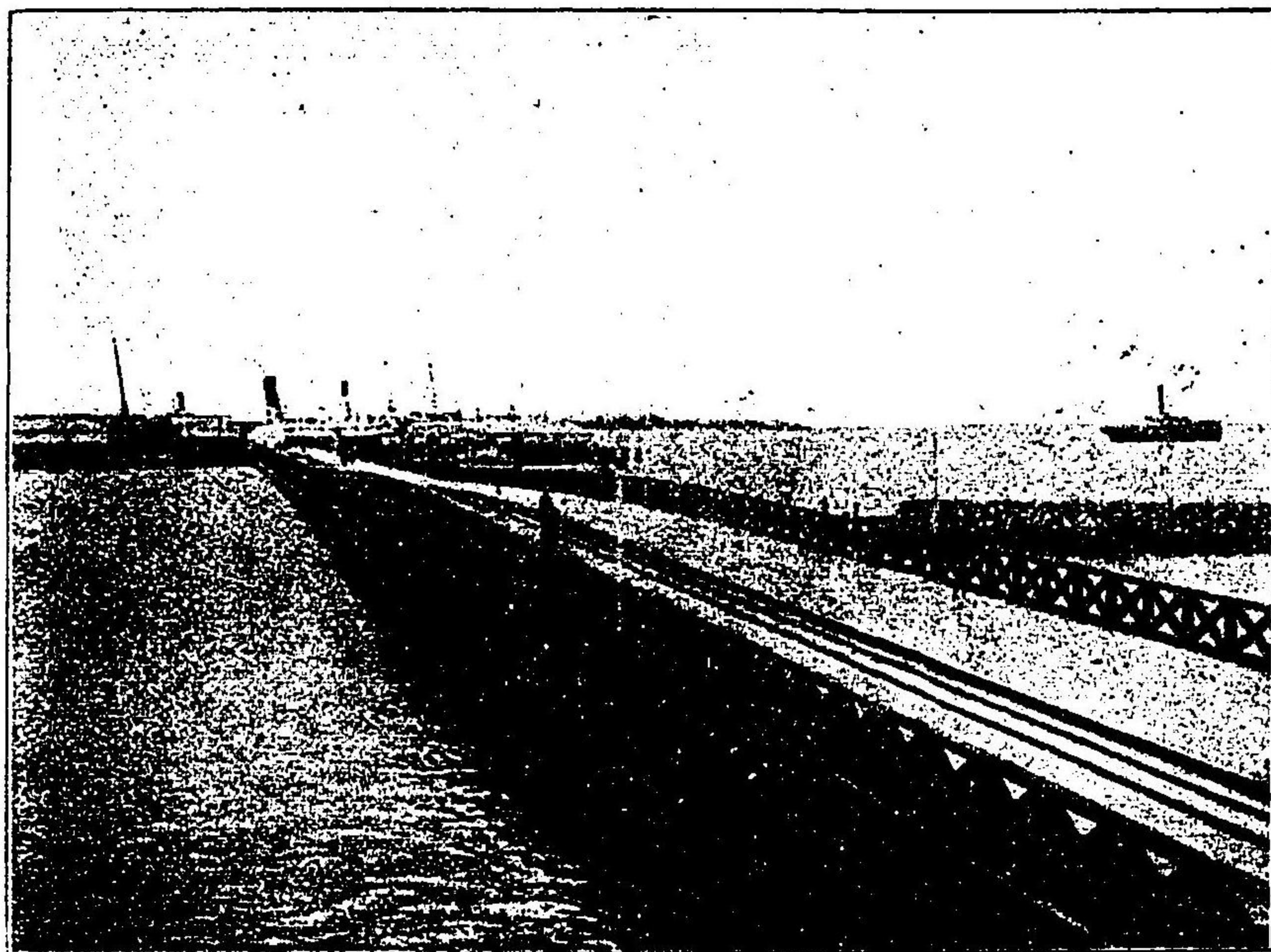
勿論西部との交通と雖、冬季は一般に風浪高き季節なるを以て航路杜絶し春より秋に互り漸く航通せしに過ぎざりき。徳川氏の末葉に及んでは蝦夷地の經營益急を告げ内地連絡のために或は海運事業を官營し、又之を一人に託し、以て内地と本道の西南諸港との間の連絡に励めしめしのみならず、函館を起點として東部諸港并に千島の擇捉島に至る迄航路を擴張せしなり。彼高田屋嘉兵衛の如きは當時北海航海者として最も有名なる者なりき。維新以後開拓使専ら本道の經營に當りしより益、北海道の發展に務め帆船又は汽船を以て函館青森間は勿論東京函館小樽間、青森室蘭函館根室間各處に於ける航路開かれ、小樽室蘭には埠頭を築き重要錨地には燈臺其他種々の航路標識を設けたり爾後開拓使は廢せられ三縣一局時代となりても水運の業益進歩し。明治十八年北海道廳起りてより特に此業に力を注ぎ秩序整然たるに至る。現時は道廳の命令航路以外に逓信省の命令航路あり、又全く一私人經營の航路ありて、沿岸は固より内地諸港若しくは東アジア諸港との間汽船の往復實に頻繁にして交通の便殆んど遺憾なきに庶幾きに至れり。唯本道の航運上困難を

學大國帝北東幌札 (甲)



校學小ヌイア廣帯 (乙)

橋 棧 館 函 (甲)



(第三十三圖)

丸村田船絡連間館函森青 (乙)

感ずるは冬季の航海なり。殊に東北オホーック海並びに根室近海は沿岸屢凍結して海上には流水浮動すること年々相次ぎために定期の航路は其期間中は殆んど中止の有様を呈すること是なり。又夏季東部海上方面は一帶に濃霧屢海面を掩ひ殆んど咫尺を辨せず、爲に航海屢妨げらるゝことあるは甚だ遺憾の事なり。東部地方の開発一般に遅々たる如きも是等氣候に原因せる航通の支障大に與りて力ありと云はざるべからず。

東廻り線

本島及び内地間の航路の主要なるものは日本郵船會社經營の神戸小樽東廻り線なり。即ち神戸より發し横濱、荻濱等に寄港して函館小樽に至るものにして航路の度數、頻繁に船舶亦大なるものを用ひ、經營も頗る順境を呈す。尙同會社の營めるものにして逓信省命令航路に屬するものは青森室蘭間を航する本州北海道連絡線にして二隻の船舶を用ひ毎日一回兩港の間を往來す。其他鐵道院の直營に係る青函線ありて特製の汽船毎日二回函館及び青森を「出帆」して兩港間の連絡を掌れり、其の他社外線にして西廻り即ち神戸を起點として日本海を經由し小樽に至るもの并に東部諸港と内地との間を往來する航路

青函線

西廻り線

は甚だ多く是等は或は本島産出の林産物及び水産物を本島以外に輸出し、種の日用品等を本島に輸入するに止まらず、尙外國との間をも連絡するものあり。

函館樺提線

本道沿岸航路の主要なるものは悉く道廳の補助航路に係る。就中日本郵船會社の經營せるものは函館網走樺提線にして大形の汽船三隻を用ひ函館樺提(紗那)間は毎月三回發航し往復とも釧路根室に寄港し尙時季により往復途次乳香路斜古丹藥取内保床丹瀬石等に寄港す。函館網走間の線は毎月三回發船し往復共に釧路厚岸霧多布根室に寄港し尙時季によりては往航又は復航泊羅白斜里に寄港す。函館根室間は六月より九月まで毎月二回發航するなり。

函館網走線

以上の線は季節によりて其航路の終點を變更することあり。

小樽稚内線

小樽稚内航路は千噸未満の汽船一隻の外豫備船を有し季節により毎月五回乃至三回小樽を發して稚内に至り増毛焼尻天賣鬼脇鷺泊香等に寄港す。小樽網走航路は亦千噸未満の汽船二隻を用ひ季節によりて毎月二回乃至四回發船し往復途次稚内枝幸雄武紋別湧別常呂に寄港し尙興部斜里に碇泊することあり。

小樽網走線

その他の航路

あり。他郵船會社以外の汽船會社にして同じく道廳命令航路小樽天鹽線あり、小形の汽船一隻を以て季節により毎月二回乃至四回小樽を發し往復共に増毛留萌苫前初山別遠別に寄港し鬼脇鷺泊にも寄港することあり。函館大津間の航路は小形の汽船二隻を用ひ季節により毎月四回乃至六回函館大津の間を航し浦河廣尾に寄港す。根室近海線は小形船舶二隻を以て根室斜古丹間(水晶島ユール)鹽津島多樂島寄港根室白糠止(東沸)瀬石植内乳香路根室羅白間(往復とも標津)別海春別重別先無異寄港根室泊間(往復航共に秩荊)等を航し其季節並に回數の如きも一定せず、其他函館瀬棚線は汽船一隻を用ひて毎月三回以上五回函館瀬棚間を航し福島吉岡福山江差熊石久遠釣掛太櫓に寄港し又臨時に富津岩内及び青森に寄港することあり。

九春古丹線

尙北海道と樺太間を航するものに九春古丹線と稱するものあり、逓信省命令航路にして日本郵船會社之を營み稍大形の汽船二隻を用ひ季節によりて毎月二回乃至五回以上函館大泊(九春古丹)間を航し往復共に小樽に寄港す。此の他北海道廳の經營を離れて樺太廳の命令に屬する樺太東西海岸線の二

河川の航通
石狩線

線あり。大阪商船會社の經營する處にして東海岸線は夏季のみ函館を發し小樽を過ぎ樺太大泊に至り東海岸の諸錨地を經由して再び大泊に戻り復た函館に來るもの、西海岸線は小樽より發し大泊に至り樺太西海岸諸錨地を連ね大泊に歸り小樽に着するもの是なり。此線は本島より樺太に至る交通上最も重要なるも其詳細は樺太の條に於て述ぶべし。

本島の河川は其長大なるものに乏しからずと雖占居の發達未だ洽からざると河道往々峽流淺瀬あるか或は盛に迂餘曲折し堆木諸所に横るため河流の定期航路の如き未だ盛なるに至らず。唯石狩川のみは本島の重要部を流るるを以て道廳は夙に之が航通に就て意を注ぎ命令を下し石狩線として定期航路を開き即ち三十噸餘の汽船二隻及び若干の淀川船小廻舟を用ひ江別石狩間(四月より十一月まで毎月一回乃至四回發船し往復に茨戸・ビトイ・當別・太寄港)江別月形間(四月より十一月まで毎月八回乃至十三回發船往復砂濱札向・下達布・上達布・美唄・達布・美唄・狐森・枯木寄港)月形札的内間(四月より十一月まで毎月二回乃至四回發船し往復札比内・晚生内寄港)を航し石狩河道沿岸の物資の上下に多大の便宜

を與ふ。

左に北海道本島に於ける明治四十三年の汽船帆船の現況を表記して、讀者の参考に資す

地 方	船 種	登 簿 船		不 登 簿 船		計	
		船 數	噸 數	船 數	噸 數	船 數	噸 數
北 海 道	帆 船 汽 船	一三三 一三七	三三六 六九一	一三九 一一一	六一〇 一七三	一七六 一三四	三三三 一三〇六

第三章 産業

一 農 業

北海道は帝國の北域に位し、其風土は自から内地と趣を異にせると共に人文の方面に於ても亦別に新天地を作り、特に開拓に着手せし以來僅に四十餘年を経たるに過ぎざれば、一般産業の發達は形式内容共に尙ほ初期の程度に

概説

あると同時に一方に於ては別に新機軸を出だし、到る處清新活躍の氣風の充滿せるを見る。殊に農牧の經營はその範をアメリカ合衆國に取りたるところ尠からざるを以て耕牧地の劃定、種子の撰擇、播種收穫の方法並に生産の利用盡く内地に從來未だ經驗せざるところを試み、その成績また大に見るべきものあり、今農業の全般に亙りて一瞥せんに、地形平地に富み又臺地丘陵等も多ければ、農に適する所頗る廣く其面積牧場を除くも猶ほ百三十萬町歩を算し其本道總面積との割合は内地の總面積と耕地との割合即ち百分の十四に近く、而かもその現耕地は未だその半にも達せず。全道の總生産七千萬圓のうち、農業は三千万圓に上りてその首位に立てり、而してその最も土地に適せるものは、小麦・燕麥・大豆・小豆・馬鈴薯・苜蓿・玉葱・亞麻等なるべく、その質の佳良なる帝國內殆ど北海道特有のものに見倣すべし。農業者は内地よりの移住者年々萬を以て數ふれども、未だ耕地に對する數甚しく疎にして兼業者をも加へたる現農業者約八十萬人(明治四十三年末總人口百六十一萬餘人中農業者約五割と計上せらる)に對し、向後二百餘萬人即ち現在に三倍せる農業者の移

住を必要とせり。更に畜産の概況を観るに、本道は興羽と共に我國の驥北と稱せらる處にして、自然の大牧場は到る處に横はり、その牧場に適せる處として應の概算せるところに據れば、その廣さ農耕地よりも大にして、約百四十萬町歩即ち全道の總面積に對し百分の十五に垂んとせり。家畜のうち馬の飼育は特に良成績を挙げ、牛豚またよく蕃殖し、酪業に至りては我國第一の聲譽を擅にせり。されば帝室の御料牧場をはじめ、二の國立種馬牧場、二の軍馬補充部支部、一の國立種畜牧場その他公私設の牧場多數を有するは蓋し本道の他地方に對して大に誇となすところなり。之を要するに本道の農牧場産は比年その産額を増加すると同時にその質益々精良に趨き、その生産は本道は勿論國內諸地方に消費せらるる外、更に又外國に輸出せられ特に苹果・玉葱・燕麥はシベリア地方人の必需品として歡迎せられ、玉葱の如きは全産額の大部分は輸出に供せらる。

農牧業に關する施設も漸次普及し、農事試驗場並にその支應も設けられ、その他一般農牧業の進歩發達に關する實施獎勵も逐年盛んとなれり、一面ま

た農業教育を施すべき簡易の農學校として 北海道空知農業學校あり、石狩國空知郡岩見澤町に設けらる。特に現時の東北帝國大學農科大學並にその前身たる札幌農學校は、全道の開發に關して、理想を提供し實際を指示したる過去並にその現在の成績は、永久に記憶せらるべきものなり。この外公私立の農牧發達の機關施設は一々枚舉に遑あらず。

左に農事試驗場、蠶業講習所、官設牧場、軍馬補充部支部、種馬所等の所在を示さん。

- | | |
|----------|----------------------------|
| 北海道農事試驗場 | 石狩國札幌區北二十條西十丁目 |
| 同 支場 | 渡島支場 渡島國龜田郡大野村 |
| | 上川支場 石狩國上川郡永山村 |
| | 十勝支場 十勝國河西郡帶廣町 |
| | 北見支場 北見國常呂郡野付牛村 |
| 北海道蠶業講習所 | 石狩國札幌區北一條西十九丁目 |
| 新冠御料牧場 | 日高國 <small>シナイ</small> 靜内郡 |

耕地

日高種馬牧場	日高國浦河郡西舎村
十勝種馬牧場	十勝國河東郡音更村
月寒種畜牧場	石狩國札幌郡豐平村
軍馬補充部釧路支部	釧路國白糠郡白糠村 (別にこれが派出所及出張所あり)
同 川上支部	同 國川上郡熊牛村
北海道廳種畜場	石物國札幌郡平岸村大字平岸字真駒内
北海道種馬所	膽振國山越郡長萬部村

耕地 北海道は移民の來住によりてはじめて産業起るべき地方なるが故に、内地の如く地形の良否を以て直に現耕地の廣狹を察するの主要材料となすこと能はず。地形平坦にして地味また佳良なる處と雖、移民の定着不十分なれば耕地發展するに由なし、然り而して移民の多寡を決するものは氣候の良否交通の難易、日用品需給の便否、その他諸般の經濟的事情に因ること大なるは勿論なれども、別に又植民適地の選定の遲速に因ることあるを思はざるべからず。半島部が地形上山がちなる部分多く、低地極めて僅小なるに拘らず、

夙に開けて耕地の發展は原始林を拂ひ、緩傾斜地を冒し、主要交通線の左右に沿うて開拓せられたる様は宛然奥羽地方に彷彿たるものあれど之に反して、**軀幹部**は傾斜地は勿論低平なる處と雖、往々自然の儘なる林地又は原野に委せらるること尠からざるは、實に之を證するものと謂ふべし。全道開拓の中心たる石狩平原の如きも、猶且その南部石狩膽振の國境に互り若しくは此平原の北部に方りて、巨大なる樹木より成れる森林を留め、或は綠草の遠く浪打てる原野を存するあるを觀るなり。東部にある十勝釧路根室の諸平原の耕地として利用せらるゝもの未だ少き蓋し亦偶然ならざるなり。

半島部の耕地はその分布概ね内地と同じく河川の沿岸低地若しくは海岸平地に集り、その廣さいづれも狭小なり、渡島にありては龜田の北西方に擴まれる大野川附近の平地、江差の北方厚澤部川の小平野は田畑割合によく開け、地味また肥沃にして米大豆燕麥馬鈴薯等の收穫頗る多し。この外割合に早く占居せられたる聚落の附近には傾斜地をも利用せる耕地を見るべし。總面積に對する現耕地の百分率は明治四十一年末に於て一割に近く、可耕地の大半

は既に耕作せらる。後志に於ける耕地分布も亦渡島に類し、利別尻別余市の諸川その他河川の流域は耕地に利用せらるる處頗る多く、中には現時開拓の進歩迅速なるものあり。唯何れも各處に散在し、一處に集團するものとは少し。利別川の下流に擴まれる瀬棚の平地は農産割合に豊富を以て聞え、余市川平原の苹果菜豆は本道の名産たり。一般に後志は傾斜地の耕地多し。總面積に對する現耕地の百分率は一割を出で、耕地の發展は可耕地の三分の二に及びて全道第一に位せり。半島部の東の大半を領せる膽振はその一端軀幹部に入る。このうち所謂半島部をなせる處は大部分膽振火山地に當り、その噴出に係れる碎屑物は裾野をなし、そのよく分解霉爛せる處は開墾地となりて盛に經營せらる、蝦夷富士の東北西の麓、尻別川の流域に起れる俱知安平原は這種の耕地として最も名高く、その農作地の廣きこと半島部第一に居り收穫量の大ききこと亦之と同じく、大豆燕麥菜豆の産に名あり。俱知安平原以外は小河川の下流或は洞爺湖邊等に新開地を見れども、いづれも規模小なり。總面積に對する現耕地の百分率は膽振全國にて一割に近く、可耕地の利

用は三割餘なり。

軀幹部の耕地は概ね内陸に發達し、濱海の地にあるものは却て遅々として進捗せざる憾あり。石狩は本道第一の大平原を有するを以て開墾の着手も最も古く、耕地の多きことも亦迥に他を凌ぎ、本島農産の全種類は何れも其栽培に適せざるはなし。田畝の盛に起れるところは、主として石狩川の本支流に沿へる平野なれども、その一部には低濕沮洳の地も尠からず。殊に泥炭地の面積大なるものあり。又平原の南北兩端に近くに從ひ、未だ開墾に着手せざる膏腹の地多く、概ね森林を以て覆はる。石狩川の上流に横はれる上川盆地は内陸開發に於て最も著しき地方にして、地味豊饒に産物甚だ裕なり。殊に全道第一の米産地たるは注意すべし。空知川上流の富良野盆地も現時盛に開墾せらる。

總面積に對する現耕地の百分率は一割二分餘、可耕地の利用は五割を超ゆ。天鹽は天鹽川流域を以て主要耕地となし、殊に其の上流鐵道天鹽線の通過せるところは細長き盆地をなし、地味また肥え農林の産頗る見るべし。上川盆

地とは約三百米の峠を以て相隔つるに過ぎざれば、一般經濟上の連絡は主としてこの方面に於て行はる。河の下流に移るところは谷一旦狹まり、交通また甚だ不便なるを免れざるを以て、下流地方とは鐵道の全通を俟つて始めて有無相通すべし。天鹽の西海岸は地勢割合に低く、且つ鱈漁によりて起れる都邑點々相連りその後背部には耕地稍開かる。されど農業は概ね漁業の副たる觀を呈し、成績の以て見るに足るものなし。現耕地の總面積に對する比率は甚だ少く漸く五分に近く、可耕地の利用も二割を超えず。北見は軀幹部の東北隅に偏據するに拘らず、近來オホーツク海に朝する幾多の河川に沿ひ、移民の來住多きを加へ、耕地の増加また見るべきものあり。特に常呂川網走川等の流域は、玉蜀黍馬鈴薯大豆黍その他の作物に適すと稱せらる。最近に延長を進めたる鐵道網走線は、此地方開墾の一中心たる野付牛に達したれば北見東南部の開發は近き將來に於て當に面目を一新するに至るべし。現耕地の總面積に對する比率は漸く百分の一を出で、可耕地の利用も百分の五に満たず。日高は地形臺地に富み、且その背部は日高山脈に接するが故に域内低

平なる耕地に乏しと雖、氣候上よりする自然の恩恵は普く至り、畜産業と相俟ち農業比較的に進歩せり。沙流川新冠川の沿岸の如きは大小豆玉蜀黍等に適するのみならず、一部は米作も行はれ、好成績を擧ぐ。現耕地總面積に對する比率は百分の三五、可耕地の利用は殆ど三分の一に達し、農業地開發の程度全道にては後志渡島石狩の三國に次げり。尙軀幹部に屬する膽振の東隅は、河邊泥炭質を帶べる處多く一般に農耕進歩せず。十勝は臺地性の十勝平野發展し、一時農業の將來は石狩平野に亞ぎて甚だ多望なりとさへ見做されたれども地味割合に瘠せ加ふるに夏季雲霧の日甚だ多きが故に、作物の種類に制限多く生産額も當初の豫期と少く遠へる嫌なくんばあらず。作物は大豆最も可なりと稱す。現耕地の總面積に對する比率概ね一割、可耕地の利用殆ど百分の四五に過ぎず。釧路も十勝根室等の如く、氣候一般に低溫がちになるに加へ、夏季には濃霧の日多ければ、地形平夷の處多き割合に耕地の發展遅々たるを免れず、耕地の集約せるは釧路川の中流より下流に互れる處なれども、低平の地には泥炭地横はること尠しとせず。作物は概ね十勝に類す。現耕地

の總面積に對する比率百分の一七二、可耕地の利用百分の一をも満たさず。根室は本島の最東奥に位し、氣候上の制限によりて農期短く、農業はむしろ牧畜又は水産業の副業たる觀あり。但し地形平坦の處多し。現耕地の總面積に對する比率本島の最下位に居り百分の〇、四三、可耕地の利用百分の一にも達せず。千島は國後擇捉島等の比較的本島に近接せる大島に於て、多少の農業行はるゝと雖、概して水産業を主とし、穀菜は僅に此等漁民の日常の需用に充つるに過ぎず。従つて耕地の廣さの如きも、爰に特記する程度に達せず。左に明治四十一年末現在耕地の總面積並に可耕地に對する比率の概略を示さん。

國名	總面積	可耕地	現耕地	未耕地	總面積に對する現耕地百分率	平地に對する現耕地百分率
渡島	四一、九八五	七五、五五四	四〇、四九四	三五、五四六	九、〇六	五三、〇一
後志	四六、二八三	七、六九二	四、八五八	二、八三四	一〇、二七	六六、七五
石狩	一、四五一、九五五	三三、七五二	一七五、二六三	一、二八、二五七	二二、〇七	五二、九三
天鹽	八七九、六七八	二五、〇二六	四三、一四七	二〇六、九五三	四、九六	一七、三五
北見	一、四五四、三二四	四一、七〇九	一九、四八〇	四三、三六〇	一、三四	四、四〇

土壤

土壤 各種の岩石發達せる中に於て、生産上最も重要なものの第四紀層たるべきは固より言を竣たざれども、地形氣候交通の便否等の事情に制せられ、その利用の程度、作物の種類並に成績等は各地互に甚しく懸隔あり。火山岩若しくはその碎屑物によりて被覆せらるゝ地も亦然り。一般より之を觀れば内地諸地方に比し、開拓の事業未だ十分進捗せざるを以て、耕地は殆ど第四紀層に限られ、特殊なる地方を除きては第三紀層又は火山地を利用する場合甚だ稀なり。因に土壤に關する調査は未だ十分進捗せざるを以て、爰に精確なる記事を掲げ難し。左に大日本土性略圖に據り千島を除ける本島諸國土壤の分布を略記せん。

膽振	六八、九八七	二〇八、九〇六	六六、九四九	一四一、九五九	九八二	三三〇五
日高	四八五、三五六	九五、四六九	一七、〇八六	七六、四六〇	三五〇	一七八二
十勝	九九、一六三	三六、四四八	四三、七五七	三三、六九〇	四四二	一一九四
釧路	七〇、六八二	三六、七一四	六、三〇六	三〇、八七九	八九	一七三
根室	三七、五六九	一六、七四四	一五、三三三	一六、一五〇	四三	〇九四
總計(千島を除く)	七、九四三、三四三	二、三三四、三五四	四一、四八六	一、九三、九五四	五八二	一、五二六

渡島國 第四紀層は僅に第三紀層丘陵の邊縁河川の下流に横はり、東部には浮石の堆積せる處あり。土壤は埴土最も多く、第四紀新層の處は概ね壤土より成り、作物の生産最も佳良なり。函館の北方平原の水田よく開くるを見るは是が爲なり。

後志國 地層の發育また渡島に類し、第四紀新層は瀬棚壽都岩内及び余市等の小都會の附近に擴まり、瀬棚余市の四近の如きは大豆菜豆の收穫に名あり。函館附近の如く一部には集約農業行はれ、小樽附近に至れば山地の利用をも認むべし。

石狩國 領域大なると共に各種の地層散在すれども、農作地として最も適せるは石狩平野にして、地味も豊沃に生産率も全道の他地方に比し首位にあり。概ね沖積土より成り、諸處に泥炭層の廣く發育せるものあり。米・燕麥・小麥・玉蜀黍等の食用農作物は勿論亞麻藍莖薑等の特用作物より各種の蔬菜類果實に至るまで、地味最も適合せる處多く、特に天然肥料を含有せること大なる地は十數年間も肥料を施さずして收穫するを得べし。石狩平野の中心部即

ち岩見澤の南北より西方札幌附近に至る間は概ね壤土、埴土相半し、石狩川の下流左右兩岸の廣き地は砂土なり。又米の産額全道第一なる上川盆地併に富良野平原も地味石狩平野と大差なく、只氣候彼に比して大陸性なり。

天鹽國 各地層の發育石狩に類すれども、第三紀層彼に比して割合に多きを占む。天鹽川の河谷は第四紀新層に富み、特に名寄以南は地味上川盆地と大差なきに反し、その下流は泥炭地廣大にして、石狩平野の同質の地に比して利用に困難なり。西海岸には漁村の後背また諸處に埴土多き耕作地あり。

北見國 南方より西方に亘り、國境に沿うて火山岩地横はり、一部には古生層中生層深成岩等露出すれども、第三紀層大部分に亘りて發達し、海岸又は河岸に至りて第四紀層横はり、その中にはまた泥炭地若くは砂土をなせる處あり、東南部常呂川網走川の流域は壤土より成れる埴地多く、従つて新開發地として成績頗る良好なるも、他は埴土多く、地味また瘠薄にして人力を加ふべき所尠からず。

膽振國 主として第三紀層及びその上に噴出せる火山の麓には火山灰地廣

く横はる、或は俱知安の平原の如く谷間の平地を成せる處は第四紀新層なり、半島部は俱知安附近を除けば地域の大きな耕地少く、大抵埴土より成れども、膽振火山群の南部河湖の畔には規模小なる沃地を存すること多し。中央低地帯の南部より東境に近き鶴川河岸にかけて、海岸近く砂土、その内側に壤土あるも利用未だ見るべき程度に達せず。

日高國 國境に當り幅廣く連互せる日高山脈を除けば、他は大部分第三紀層と第四紀古層とより成れる臺地を耕地となし一般に壤土に富み、地味は沙流川沿岸を宜しとなす。前にも述べたる如く此國は牧畜に秀で、農産地狹隘なるを免れず。

十勝國 十勝平野を主要耕地となす。是は地質は主に第三紀層より成れる臺地にして十勝川の本支流の河谷若しくはその海濱に終るところに第四紀層を見、前者並にその後背に漸く隆起せる古生層その他より成れる地は埴土に屬し、後者は概して壤土なりとす。但し往々泥炭地を交ふることあり。氣候とも關聯し地味は一般に良好とは稱し難しと雖、普通大豆の産夥しきは人の

冷く知るところなり。

釧路國 北部北見との境にある火山岩地を除けば地形低夷の地多く、第三紀層廣き地積を占む。是は概ね埴土より成ると雖、釧路川の畔より西南海濱に沿うては第四紀層少しく發達し、主に埴土に屬せり。この河の下流に方りて泥炭あるは既に述べたり。一般に釧路根室及び十勝の地方は夏期濃霧連日に及び、作物の發育良好ならず。開發の遅々たる固より故なきに非ざるなり。**根室國** 地形釧路に類し、彼よりも尙低平なり。第三紀層より成れる處は埴土を普通とし、根室海峡に面せる低き平原は壤土がちなるも、海濱の大部分は砂土なり。亦往々にして泥炭地を見る。氣候冬に烈寒を覺え、夏に濃霧鎖し、作物の種類並に收穫に影響すること尠しとせず。

植民の概略

植民の概略 北海道は移民の來住に依りて土地始めて開發せらるゝ處なれば植民地の劃定と移民の招來とは各般の施設の基礎事業と稱すべし。抑植民に適する地方の選定は明治十九年以降道廳の銳意力を須ふるところにして、今日迄査了せし未開原野は凡そ二百二十萬町歩に達し、現在耕地に比す

れば約五倍大に及べり。然れども需用は尙年々増加するが故に今後更に復之が選定に着手する豫定なりと云ふ。移民地の多くは大中小の區劃を設け、之に收むべき農民戸數を豫定して處分す。區劃の法は基線を縱横に施し、之に準じて平行線を劃し、それぞれ大中小の三區劃を作為するにあり。小劃は地積五町歩之を一戸分と定め、中劃は小劃六個地積三十町歩、大劃は中劃九個地積二百七十町歩なりとす。移民は各地より至ると雖、その最も多きは風土産業等の相類縁せる以外に位置最も近き奥羽地方の者多數を占め、他は日本海沿岸諸縣即ち新潟より鳥取島根に及べる區域、及び天災、人事の變轉のため此外の諸府縣より入るもの等とす。年々來住する者は萬を以て數へ殊に近時アメリカ方面の移住若しくは出稼頼挫して以來一層その數を増加せる傾あり。此等移民は内務省の告示に依り地方廳に届出で汽車汽船の無賃券割引券を得、場所により宿泊車馬運搬等の賃錢も割引せらるゝ特別待遇を受くるものとす。尙此等移住者の來るや或は單獨事に當るものあり。或は初より多數の者團結してその生活を與に俱にするあり。既懇地若しくはその附近に入ら

農産物

んとする者は前者に屬し、未開原野を開拓せんとする者は後者に屬す。又移住者の經濟的事情に依り、初より小作移住者として、大農場の所要に應ずるものと、自作移住者として來るものとあり。いづれの場合に於ても本島到着後の保護獎勵は此等移民に對し、殆ど遺憾なきに至れり。特に未開地處分は移住農民保護の精神を發現せるものにして、特定地の如きは成功する者に對し、期に及びて無償付與せらるる規定なり。

農産物

本道の農業中特に重要なものは食用農産には大豆・小豆・大麥・小麥・裸麥・燕麥・玉蜀黍・馬鈴薯・菜豆・特用農産には蕨・薑・亞麻・大麻・薄荷・荷藍とし、蔬菜及び果物にては玉葱・甘藍・苹果・梨・櫻桃・莓等とし、孰も質量共に優れ、食用品として若しくは工業原料品として内外國に名を馳するもの尠からず。此等のうちにはその種子を外國殊にアメリカ合衆國に仰げるもの多く、その栽植收穫の成績極めて顯著なり。この外、夏季の日中高温著しき地方には早稻に屬する稻の栽培にも適し、粟・麥・蕎麥は收穫また多く、蘭杞柳の栽植も見るべく、特に近時養蠶の業漸く興り、農家の副産業として一般の注意を惹くに至れり。

米

左に主要農産に就て述べん。

米 北海道は米作地として、内地と全然同一視すべき適地にあらすと雖、其種類により開花並に結實期の所要氣温を享受すべき地にありては、その成績頗る見るべきものあることは近時の實驗によつて證せられ、さらぬだに生來米食に慣れ且つ畑作に比し利益大なるを知れる移住民は、之を見るや争うて耕作に従事し、作付反別年々増加し、灌漑溝の新設工事も各地に起り、今や本島にては根室・釧路の兩國を除く外孰の國も之が植付を見ざるは無く、その耕作地も十年前に比し約三倍に増加し、明治四十三年末現在の統計に據るに、米作反別三萬五千町歩を超え、(うち粳米約三萬四千町歩・糯米一千二百町歩)その收穫殆ど五十萬石に達し、(うち粳米四十七萬八千石、糯米一萬三千町歩)一段歩の收穫高一石四斗(うち粳米一石四斗餘糯米一石餘)に餘り、その割合は概ね奥羽並に關東の諸縣にも優れり。尙米作適地として新に開發し得らるべき地積は十萬餘町歩に及べるが故に、全耕作地の二、二八%は將來米田として利用せらるべく、従つて合計約二百萬石に近き收穫を豫期し得べきなり。然

れども更にこれが需給の趨勢を觀るに、現時の需用高は百五十萬石なるに、本島の實收穫は僅にその三分の一に過ぎず。百五十萬石の收穫を豫定するには十二萬町歩餘即ち現時米作地の約三倍以上の地積を要する割合なり。十萬町歩に餘れる豫定地の悉く米田となるまでには、尙若干の歳月を要すべく、人口また従つて増大すべきが故に、結局本道は米の輸入地としての境涯は脱却すること能はざるべしと云ふ。

稻作はすべて早稻を擇び、土地によりて相同じからずと雖、通例五月初旬に苗代を作り、六月中旬に至りて之を移植し、收穫は大抵十月初旬より中旬に至る迄とす。米田の開發最も盛なる地方は石狩にして、その反別全道米田の三分の二に出で、就中上川郡即ち主として上川盆地に屬する處のみにて、總米田の約三分の一に達し、その收穫殆ど全道總收穫の半ばを占む。旭川の東北數里の地域即ち米作を以て夙に有名なる永山村をはじめ、石狩川の左右兩岸に擴まれる灌域地は即ちその好適地なり。空知・夕張・札幌・兩龍の諸郡も亦之が栽培頗る盛にして、中にも夕張川の流域鐵道室蘭線に當れる地區の如き

麥

は田畝遠く開け、隴畝規則正しく縦横に延び、その規模内地の大米作地に髣髴たり。尙膽振・後志の一部、渡島の南部に於ても收穫顯はれ、近來に及んでは北見・天鹽地方も漸次之が栽植の盛況を呈せんとするに至れり。

麥 氣候の適せると之が消費の増進とは本道の麥作をして益盛大ならしめその成績また全國有數の地歩を占むるに至れり。中にも小麥は其質最も佳良にして、輸入外國品に對し毫も譲るところ無しとの評あり、麥作中燕麥を除き耕地最も大なるは裸麥にして、小麥之に次ぎ、大麥最も少し、明治四十三年の作付を見るに、裸麥は右總計地積の五萬餘町に對して二萬七千餘町歩即ちその過半を占め、小麥は三分の一弱、大麥は七分の一強に當れり。又收穫に至りても同年の總收穫約五十六萬石なるに對し、裸麥は二十八萬石餘にてその半ばを占め、小麥は約十八萬石、大麥は九萬石にて共に略その作付地積に對する比と一致せり。通じて全國の麥作と比較すれば耕地の廣さ、收穫量共に概ね中庸に位し、一段歩常收穫は寧ろ平均以下にあり。裸麥と大麥とは農家の重要食糧作物として、農家大抵之を植付けざることなきも、その生産

量は全道の需用に充て十分なる能はず。尙大麦はその一部は麥酒醸造の原料に供せられ、家畜の飼料にも用ひらる。小麦は本道にては主に製粉原料に供せられ、質大に佳良なれば、尙に輸入メリケン粉に對する強敵を以て擬せらる。未だ曠足を展ばすに至らざるは遺憾なり。製粉以外には醬油・味噌の原料としても消費せらる。一般に麥類の産地は石狩を第一とし、總裁培面積の五割を占む。之に次ぐは後志・膽振等なり、左に明治四十三年に於ける大小裸麥耕作收穫の統計を示さん。

行政區	作付			收穫		
	大麥	裸麥	小麥	大麥	裸麥	小麥
室蘭	九六四四	九二〇	四五三三	一一八三三	七〇二	四四六一
函館	六一〇〇	二二二	一四〇四	五、九三二	二〇六	一、二三三
檜山	一五四〇	九三九	三七五三	二、〇四二	八四九	三、三三六
後志	一、一七九	五、四〇四	一、六八七	一三、四七五	四三、六五五	一四、九五二
上川	二九〇九	五、九五五	三、九八八	四、五四八	七四、二六〇	五、七二二
空知	九七〇一	六、一四〇六	三、九九〇	一一、六五五	六五、七五七	四、三四四
札幌	一、九五二	二、二八七	一、四四三	二五、二九六	二、一九七	一四、五三五
計	一、九五二	二、二八七	一、四四三	二五、二九六	二、一九七	一四、五三五

行政區	作付			收穫		
	大麥	裸麥	小麥	大麥	裸麥	小麥
浦河	一八九八	三九八	八三三	二、五〇六	三、五三〇	九七八
河西	七七八	一七九五	一、二八六	七、〇二二	一四、九五四	一〇、三〇六
釧路	五八七	六五七	二二七	三、七四	三三九	一一七
根室	一一四	二八	六八	七六	三三	五六
網走	四三二	二、一五五	一、八三五	六、五五七	三〇、六四	二、九五六
宗谷	六三	一、三六八	六八	五、四	八三	四、五四
増毛	一八四	一、八九七	八七二	二、三七八	二〇、〇三	八、三五
札幌	一三七	二二	一五四	一、九	二九	一九
小樽	一三三	一〇五	六二	二、一九	七	六〇
函館	三九	一	五	四七	一	五
計	七、八九二	二七、一九四	一五、九四九	九四、〇二二	二、八四二	一七、〇四七

燕麥も亦本道に適し、帝國中作付併に收穫最も多く、専ら馬糧に用ひらる。殊に明治四十一年陸軍糧秣廠に於て札幌に出張所を設け、軍用として之を購入せし以來、これが栽培一大急進をなし、作付段別の如きも、明治三十二年の五千一百餘町歩は、明治四十一年には二萬四千四百餘町歩となり、十年未滿に於て五倍の耕地を増加せり。然るに陸軍當局者は燕麥一ヶ年の需用を四

食用農産物
大豆・小豆

十萬石に限れるに、その生産は明治四十一年に五十萬石を超え、翌明治四十二年には一層増大して九十萬石を出でたれば、今や供給過剰の傾向を呈し、一部シベリア方面に輸出せらるゝに至れり。主産地は石狩平原中空知札幌兩支廳管内に多く、尙上川盆地、函館浦河近傍の地も之に次ぎて産出に富めり。

食用農産物 大豆及び小豆は最も適當し、質また佳良にして耕地の廣さ本道にては耕地總面積に對し此兩者の作付最も多き大豆は千分の二、小豆は一三五を占めたり。尙全國を比較すれば大豆は總産額の約五分の一、小豆は約二分の一に及び、朝鮮を除き府縣にては之に比すべき産地なく、殊に小豆は一段歩の收穫高も帝國の首位にあり。今之が實數を示せば明治四十三年に於ける全國大豆の作付段別は四十七萬八千餘町歩、そのうち北海道は殆ど七萬八千町歩、收穫は全國の約三百四十萬石に對して六十二萬八千石。一段歩平均收穫七斗一升なるに對して八斗一升を計上し、小豆は同年總作付段別の十四萬一千餘町歩のうち北海道は約五萬三千町歩、收穫は全國の約九十六萬六千石に對し約四十五萬石、一段歩平均收穫六斗八升五合なるに對して八斗

五升五合の割なり。大小豆共に一般の趨勢は作付反別、收穫共に益増加し、之を十年前に比すれば孰も二倍以上に達し、殊に大豆は滿洲朝鮮等よりの輸入に對して將來その一部なりとも之を防遏すべき生産は北海道よりせざるべからずとの意見朝野の間に行はるゝに至れり。只滿洲等よりの輸入大豆に對して往々價額の競争に於て下位に立つとあるは注意すべき點なり。一般需給の上より觀れば本道産の大豆は大部分内地に輸送せられ、本道に於ける消費は比較的僅少なり。風土最も適當せることゝて本島殆ど到る處之が栽培を見れども、そのうちにて特産地として擧ぐべきは十勝平原、後志利別川流域、膽振・俱知安平原を始めとし、石狩平原の中央部なり。尙年産出價額に就きて之を觀るに全道の主要産は米の四百萬圓なるに對し、是は次位を占め約三百萬圓なり。小豆の需給狀況も略大豆に類し、大部分は内地に出さるれども、その用途は製餡等の食料に限らるゝを以て、動もすれば生産過剰の虞なきにあらず。加之のみならず小豆は氣溫低く、霜害の虞ある處は品質なるものを得難き以て、本島にても東北部地方は生産成績よろしからず。主産地はまた

豌豆菜豆

石狩平原の中央部、上川盆地、俱知安平原、十勝平原の一部等なり。其他の豆類にては豌豆菜豆等あり。孰も風土よく適し品質佳く内地に向つて輸送せらるゝ量尠からず。豌豆の作付並に收穫を觀るに明治四十三年耕地は全國の四分の一(全國總作付約二萬九千町歩、うち北海道は七千八百餘歩)、收穫は殆ど三分の一(全國總收穫二十八萬八千石餘、うち北海道は八萬一千石餘)にして我國の第一に居り、全島隨處に栽培せらるれども、特に著名なるは後志の岩内、石狩の空知地方なり。菜豆も年産十萬石に上り、盛に内地に出され聲譽風に揚がる、産地中余市川流域、俱知安平原の産最も名あり。

雜穀

雜穀にては粟稗黍蕎麥は概ね水田の耕作不適當なる地方に栽培せられ、主として地方農家の常食として消費せらる。

玉蜀黍

玉蜀黍も大小豆と同じく本道の主要産に屬し、明治四十三年全國總段別五萬三千餘町歩のうち北海道はその約五分の二即ち略二萬町歩を占め、收穫は全國の七十二萬石強に對し、略その半ばに上り三十三萬石に垂んとす。それが消費は農家の食料家畜の飼糧に供せらるゝ以外、別に酒精製造の原料にし

馬鈴薯

て旭川の神谷酒造合資會社の如き之を使用するを以て、需用漸次増加し従つて耕地も年々増加する傾あり。耕作盛なる地は上川盆地富良野原野石狩平野を始とし、尙半島部樞幹部中早く開けたる地方概ね皆然り。最近年産出價額は二百六十萬圓、米大豆燕麥の次位に立てり。

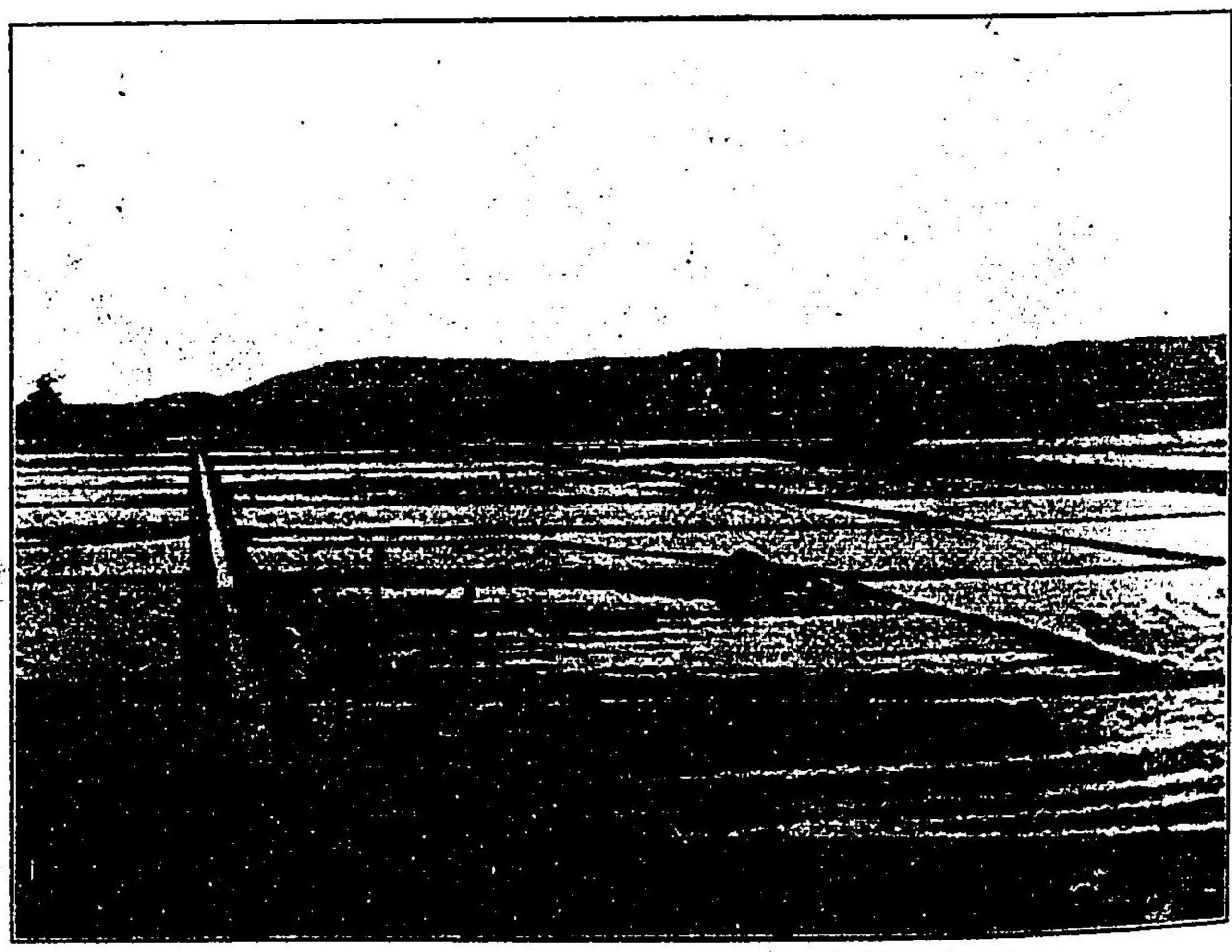
馬鈴薯もまた北日本に適せる農産として北海道の主要産に數へられ、特にその地の産は大さと味ともに樺太を措きては全國に比なく、我國他地方の栽培は直接間接に種子を北海道に求めざるはなし、初めアメリカよりの輸入に係り風土最も適當せるまゝに、品質優良なるもの多量に收穫せられたれば、農家は争うて之を栽培し、利用の法も自ら擴張せられ、單に副食物家畜の飼料たるに止らず、澱粉製造用として消費せらる量夥しく、加ふるに近來酒精の原料としても需用大に増加したれば、今や耕地收穫共に全國の一半を有す。即ち明治四十三年全國作付段別六萬八千餘町歩のうち、北海道は三萬町歩を超え、全國總收穫十七萬九千餘貫のうち、北海道は約八萬三千貫を占む。尙最近年産出價額は二百五十萬圓を超え小豆に次ぐ地位に立てり。本道の馬鈴

蔬菜類

薯は苹果玉葱燕麥と共に輸出農産に數へらるれども、最近一ヶ年輸出額一千万圓にも達せず。仕向地は他の農産と同じくシベリアなり。馬鈴薯は北海道にては農村と沿岸漁邑とに論なく、最も普通に消費せらるるを以て、聚落の散在せる地は到る處に之が栽培を見、従つて品質に關する世評も様々なれども澱粉用として最も名あるは内浦灣西岸の八雲村附近、俱知安平原、石狩平原北部とす。

蔬菜類に於ても北海道は特色を有し、甘藍玉葱その他外國種蕪菁胡蘿蔔漬菜牛蒡胡瓜南瓜等の收穫佳良にして、産額全國の首位にあり。就中甘藍は本道の風土に好適し、その栽培は極めて容易に、品質調理用として無比の譽あり。産額は明治四十三年全國の一千一百万貫餘のうち、七百三十万貫を占め、全然迥に他を凌駕せる地位に立てり。玉葱も亦同様にして、同じく明治四十三年總産額四百九十六万貫のうち北海道産は三百十萬貫餘即ち總産出に對し五分の三を占め、盛に各府縣に搬出せらるゝ以外に、年々シベリア又は支那方面に輸出せられ、最近年輸出十三四萬圓に達せり。されば外國向輸出とし

期初墾開場農野原安知俱 (甲)



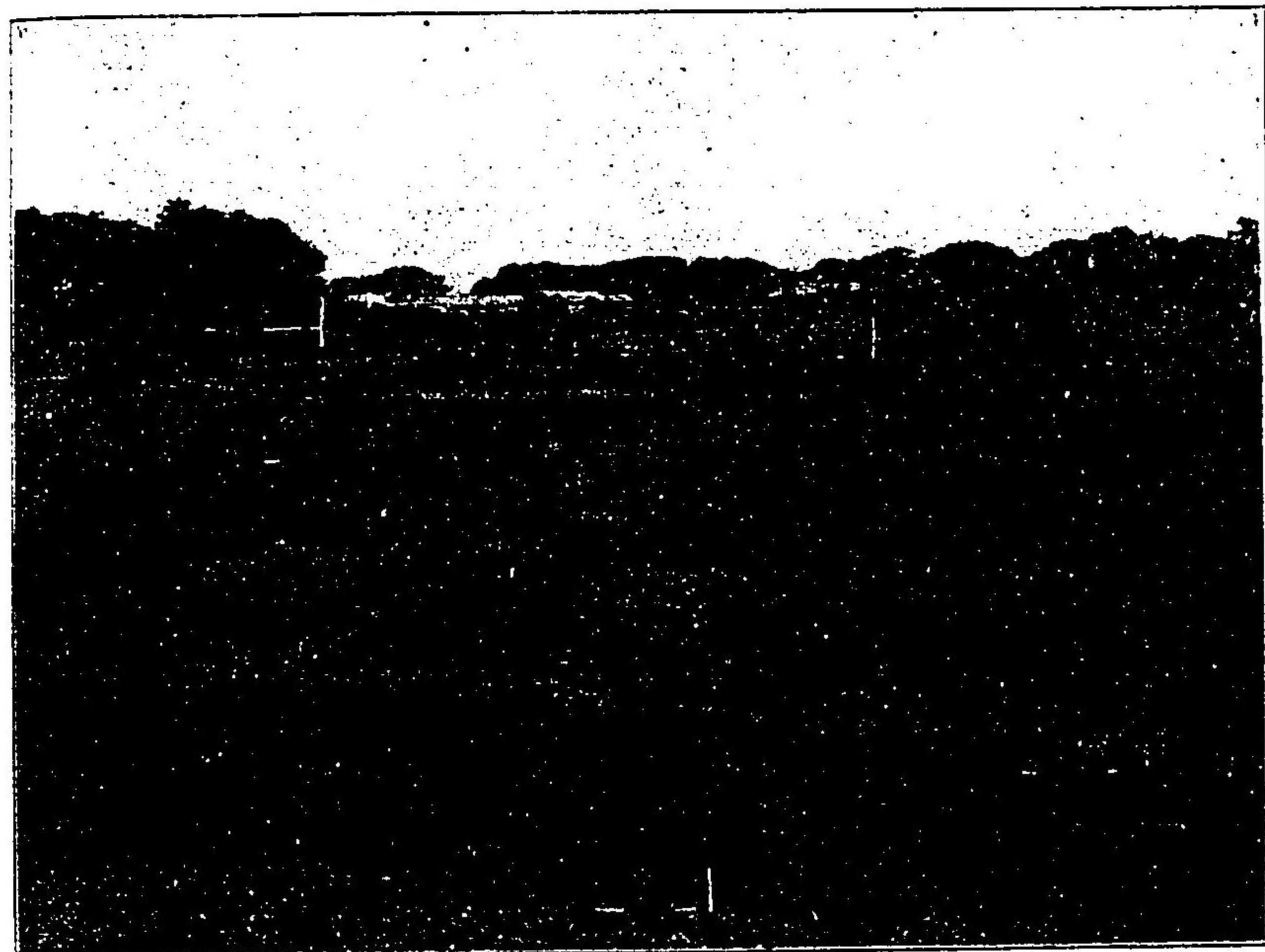
田水村田角幌札 (乙)

(第三十四圖)

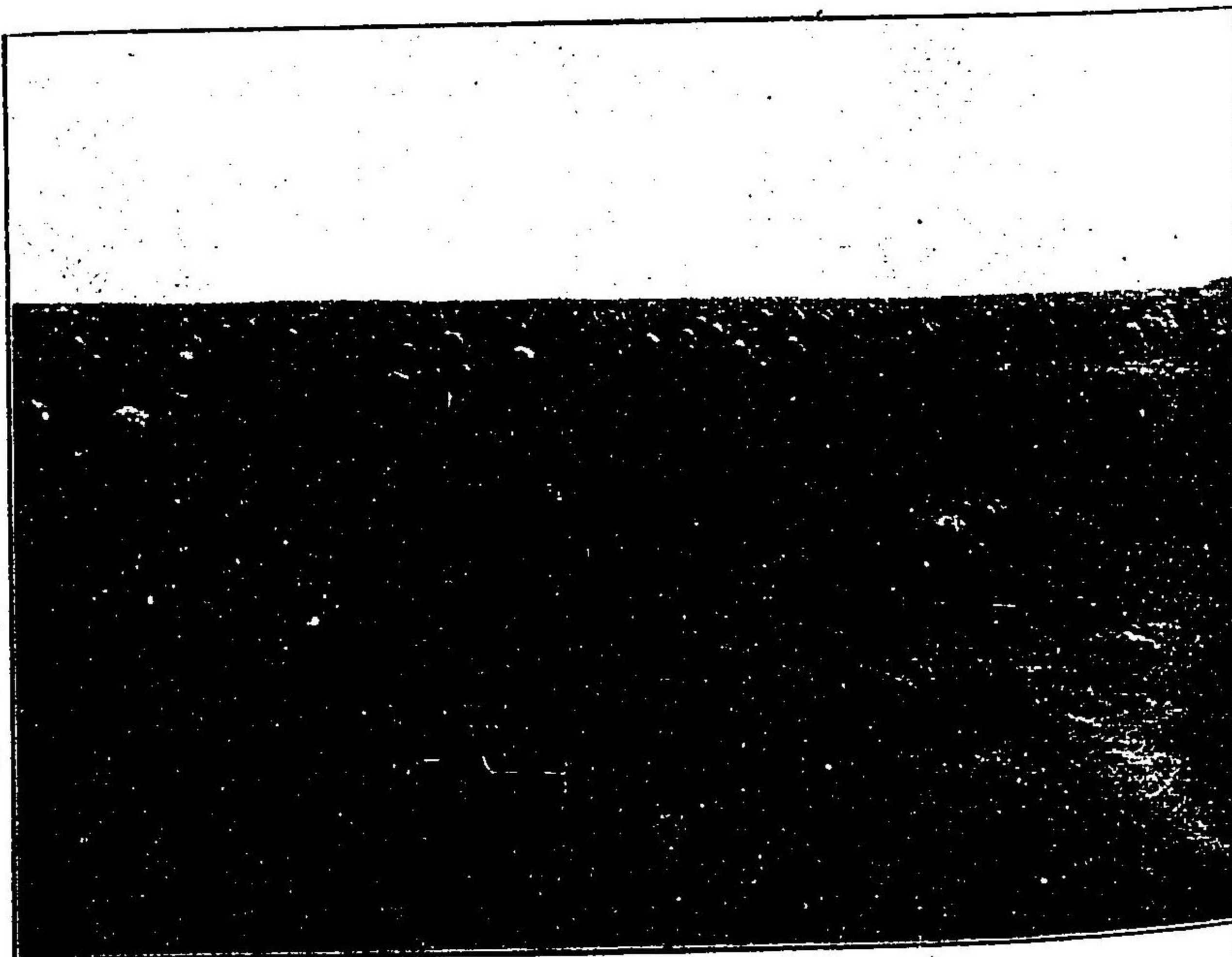
所畜種冠新國高日 (甲)



田水學大科農學大北東 (甲)

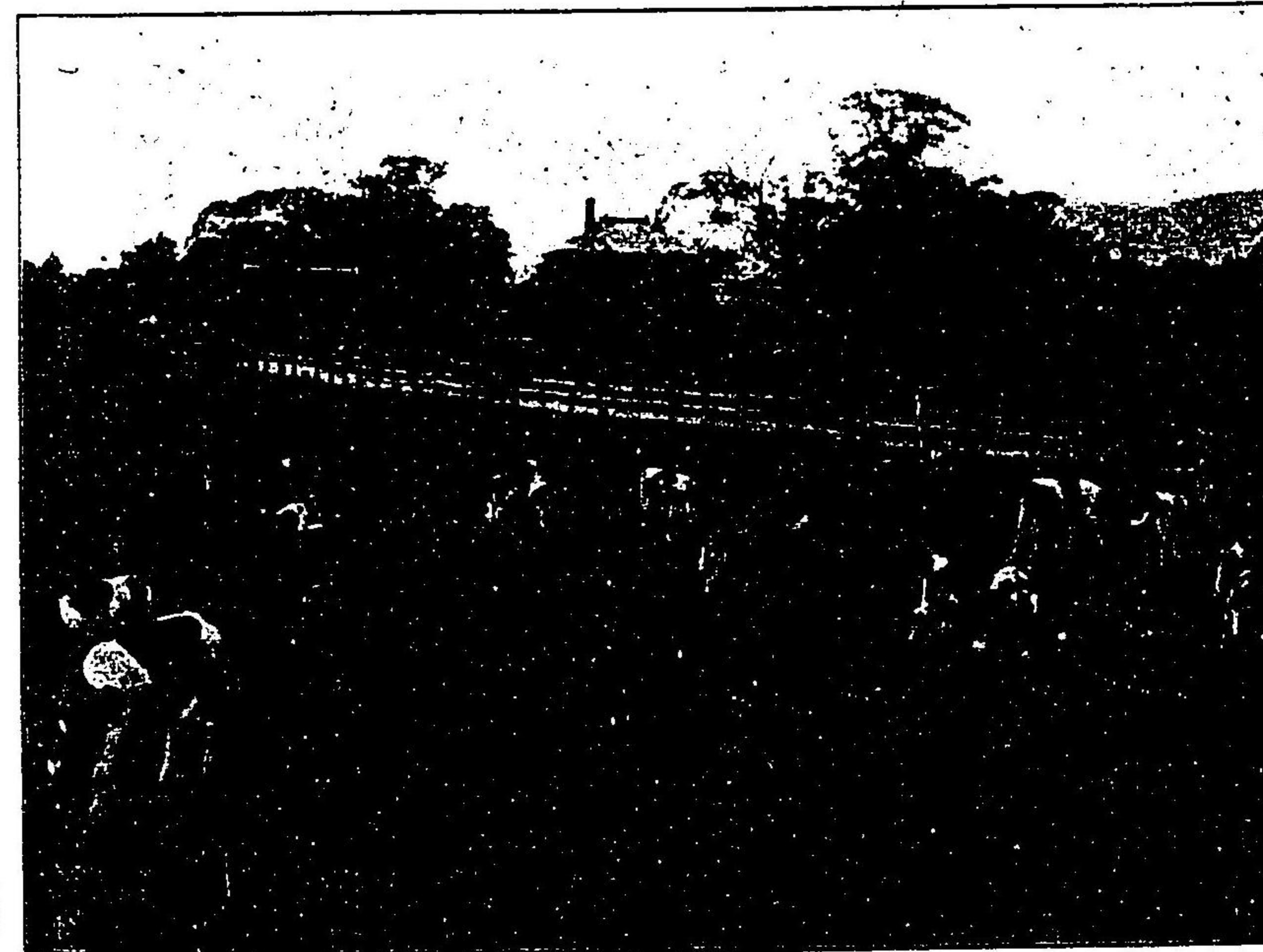


(第三十六圖)



場農川輕幌札 (乙)

(第三十五圖)



場農一第同 (乙)

歩を出で、乾莖六百萬貫、種實三萬石に達し、莖は主として製線用に供せられ、殊に札幌なる帝國製麻株式會社工場に於て消費せらるゝこと大なり。種實はおもに内地に亞麻仁油に搾製使用せられ、將に外國品の輸入を防遏せんとする。主産地は石狩平原の中央部より上川盆地に互り、俱知安原野並にその南方開墾地・十勝平原等なり。

薄荷

薄荷 藥劑用工業用並に食用に供せられ、需用内地にても年々増加するさへあるに、近時薄荷腦、薄荷油の二者は香港西洋諸國に向つて輸出せらるゝこと一百万圓に上れるが故にこれが栽培は前途頗る有望を以て目せらるるにも拘らず、耕作地は僅に中國に於ては岡山廣島奥羽に於ては山形を推すに過ぎずして、他はその産額極めて少し。然るに由來北海道は之が栽培に適する地に乏しからず、加之その品質は全國第一にして、腦の含有は他地方に劣れども油に至りては迥に他を凌ぎ、その栽培地も明治四十三年全國總段別にて三千町歩なるに北海道はそのうち二千七百町歩を占め、従つて收穫も同年全國の三百三十餘萬貫のうち、本道は二百九十餘萬貫にも達するが故に、薄荷の

他の特用農産

取引に關しては本道はおのづから全國の主要地となり、その粗製品は薄荷腦及び油の原料として、取卸の儘横濱神戸等の商人に販賣せらるゝを常とす。産地として著名なるは北見の湧別野付牛常呂及び美幌地方にして、尙上川盆地・十勝平原にも多少の耕作を見る。

以上の外特用農産として稍名高きは油製造の原料として荏胡麻あり。製線用として大麻あり。又開拓使を置かれし當時頗る栽培を奨励せられし藍ありと雖、其の耕地も比較的狭くその産額も僅に數萬圓に過ぎざる類のみ。但し質は孰も佳良と稱せらる、煙草も火山灰地は適作なるべしと雖、膽振の幌別村を除きては耕作指定地外なるを以て將來を斷すべからず。その他蘭草杞柳等の栽培も農家の副業として奨励せられ隨所に其の産出を見る。一時世の注意を惹きし甜菜は栽培上の不注意より失敗し、爾來また之を顧る者なし。

果實

果實類は概ね本道に適し、苹果梨櫻桃葡萄グスベリーストロベリー等いづれも多くは外國種を移したる者にて栽培の成績極めて宜しく、結實大にして味又甘美なり。就中苹果は最も其風土に適し、品質良好の者を産し、年々内

地殊に東京横濱神戸方面に輸送せられ、尙シベリー、朝鮮支那に販路を有し、年々十五萬圓前後の輸出をなせり。近來害蟲、病菌の禍に罹るもの多く、果園の荒廢せるもの尠からずと雖、猶依然として果實産出の首位にあり。明治四十三年の統計に據れば栽培樹數並に收穫共に青森縣に次ぎ、樹數六十三萬本に近く、收穫二百五十萬貫に垂んとし、この價額約五十萬圓と稱す。主産地は後志、空知、札幌三支廳管下にして、後志支廳下余市附近の地最も著名なり。空知支廳管内にては概ね岩見澤以北の鐵道函館本線沿道に栽培せらるゝもの名高く、收穫季汽車上の眺望甚だ美觀なり。尙札幌區の内外農場にも巨類の産出あり。梨も洋梨は本道に適し、櫻桃と共に風味良好なり。葡萄は葡萄酒醸造用の原料に供せられる以外に尙生食用として賞美せられ、品質夙に定評あり。グスベリーはストロベリーと共に果園の間に栽培せられ、生食用に供せらるゝ外、ジアメゼリーの製品として販賣せらる。此等果樹の主要栽培地は石狩平野の中央部、余市川流域、函館附近を以て著しとす。

蠶業

北海道の山野には天然の良桑夥しく繁茂するを以て、蠶の飼料に

は甚だ豊富なり。されば飼養の原料を専ら之に仰ぎ、飼育に關しても亦此地方の風土に對し特殊の注意を加ふるときは内地府縣とは自ら趣を異にせる一養蠶地として、將來大に有望なるべきは識者の夙に唱道する所なり、されど現下の狀況は未だ上述重要農産を比肩する程度に達せず。但し作付桑の種類は野桑中の良品種を選ぶを安全とするが故に、従つて桑園の桑には這類のもの尠からず、桑畑は年々多少の増加を伴ひ、明治四十三年には約三千六百町歩に及べり。桑作耕地の多きは石狩平原にして、特に空知札幌の二支廳管内に多し。上川盆地、十勝平原以北に至れば、野桑ならざれば成育不十分なりと雖、南方殊に内浦灣岸は氣候溫暖にして内地原産の種類も栽培するを得べし。氣候内地に比し稍冷しきが故に蠶種は一般に病毒少く、蠶兒も強壯にして病斃の歩合内地に比して尠し。繭の産出は明治四十三年に僅に七千石を超え、そのうち空知支廳所管のみにて約三分の一を占め、札幌支廳下之に次ぎ順次遞減して釧路、根室支廳管内に至り最も尠し。養蠶業に附帶せる製絲事業も未だ著しからずして、産繭の發達に伴はざる憾なしとせず。明治四十三年の蠶

牧畜

絲類總價額を見るに北海道は十六萬圓未滿にして、全國中香川・青森・長崎・沖繩の四縣に優るのみ。尙この大部分は器械製絲に係り、座繰製絲は製造戸數のみ多く、産額は甚だ小なり。

牧畜

北海道は我國の曠北を以て稱せらるる奥羽とは氣候風土大差なきのみならず、地形自ら雄大にして樹林草原到る處に横はり、清泉溪流この間より出づるが故に、自然地理上牧畜經營地として全國中絶好の地域たり。更に又之を人文の方面より觀れば耕地聚落未だ稀薄なるを以て、牧畜上の施設畫策は殆ど無限に且つ理想的に行はるべく、加ふるに開拓の進歩發達は一面に於て之が原動力たり。補助機關たる家畜を要求すること益痛切に、その副産物を必要とすること亦愈大なるを以て、本道の畜産は夙に世人の着目するところとなり、開拓の當初より家畜家禽の改良・蕃殖並に使用に關する實驗行はれ、現今にてはその成績の見るべきもの一にして足らず、只牧場の廣大なるに比しては、家畜の數甚だ少なく、之を充足せしむるまでには、尙幾多の施設經營を要するものと云ふべし。今牧畜の一般に關して之を概觀せんに、

牧場の數は民設のみにて現時七百以上を算し官公設に係るものは前農業概説中に掲げたりそのうち有名なるものは札幌近郊に最も多く、他は日高・渡島・釧路根室等に散布せり。官公私設を通じて牛馬の兩者若しくはその他のものを飼養する牧場は北海道廳種畜場(牛馬・羊・豚・鶏)・札幌郡豊平村眞駒内、月寒種畜牧場(牛・羊)・札幌郡豊平村月寒、園田牧場(牛馬・羊)・龜田郡桔梗野、牛馬のみの藤野牧場(上川郡)、波惠牧場(沙流郡)、赤心社株式會社牧場(浦河郡)、晚成社牧場(尾道郡)、山縣牧場(根室)、折田牧場(根室)、藤野牧場(網走)、嘉多山牧場(網走)等なり。又家畜の飼料としては極めて豊富にして燕麥は收穫極めて好望に牧草は一たび播種せば犁鋤を加ふることなくして七八年を保つべく、その他玉蜀黍の産に富み、道廳の調査に據れば實際五町歩耕作の農家一戸は以て三頭の牛馬を飼育すべく、牧場適地は百萬町歩を超ゆと云へり。その地その食の充足せる想像するに堪へたり。尙本道の畜牛には内地にて最懼る、結核病殆ど絶無なり。家畜の數は最近に至り益増加し、明治三十一年以降十ヶ年の間に各家畜は概ね少くして一倍半、多きは三倍に達せり。左に各年分摘記の繁を避

け明治五年同三十一年同四十年同四十三年の年末現在の家畜数を掲げん。

畜産	明治五年	明治三十一年	明治四十年	明治四十三年
牛	二九五	六、七四〇	一五、九六九	二一、三二〇
馬	九、二九一	六〇、九六一	一一六、八七四	一五二、五一八
豚	九	三、五一〇	一一、三九二	一四、二九二
羊(種羊・山羊共)	五五	三二一	四四九	四〇九

以上の如く牧畜の業は逐年進歩を見ると雖、本道の總生産(六七千萬圓)に比して考ふれば、他の農水工鑛林等の後に立ち、畜産年産額約百五十萬圓を上するのみ。牛馬の使役は凡そ牛馬總數の半ば耕作用に供せられ、そのうち牛は數百頭を充つるに過ぎざれども、馬はその總數の過半を用ひ、馬耕の割合は全國の首位にあり。(因に北海道の耕地中牛馬耕をなす田畑は、各總段別百に對し田は六八、四七、畑は六二、八七なり)耕作以外の用途は内地諸地方と大差なく只牛は乳牛肉牛として特に聲譽高きもの多し。

畜産に附帶し養禽の狀況を一瞥せんに、一般に飼養せらるゝは鶏にして、

馬

明治四十四年六月末現在成禽三十七萬六千羽、雛は四十六萬九千羽、その價額約三十萬圓に達し、全國にては愛知千葉鹿兒島の三縣に下るのみ。又卵の産も同年六月末價額約五十五萬圓にして亦全國の三四位にあり。

之を要するに北海道の畜産業は現下の狀勢を以て之を見れば特に異常の進歩をなせるものなりとは稱し難しと雖、風土の適良なると聚落の發達未だ不十分なるとは、この方面の産業をして殆ど無限に發展せしめ得べく、從來單に農業の副業たるに止まりしものは、指導だに宜しきを得ば、主業として成功すること疑無かるべし。左に各畜産に關し少しく記述せんと欲す。

馬 北海道の牛馬牧養の起源は夙に内地殊に南部地方より輸入せしに始りたれども、牧畜の改良進歩は全く開拓使の初期海外より良種を輸入したるに基けり。先づ馬に就て之を觀るに北海道には従前より知らるゝ土産馬と稱するものあり。體軀小にして、耐久力に富み、性質は溫良、粗食放養には堪へ、且つ四肢強健なり。是はその初め内地より輸入せしものなれども、爾來改良を加ふることを怠りしが故に、現時にては單に容姿揚らざるに止らず、用途

に於ても稍狹隘なるを免れず、但だ洋種を輸入し種用に供してより後は馬格著しく進歩し、良好なる雜種漸次増加し、最近の統計に據れば種牡馬七八百頭中、内國産は僅に數頭なるに雜種は全數の半以上、洋種のみにも二百頭に近き數に達し、その馬匹改良の成績極めて顯著なり。馬の種類中本道到る處に分布するはトロッター雜種にして、日高渡島石狩の産はわけて名高く、又ベルシユロン及びその雜種は石狩十勝根室釧路等に多し。一般に良馬の産地として名高きは日高なり、蓋しこゝは地形風土特に牧馬に適するのみならず、創立舊き新冠御料牧馬は規模の廣大、良馬匹の多産を以て知られ、靜内産牛馬組合糶場は良馬生産の獎勵機關として名高く、尙近年浦河郡西舍村には九州種馬牧場の移轉せる日高種馬牧場の設置せらるるあり、此等は相共に結合して日高の名聲を成したるに因るなり。日高に次ぎて良馬を出すは根室北見石狩膽振十勝釧路等なり。このうち石狩には札幌の南方二里許真駒内の地に北海道種畜場あり。これは本道畜産の原動機關にして、馬以外に牛羊豚及び家禽の飼養蕃殖並に種畜の配布等をなして兼ねて酪業をも行へり。又十勝に

は十勝種馬牧場、釧路には釧路川上の二軍馬補充部支部、膽振長萬部に北海道種馬所あることは既に述べたり。

斯の如く北海道は洋種馬の輸入によりて馬匹改良の効を收めたる處なるを以て、良馬の生産年に加はり、各地の共進會には到る處優等なる成績を示し、毎年内地に移出する頭數も尠しとせず。されば北海道馬は現時の帝國産馬界に於て優秀なる地歩を占め嶄然他を壓するの概あり。

牛 本道の放牛も亦馬と同じく當初内地南部地方より仰ぎ、開拓の法備るに従ひ漸次洋種牛を入れ以て今日に至りたるものなれば、近時は内國種益僅少となり、エアシヤは全道到る處にその生産を見ざるなく、その種牛生産上特に内地に知らるるは前田農場(札幌郡手)、山縣根室牧場(既述)、園田牧場(既述)等に於て、短角種は石狩釧路に多く、この産を以て著名なるは、釧路三田牧場(既述)なり。ホルスタインは石狩渡島の地方に飼養せられ、渡島にては前述園田牧場、石狩には農科大學、宇都宮牧場(札幌郡白石村)、吉田牧場(札幌區)等名高し。尙牛の飼養に關し特記せざるべからざるは月寒種畜牧場なり。是は札幌の東南二里

牛

許月寒に設置せらる、帝國二種畜牧場の一にして自然の地形林泉を利し、牧草を始め家畜用飼料を耕作して以て牛羊の改良蕃殖育成及び畜産物の製造を營めり。全乳量は五萬數千封度、製酪は年により異動あれども、一ヶ年約二千五六百封度に及び、主に東京に販賣す。この種畜牧場の分場は東京市外澁谷村に設けられ、皇室御使用の牛乳等は主に該分場の産出に係ると云へり。概して本道の乳牛は質極めて佳良なる乳を供し、乳並に一般の酪製品は夙に本邦第一の名譽を博し、其アイスクリーム牛酪等は東京市人の賞味するところなり。尙屠牛搾乳等の事業は東京・大阪等の大市場所在地と異なるを以て、特に注意する點を缺くと雖、單に地方として之を觀れば、その數量頗る大なりとす。

羊 羊は開拓使の當時海外より緬羊を輸入し、その蕃殖を圖りしに拘はらず、民間には未だ之が飼養普及せず。前述北海道種畜場及び月寒種畜牧場に於て之を見るに過ぎず。種畜は主に英米より輸入せるものにして、シロツブシャー・サウスダウソ種等あり。羊以外には山羊を飼養するものあれども、未

羊

だ特記する程度に達せず。

豚 豚も牛馬と同じく外國種を輸入し、特にパークシャーは本道の風土に適し、成育極めて佳良なるを以て這種の分布最も著し。一般に市街地は勿論村落に於ても豚の飼養者多く、北海道の畜産として重要な地位に立ち、屠殺數また年々増加の傾向あり。

豚

家禽 家禽にては養雞業最も著しく、概ね農家の副業として孰れの地方も之を見ざる莫し。種類は從來の内國種もあれど、外國より輸入せるもの亦多くブリマスロツクレグホン等漸次普及せんとす。但し需給の大勢は未だ供給十分ならずして、雞卵とともに奥羽の北部より仰ぐ量尠からず。

家禽

二 林 業

北海道は帝國の開拓地として一切の風物清新の氣を帶び、全道の約六割の地表を被へる森林の大部分は原生林に屬し、千古の久しき生枯おのづからに行はれて、宛も人力の侵入に抗して永久にこの自然界を封鎖せんとするの概

林相

あり。北海道農業の起源は實に先づ此の大森林を披拂するに在りき、陸上交通線の開始も聚落發達の基も、事業經營の礎もその當初を想へば實にこの自然林の克服に在りき。而して開拓の創始後既に數十年を閱せる現時に於ても北海道經營の幾部が常にこの森林と關連すること少からざるの事實を知らば、誰か林業地としての北海道の富の前途甚だ多望なるに驚かざるものあらんや。動物の分布上、津經海峽は大陸的日本と島嶼的日本との境界線たるが如くに植物殊に森林の分布に於ても亦この海峽は或種の林木に對する一境界たるが如し。例へば内地到る處に見る杉松の本道に入りてその自然林景を絶ち、僅に肢節部の南邊に辛らして此等林木の植栽せらるゝ如きは是なり。然れども更に仔細に觀察すれば林木の分布は概ね本道の中央を以て二分せられ、南方即ち肢節部と軀幹部の南邊とは奥羽地方に引き續ける溫帶北部林に屬し、北方即ちこの境界帶附近より以北に至れば寒帶林區に當り、兩者の水平的分布の限界甚だ不明瞭なるを常とす。今本多林學博士の所説に依れば、溫帶北部林區は肢節部の高地を除ける殘餘と軀幹部の西南若しくは南方を占むる低地

水平森林帶

垂直森林帶

丘陵地即ち石狩平原並にその南方に隣接せる膽振の東部平原より北は天鹽の沿岸低地、南は日高の高臺性傾斜地に至る迄の區域とに互り、この外尙十勝平原の南部にも侵入し、概ね年平均六度の等溫線を出入するが如く、この概略線以北は寒帶林區と見做すを得べし。但し千島に於ては森林地をなせる處は南方諸島即ち國後擇捉色丹等の諸島に限られ、得撫島以北は全く原生林を缺如し、單に偃松の地表を封じ、草地この間を點綴するに過ぎず。又垂直的分布に就きて之を觀れば北部溫帶林と寒帶林との境界は本島の南部渡島半島方面にありては海拔千五百尺即ち約五百米なれども、軀幹部に至れば前述水平的分布の兩者境界線若しくは境界帶に於て地上に下れり。又寒帶林の上部限界は渡島半島に在りては海拔三千五百尺乃至三千尺即ち一千米内外なれども、軀幹部の北邊にては海拔約二千尺即ち約六百米、千島にありては既に述べたる如く南部諸島を除き他悉くこの線を上に出でたる部に屬せり。通じてこの境界線以上は自然林全く跡を絶ち岩石裸出し諸處偃松矮草の生ずるあるのみ。

林種

北海道の林木は温帯林寒帯林共に多數は原生林に屬すと雖、自然若しくは人事に由來せる荒廢に基きて後成的自然林をなせる處も尠しとせず。但し這種の後成林は内地諸地方の如く、コナラ、樺、シデ等の如き林種に非ずして、概ね本道の氣候帯に一致せる林種なり。是れ全く氣候上の制限に因れるものならん。人造林に至りては往昔内地人の移住少なかりし頃には、僅に沿岸漁業上の聚落地にその影を留むるに過ぎざりしかども、現時に於ては大に趣を異にし、耕作地の創設交通線の發展、大小都邑の勃興に伴うて原生林の破壊盛に行はれ、代ふるに植林を以てすること益、進歩し、是が爲に主要鐵道線路にては純乎たる原生林は石狩空知川上源並に北見常呂川上流の二箇處を推すに過ぎずして、沿線林地の多くは人造林若しくは半ば破壊せられたる原生林と人造林との混淆せるものたり、而してこの人造林の多くは内地のそれと異り、落葉松最多く、中には歐洲落葉松シベリアモミドイトーヒの如き外國種もあり、山胡桃、胡桃、白楊樹等の在來種あり、南部半島地方の如きは内地に模倣し、杉、赤松、稀には扁柏をも植栽することあり。之を要するに原生林は軀幹部

に豊富にして肢節部に乏しく、是に反して人造林は南方に茂り、北方にては比較的植栽少し。こは一面には又森林密度の大小をも説明するものなり。

更に主要樹種に就きて之を觀るに、温帯林には桂樹(オホナラ)、ミツナラ、刺楸、槭、樺、七葉、朴、山毛櫸、赤楊、白楊、樹、黃蘗(方言シコロ)、菩提樹、ハコヤナギ等の潤葉樹あり。此等のうち山毛櫸を除けば他は寒帯林の南部にも見るべく、殊に山赤楊、赤楊、樺、白楊樹の如きは寒帯林中一旦荒廢せる處に後成的自然林を作為するによりて著名なり。針葉樹には落葉松頗る旺盛を極め他は之と比すべき樹木を缺く寒帯林は概ね上述の潤葉樹をもその一部に加ふと雖、一般に潤葉樹林温帯林區に比しては大に勢力を失ひ、針葉樹たる榎、松、蝦夷松、色丹松等に代り、地方によりては此等の針葉樹の純林を見ること鮮しとせず。而して上述榎、松等の針葉樹の全く低地上に下る處は本島の北端に至つて始めて認むべく、上川盆地の如きは森林分布上より觀て既に寒帯林區に入ると雖も、未だこの程度に達せず。

森林の面積及び所屬

北海道の森林分布を觀るに、その森林被覆の

森林の面積及び所屬

面積概ね邦内の諸地方を抜き、明治四十年末現在にて總面積に對し百分の六十二を算せしことは前巻林業の條に於て掲出せるところなり。その後明治四十四年三月末現在(但し御料林のみは明治四十三年末統計に據るに本道森林總面積は約五百三十九萬四千町歩にして、實に帝國總森林面積(臺灣樺太朝鮮を除く)の四分の一以上(二八・一二)を占め全道の總面積に對しては約百分の五十七に當れり。今之を明治四十年現在と比較する時は僅々數年の間に百分の五を失ひし割合なるを以て、その減退の大なるは一見驚くべきものあるが如しと雖、土地の開発上或程度迄は伐採と植林との權衡を失するは已むを得ざるところに屬し、殊に本道の森林は前にも述べし如く大部分原生林なるを以て、縱令之を伐採するとも一方に耕地を増大すると同時に他方に森林植栽の途を講ずる時は、その從來所有し來りし經濟力に對し、更に一段の増殖を行ひ得ること内地とは同一觀すべからざるべく、帝國林木の寶庫としての本道は尙未だ多大の將來を有するや言を俟たず。

四を占め、帝國總國有林面積に對しても同じく五分の四に居り、國有經濟林として迥に全國各地を超越せり。即ち供用林地の廣さは全國府縣の首位に立てる青森縣に比し五倍の大きさを有し、又保安林も右府縣の第一にある富山縣に比して一層大なり。國有林に次ぎて大なるは御料林にして、亦帝國の第一を占め御料林總面積に對し約三分の一、而かも全部供用林に屬せり。公有林も同じく全國の首位に居り全國公有林面積の九分の一、府縣中の第一者たる長野縣に比し約二倍の面積を有せり。以上の森林に比して甚しく寡小なるは私有林に屬し、本道全森林面積に對して概ね四十分の一、之を諸府縣に比すれば、略關東北部の一縣と匹敵すべし。その他國有林の一利用たる部分林の全く存置せざるは理の當然に屬す。

左に明治四十四年三月末現在(御料林は明治四十三年末森林面積並にその所有を示さん。

御料林	國有林	公有林	社寺有林	私有林	合計
空、四、七、九町	四、三、九、五、七、八町	三、九、八、六、三町	一、二、三、三町	一、四、一、九、一、六町	五、三、五、九、九、四町

森林の分布

更に本道各地の分布を一瞥せんに、内地に於ても既にその例を見る如く、森林の疎密は開化の程度と密接なる関係を有し、半島地方に疎にして軀幹部に密に沿岸に荒廢し之を内陸に遠ざかること愈大にして益々蒼蒼を加ふるを見る。同じく軀幹にても石狩平原開拓の中央部には原生林全くその跡を絶ち、極目十數里時に林影の點綴せるを見るは只落葉松の未成林のみ。是に反して去て本道の中心たる富良野地方に到らんか、喬木老樹山を互り谷を填め、眼界只一抹の闊綠色生動せるを見るべく莊大崇嚴の景筆舌の外にあるものあり。釧路北見の境天鹽川の峡谷に日高の北邊、數へ來れば這種内陸の巨林一々枚擧するに遑あらず。今本道各地森林の密度に關し例を國有林に取りてその一斑を窺はんに、地方面積に對し高率の國有林を有するは北見日高の二國にして、共に各地の面積の半以上を占め、是に反して稍低率の地方は石狩渡島後志根室等にして各地面積の四分の一乃至三分の一に當れり。このうち根室のみは他と同じく人為的荒廢を以て目すべからずして、氣候土質等自然の障害に基くもの多しとす。

林政區劃

林政區劃 北海道國有林の管轄は内地と趣を異にし大林區政と離れ、道廳直接に之に當り、地方を札幌函館上川釧路及び網走の五營林區に分ち、それぞれ區署並にその下に分署を置きて林政を分掌せしむ。又御料林は御料原野約四萬町歩、(全御料原野の約四分の一に當る)と共に帝室林野管理局札幌支廳に於て管し、その全區域即ち石狩天鹽膽振日高釧路の五箇國に該札幌支廳下の五出張所を置けり。次に國有御料の兩林に關する官署の所在を示さん。

國有林

營林區署	分署所在地
札幌 (北海道廳内)	小樽 後志國小樽區 岩内 後志國岩内郡岩内町 室蘭 膽振國室蘭郡室蘭町 浦河 日高國浦河郡浦河町
函館 (渡島國函館區大繩町)	檜山 渡島國檜山郡江差町 森部 後志國森部郡森部町
上川 (石狩國上川郡旭川町)	空知 石狩國空知郡岩見澤町 増毛 天鹽國増毛郡増毛町

網走 (北見國網走郡網走町)	宗谷	紋別	紗那	根室	河西	天鹽
	北見國宗谷郡稚内町	北見國紋別郡紋別村	千島國紗那郡紗那村	千島國根室郡根室町	十勝國河西郡帶廣町	天鹽國天鹽郡天鹽村
川上	天鹽國中川郡中川村					
中川	石狩國中川郡神樂村					
上川	石狩國上川郡神樂村					
札幌	石狩國札幌區					
夕張	石狩國夕張郡登川村					

御料林(帝室林野管理局札幌支廳出張所)

出張所

所在地

釧路國川上郡弟子屈村

天鹽國中川郡中川村

石狩國中川郡神樂村

石狩國札幌區

石狩國夕張郡登川村

主要林産及び施業概況

本道の主要林木は概ね内地に於て林量大な

主要林産及び施業概況

らさるものに屬し、その數五十餘に上ると雖、就中用途の大なるは針葉樹にては蝦夷松、樺松、羅漢柏(檜)姫小松、楠、別名水松、潤葉樹にては桂、厚朴、菩提樹、黃蘗、榲桲、楸、胡桃、桃、樺、亦楊、山毛櫸、七葉樹、刺楸(栓)、栗等なり。このうち胡桃は白楊樹と共に殆ど伐採し盡され、桂、刺楸等の良材も逐年その林量減少するに至れり。上記の林木は概ね全道各地に産すと雖、只羅漢柏、姫小松、山毛櫸、七葉樹、栗等は半島の南部に限られ通じてその繁茂を見ず。用途に就て概述すれば蝦夷松、樺松は製紙原料に電柱曲物材に用ひられ、殊に蝦夷松は燐寸軸木及びその小箱として適當し、樺は桶類、小細工品等に、羅漢柏、姫小松はその量少しと雖、度量衡法に據り樹の材料に擇ばる。桂は建具類、卓子、小細工物、清酒醸造用の酒舟材、往々鉛筆の軸木に供せられ、厚朴は貼板、柱、時計、小細工車擲、菩提樹は漆工材、箱板材、セメント、樽材、製紙原料、燐寸軸木、櫓はオホナラ、ミヅナラ共に用途廣く、麥酒樽、車輛、船具、電柱腕木、下駄、齒曲木、細工より建築材、鐵道枕木、椎茸原木等に至る迄供用せられざるなし。尙樹皮は櫛の皮と同じく製澁用とせらる。外國輸出木材として年々多大の額に上り、近時歐米諸國の市場に出で、好評

噴々たるもの蓋し偶然に非ず。黄蘗の樹皮の染料薬品に供せらるゝ以外、その材の建築材・鐵道枕木・船艦材等に用ひらるゝは櫛と同じく、楡また下駄材・鐵道枕木として名あり。赤楊は床板床柱として光澤美しく、世人の愛玩するところとなり、樺も爐縁窓框としての光澤を珍重せられ、樹皮は耐久性屋根葺材たり。その他胡桃の銃床用として定評ある、刺楸の器具材・下駄材及び苹果箱用として通く使用せらるゝ等一々擧ぐべからず。

更に森林經營に關して之を觀るに、前にも既に屢述べし如く、本道林業の主力は概ね自然林の伐採に傾注せられ、大小の製材所によりて商品となるもの殆ど林産の全部を占め、造林副産等の施業に至りては未だ殆ど特筆すべきものなし。抑も造林の事たる天然林豊富なる間は殆ど各人之を顧みざるは常なり。されば北海道に於ても内地人移住の當初は、その沿岸居住地の、周邊に横はれる山林を伐採し、その荒廢するに及びて之が後事は又顧みることなく只管に内陸未着手の森林を侵略せしは、幕府直轄前後松前藩の林政荒怠の史實に徴して明かなり。但し延寶年間松前藩の始めて江差の檜山・羅漢柏の山林

を稱し、後世郡名となれりを開くに方りては、伐採の法頗る備はり敢て荒廢せしむること無からしめんことを期したりしかども、移住人の増加と木材需用の漸進と並に沿岸航通の便益、開けたるとは、之が監視保護の途愈々困難となり、不識不知の間に隨處に濫伐を見るに至りしが如し。幕府直轄領時代即ち文化年間函館山に現存せる杉の植林を施し、或は膽振國千歲地方に赤松を植栽せしは、實にこの弊に鑑みたるに因るものにして、その後は幕末は勿論明治維新以後に於ても、常に官憲は一方自然林の保護に勦め、樹種を擇びて濫伐を禁じ、他方に於ては松・杉・扁柏・桐等の植林を勸め、先づ函館・札幌等の早く開け、従つて材木の缺乏を感じる處に種苗所を設けて、他地方にも之を倣はしめ、或は保安林・施業林の制を定め、聚落の發達せる地及び交通線開けたる處には、必ず植林を伴はしめ、その主要林種は前掲、近時に及びては主要植栽林たる落葉松は、各地稍集約的施業行はるゝに至り、尙北海道廳は保安林事業に關して益々計畫するところあり、鐵道管理局の如きもその鐵道沿線に防雪林として盛に落葉松の造林を營み、その他一人にては輕川造林會社もこの

森林副産物

施業に於て顯著なる成績を表すに至れり。尙一般に模範林の造設、或種の樹木の天然更新、各種林産副産物の製造等漸次普及發達する傾向なり。翻つて製材の事業に就て之を觀るに、從來の林業經營の不振とは大に異り、木材の需用増加すると共に益、興隆に趨き、今やこの工場の數大小六十餘、職工通計九百に近く、全國有數の木材供給地となれり。蓋し木材工場は略、愛知、静岡と匹敵し、職工數は帝國の首位に立ち、その製材價額數百萬圓に上り、全國木材輸出の過半は本道諸港より搬出する現勢なればなり。此等の工場中最も有名なるは三井物産株式會社の砂川工場を推すべく、規模の大なる、製出量の多き共に本邦第一流のものたり。尙小樽木材株式會社の小樽並に北見工場、札幌木材株式會社の札幌等も名高し。製品は板類、鐵道枕木、造船材、下駄材等各種のものに互れり。

森林副産物中著名なるは紙、燐寸、軸木、同小箱、單寧液、醋酸、石灰、木炭、椎茸にしてこのうち燐寸の製造業は全國にては兵庫縣の次に位し、殊に軸木の製造に至りては甚だ有名なれど、此等は工業の條に譲るべし。木炭以下は舊來の製法

林産需給の概況

劣惡なるに鑑み、最近數年前より大に改良の道を講じ、囑託教師を置きて講話實地傳習等をなさしめ、特に木炭に至りては大に好績を擧げ、白黒炭及び在來式改良等を併せ明治四十三年の産額百萬圓に達せんとし、本道の消費に應ずる以外、尙内地及び外國即ち支那、關東州、シベリア等に向つて多少の輸出をなすに至れり。主要生産地は室蘭、空知、上川、後志、函館等の支應管内なれども現時は各地おしなべてこの製造に従事せざるなきに至れり。椎茸は未だ年産一二萬圓に過ぎずして、浦河、釧路の兩支應管下に多く、函館、檜山、後志等半島の支應管内は之に次ぐ。

林産需給の概況 本道林産の豊富は多大なる供給力となり、内地各港殊に小樽、室蘭、釧路等より外國に向つて搬出する量甚だ盛大にして、従つて此等諸港は全國にても屈指の木材市場たり。特に小樽は大阪、東京等の大市場に亞げる地位に立ち、木材一ヶ年の取引高非常に多く、その得意先きは内外國に互れり。其の内地搬出の地は阪神、東京、門司等をおもとし、時季に關係することなく、需用に従ひ常に荷動き活潑なり。又外國貿易にては最近全國木材

輸出額七八百萬圓中、本道の分に係るもの實に三四百萬圓を占め(明治四十四年全國木材總輸出凡そ七百八十五萬圓中、本道分四百八十七萬圓)このうち小樽は約四分の三を出だし、以下室蘭・釧路・根室・函館の順を以て下れり。輸出先きは支那はその半に居り、アメリカ合衆國・オーストラリアその他ヨーロッパ諸國之に次ぐ。そのうちヨーロッパとアメリカとの需用は最近に起り、専ら檜その他の堅木を搬出し、内外人より將來最も多望とせられ、彼地に在りても北海道木材の名聲年に加はる盛況なりと云へり。製材の種類よりいへば固より鐵道枕木最も多きに居る。

三 水産

北海道は樺太と共に日本群島の極北に位し、其三方には太平洋・日本海及びオホーツク海を控へ此等の海洋は各その趣を異にせるを以て、海棲動植物の分布亦内地沿海に比しておのづから別に一區域をなすものゝ如く、しかも此等の海面は比較的高緯度にあるを以て従つて水産業も主として寒海性の水族

總説

に據り此等水族の種類・數量・産額・漁期より漁撈の法・利用の途に至るまで、截然として内地と趣を異にするを見る、鯨・鮭・鱈は必ずしも本道の特産たりとは言はず、本州の北部若しくは裏日本の沿岸にても漁獲せられ、中にはこれが漁獲の成績見るべきものなきに非ざるもその數量に於ては之を本地方に比し固より天地霄壤の差あるを見るなり。鱈といひ、アブラコといひ、ソイといひ或は海鼠・海扇ホウキ・北寄ホシといひ、昆布といひ何れも其の數量に於て迥に他を超越するものなるは言ふを俟たず、之と同様に南方諸海に漁獲盛なる鱒マス・鱒魚イナダの殆ど影を絶ち、鯉・鮪・鯛等貪欲性回游魚の割合に寡少なる、沿海淺渚には殆ど蛤を缺き内地河川に鮎・鰻の少き、數へ來ればまた際涯なきなり。若しそれ單に之を數量の上より見んか、明治四十三年全國臺灣・樺太・朝鮮を除く、以下之に準ず(生物介類其他水産動物・海藻類)の總漁獲高七千八百萬圓、うち北海道の生産に係るもの一千萬圓餘、食料と工業とを問はず同年全國水産製造品の總額三千八百餘萬圓、うち北海道より出せるもの約九百八十萬圓、孰の場合に於ても迥に全國諸府縣の上に在るは注目し値するところなり。試に漁民一

八別一ヶ年生産額を見るに明治四十二年に於て全國は平均七十圓、而して本道は約九十一圓、同四十三年に於ては全國は六十九圓、本道は百七十圓、漁船一隻別一ヶ年生産額は明治四十三年に於て全國は平均二百七十五圓、而して本道は平均三百圓、海岸線一里當生産には明治四十三年全國平均一萬七千圓、而して本道は平均一萬四千圓なり。即ち海岸線の上より見たる生産を除く外、諸例は悉く全國沿海諸府縣の上にあるを示せり。而かもこの漁季の内、地諸府縣に比して極めて僅少の時日たるを想はば、その時間的集約漁業の盛大なる寧ろ驚嘆に堪へざるものあるに非ずや(漁民漁船の統計は明治四十一年末現在を用ふ)。更に漁期に就て之を見るに、水族の種類により固より一ならずと雖、通じて冬季は不可能に屬し、殊に東北岸は沿岸海水凍結するは氣候條既に盡せり。而かも一方春猶到らざるに鯨群沿岸に喰嚼し、地面に於ては秋風十月鮭漁の衰ふるに従つて漁網既に納庫に藏さる。夏季は水温最も可、然れども主要水族は襲來せず。所謂雜漁期のみ、而かも東風(方言ヤマセ)連日に及ばんか、風浪高く船行くべからず、網投すべからず。之を彼の東海道若し

くは内海の沿岸に比すれば蓋し思半ばに過ぐべし。その他漁撈の法の極めて粗雑にして而かも實收の大なる、利用の専ら製造品に出で、食料としては内國は勿論外國殊に支那を顧客とし、肥料としては内國の需用に追はるる等、本道水産業の特色は一々擧ぐるに遑あらず。實にも本道の開發は漁業に徇り、農業に與る交通の起源聚落發達の方向、之を史に求むれば孰か端を内地漁業者の沿岸植民に發せざる、以下物に應じ處に従ひ後條一々之を説かんと欲す。

尙水産振作及獎勵に關しては、官民共に苦心施設するところ尠からず。東北帝國大學農科大學は特に水産學科を置き、又道立の水産學校は小樽區に建設せられ成績頗る擧がれるあり、加之北海道水産試験場の小樽區の附近に設けられ、二支場の地方に在るものと共に、水産の實際に對して貢獻するところ甚だ大なり。今水産試験場の所在を示せば次の如し。

- | | |
|----------|------------|
| 北海道水産試験場 | 後志國高島郡高島村 |
| 同 | 千歲支場 |
| 同 | 石狩國千歲郡烏棚舞村 |
| 同 | 西別支場 |
| 同 | 根室國野付郡虹別村 |

漁區及び漁場

生物分布の境界線たるブラックストーン線の通過する津輕海峽以北は水陸概ね大陸若しくは大陸沿岸性動物の棲息區に屬すと雖、漁區として之を觀る時は、海流並に一般海洋氣候の影響により、日本海岸太平洋岸オホーツク海岸及び千島近海の四に分つを便とす。日本海岸は暖流對馬海流の通ずるところなるを以て海水温は常に同緯度の太平洋岸より高く、この水温を産卵期に利用せんとする鯨の如きは本道の春季陸上の氷雪未だ融けざる頃より來襲し、僅々一二ヶ月の間、本道水産の大部是が爲めに成るに至る。鯨以外にても日本海の南部即ち裏日本沿岸にて漁獲せらるゝ暖水産の水族は、概ねこの海岸に現はれ、鯛、鮪等の産あり。されど鮭、鱒の類はこの沿岸並に之に注げる河流に於て漁獲せらるゝ量尠しとせざるも、之を東海岸若しくは東北海岸に比すれば迥かに少量なり。然るに太平洋海岸に至りては鯨の漁は一般に西岸に比しては少くして、襟裳岬より以西の所謂南海岸は殊に其著るしく少なきを常とす。是に反して鮭、鱒は夏季の來襲西岸に比して夥しく、海扇北寄等の北海介族もこの方面に蕃殖し、昆布またその多産地は殆どこの區に

限らる。一般に漁季は西岸に比しては短く、鱒漁の如き冬季に屬するもの該季節の利用渺々しからず、翻つてオホーツク海岸に就きて見るに、西北の方宗谷海峽は對馬海流の一分派を導き、従つて北見の沿岸氣候はその影響を享くれども、その外方には樺太の東岸を南下せる寒流樺太海流の之と並走して東南に流るるあり、尙知床岬附近より根室灣に至る間並に千島南部の二大島國後擇捉の近海は、此等寒暖流の消長潮流駛走の強弱季節に依りて著しく差異あるを免れざるを以て、通じてこの方面の水族は西岸東岸兩濱海の性を混有し、兩岸の漁獲物は大概此處に之を見ざるなし。只知床岬附近より釧路の沿岸に至る區域は、本道の東角に當り、沿岸氣候自ら他と趣を異にするものあり、嚴冬時には海水温の低下殊に著しく、爲めに一部濱海の水は凍結し、初春には流水浮動する處となり、又夏季には卓越風の影響により濃霧を醸すが如きことありて、水族は之がために稍その分布の状態を異にし、彼美味なる鮭、鱒はこの附近に多く産し、鯨の如きも小鯨と稱するものこの近海より南方日高膽振の沿岸に現れ、昆布の發育特に佳良にして長さ數丈に及ぶものあり

り。更に千島近海を一瞥せんに、この南部の二大島國後、擇捉並に水晶群島は概ね太平洋・オホーツクの兩海岸性水族の棲息する區域なれども、得撫島以北は陸上動物と同じくカムチャツカ半島系の動物區域に屬し、北海道本島・樺太の水産とは趣を異にする點多くして、鯨族中の紅鯨・銀鯨特に著しく現れ、是に反して彼に普通なる魚介漸くその數を減じ、一般に北アメリカ洲・カナダの水産と類似するところ尠しとせず。

本道の沿海はいづれの方面も陸岸又は之に接したる海底の地形並に地質の狀勢に大差なく、概して小區域の懸崖を除けば緩斜せる海岸段丘若しくは平夷地の砂深き海底に連續する處なるか、或は岩磐より成れる海底の緩斜せる陸岸と相接する地に屬せるを以て、内地諸大島に於て普通見る如く、水族群接地若しくは之が集團的通過として、特に或地域を區別するの必要なく、只季節に應じ海洋氣候の如何に基きて、主要漁場諸方に移動する觀あり。換言すれば全沿岸は殆ど盡く漁場にして即ち方言の所謂場所にあらざるはなく、唯自然と經濟界の事情により時に漁獲の多少あるを免れざるなり。最近十數

年間の經驗によれば、半島部の西岸は鯨の漁獲頓に衰へ、是が爲に江差・福山等の都會を始め附近の漁邑大に荒廢に傾きたることありと雖、一兩年前には又他に譲らざる收穫ありたることあり。されば好く自然の事情にさしたる變化なきにせよ漁場の施設にして不備なることあらんか漁利を失ふこと亦免れ難きことにして、特に本道の如く漁業家又は資本者に異動多く、加ふるに一般漁夫殆ど悉く當該季節毎に内地より傭入れらるゝを年々の例とする處にありては蓋し免るべからざる趨勢なり。但し水族によりてはその棲息又は漁獲の區域略一定するが如きものなきにあらず。そは各説の際に於て述ぶるところあるべし。

漁戸及び漁民

漁戸及び漁民

本道の漁業は本道開發の先驅となり、現在に於ても有力なる産業たるを失はずと雖、漁業者は農業者の如く悉く内地人の移住者より成り、而かもその勞働者は漁季毎に概ね内地より招致するものなれば生産額の多大なる割合に漁業者の數内地の例に比して甚だ少なし。即ち漁業者の戸數明治四十一年末現在(專業兼業とも之に入る、採藻業者及び製造者は含ま

す以下之に準ずは全國總漁戸の二十分の一(全國總漁戸五十二萬九千七百餘戸、内本道漁戸二萬九千七百餘戸)にして之を九州に比すれば長崎縣よりもその七分の一少く、鹿兒島縣より稍多きに過ぎず、然るにその水産漁獲高は全國の八分の一に上るが故に、一戸宛漁獲高は内地有数の漁業地九州と雖、迥に之が下風に立たざるべからず、尙本道のみにては現在總戸數に對し漁業戸數百分中の十七戸に當り、又漁民は全國總漁民の約七分の一(全國總漁民百七十四萬餘人、内本道漁民十一萬六千餘人)、之を又九州に比すれば、彼の總漁民に對して四分の一なるに比し迥に少く、従つて生産は割合に大なり。本道のみにては現住總人口百に對し漁業者人口十二人、即ち長崎より少く、九州の平均よりは大なりとす。尙本道に於て定着漁民の地方的分布を見れば西岸地方最も多く、特に南は函館附近、北は宗谷増戸の二支廳に著るし。是に反して東岸は一般に密度小にして釧路根室の支廳管下は割合に多く、日高の沿岸又頗る多く。而して北見沿岸は最も寡小なり。動態より之を觀れば明治四十一年に於ける來住者は六千五百餘人、往住者は三千六百餘人にして、其中宗谷

支廳管下は來住いづれも最も多く、共に二千人を起え、之に次ぐは根室支廳下の來住一千人、往住六百餘人にして、一般に樞幹部の北部若しくは東北部に多きは、開拓進歩の趨勢と一致するところなり。而して他職業に比較し特に漁業者の來往常なく、殆ど漁業者の全數に亘りて之を見るは往時よりの本道漁業の特色と見るべく、漁季並に這種勞働の内地と全然趣を異にするを説明するものならずんはあらず。出入漁民の原籍地は奥羽地方最も多く北陸道山陰道の一部またそのうちにあり。此等の地方は概して冬季長くその閑生産力大に減退する處なるが故に、經濟上の自然の法則に準じかゝる顯象を呈するなるべしと雖、距離交通の便否等もまた與つて力あるは、かゝる風習の遠く往昔より拗りしによりても察知すべし。その此等の者の春未だ淺き頃を中心とし、之より前後にかけて渡航し、八十八夜以後挿秧期に及びて歸國するや此等の地方の汽車汽船共に這種の勞働者によりて満たされ、青森を始めとして岩手秋田山形及び北陸山陰の沿岸諸港時ならぬ殷盛を呈するは本邦他地方の殆ど見るを得ざるところなり。尙此等勞働者は必ずしも漁業者のみに限

らず、農業者むしろ多數を占め、漁季所要の一切の勞働に従事するを普通とす。

漁船は漁業地の自然的事情並に漁獲物の種類數量及び消費状態の如何に因りおのづから構造設備を異にするは當然なれども、本道の漁業は専ら地先漁業即ち磯漁業に限られ、且水族豊富なるが故に漁獲猶未だ割合に容易なるを以て經濟上漁獲法雜多なるを要せざる現状なり。されば漁船構造は内地に比すれば甚しく劣位に居り、發動機を有するもの一隻もなく明治四十三年未現在に、日本形漁船は長さ五間以上のものにしてその數約一萬六千隻、全國該種漁船の總隻數二萬九千餘隻に對して過半數を占めたり。長さ五間未満三間以上のものは二萬二千餘隻にして、全國の約十二萬四千隻に對しては六分の一、三間未満のものは約二萬七千隻にして、全國の二十七萬餘隻に對しては約十分の一を有し、前者は府縣と比較して首位に立ち、後者は少しく長崎に下るのみ。西洋形漁船に至りては汽船は全く之を缺き、僅に帆船三隻を有するに止まり、而かもそのうち補助機關を有するもの一隻、他は之なきものな

漁獲物

り、之を要するに漁船は鱈鳥賊等の釣漁大に起りてより改良川崎船の如きもの續々現れ出でたりと雖、一般に在來の形式に泥み、漁網漁具の如きも改良の餘地甚だ多しとなす。但し官憲は濫獲の弊に鑑み各種水産の漁獲に制限を加へ、漁網漁具の使用に禁令を下せるもの多し。水族により漁獲法に差違あることは後條記述するところあるべし。

漁獲物

本道の漁獲物の全國の總額に對する割合を見るに、年によりて多少の異動あるを免れざれども、概ね七分の一乃至八分の一を占め、明治四十三年には全國總漁獲高七千八百二十八餘萬圓のうち、本道産は一千八百萬圓餘に上れり。更にその種別に就きて言へば、生物總産額六千六百六十萬圓のうち七百六十萬圓(八分の一)、介類總産額三百四十萬圓のうち四十萬圓その他の水産物にて全國總産八百七十四萬圓のうち約八十萬圓、藻類總産四百五十萬圓のうち百三十萬圓(四分の一)の額に達せり。本道所産約二百五十種の魚類中特に内地に對して特筆すべきは鯨、鮭、鱈、鱒なりとす。鯨は内地にては青森縣の東岸に少許の漁獲ある外、主として能登半島以北日本海沿岸に漁獲せらる

れども、極めて少量に止まり、明治四十三年の全國總産約五千二百萬貫のうち、本道は四千七百餘萬貫、總價額約四百七十萬圓のうち本道の産額四百二十餘萬圓なり。鮭は内地にては本州の東海岸並に日本海沿岸に漁獲せらるれども、又その額少く同年の全國産二百六十六萬貫のうち本道は百七十八萬貫、總額百五十萬圓のうち本道の産額八十六萬圓、鱈も全國産一千二百萬貫のうち九百九十萬貫、價額總産約百十萬圓のうち七十六萬圓に及び、鯨は全國産三百三十萬貫のうち二百七十萬貫、價額總産約百萬圓中約六十萬圓に上れり。その他年産一萬圓以上に上るもの鱈、鮪、比目、鯨、鰻、鰯等を擧ぐべく、金額之より下るも稍特産として注目すべきは鱈、ソイ、アブラコ、秋刀魚の類なり。尙二番柔魚は日本海沿岸に最も多く漁獲せられ、年産約五六十萬圓、全國總産に對し約四分の一乃至五分の一に當り、鮪も兵庫縣に次ぎて多く、海鼠は全國の首位を占む。北寄海扇は固より本道は多産地なれども、漁撈未だ盛大なるに至らずして産額は年産僅に數千圓、鮑また這種のものに屬し、牡蠣は獨り厚岸灣を多産地とす、但し近時人工養殖を施せり。この外陸上の水産にては内地

鯨

河川にて到る處に見る鮭は甚だ少く、之に代はるものは鯨鯨なり。これは自然の湖江産卵によりても蕃殖すれども、一方には人工孵化の事業大に起り、前述道廳水産試験場の二支場千歳西別をはじめ、民設約廿箇處を算す、就中千歳支場は明治廿一年の設立に係り、幾多の研究と實驗とを積み、現時の成績極めて好く、民設人工孵化場の指針たり。その他鯨鯨等の養殖あれども、未だ顯著なるに至らず。左に以上各種の漁獲物に就て産出の状況を述べし。

鯨 北海道水産の起源をなし、内地よりの移民現れし昔より現時に至るまで連綿として漁業の首位を占め、本道經濟界の浮沈を支配するものは鯨なり。これは小鯨と稱するものを除き暖流と密接なる關係を有し、最も早きは一月頃より遅きは六月中旬までその流行區に現れ、沿岸平磯をなせる藻類繁茂の地に産卵せんとして群集するに外ならざるを以て、その漁獲の時期は南方に早く盛漁は三四月の頃なり。之より漸次西海岸を北上し、四五月の交に及び、宗谷海峡より北見沿岸は最も後れ四月より六月中旬にかけて漁獲を見る。根室國後の附近またこの頃多少の漁獲あり。年により豊凶著しく差あれども、

偶、準備十全なるに際して群鱈累々として迫り留游數日に及べば、一漁場僅々數時間にして一網の漁獲千石(鱈粕となし四千貫なるを百石と稱す)價一萬圓を超ゆべし。尙この漁季は群來時期三回に分れ走中ハシリナカ後と稱し、この季に漁るを産卵鱈と名づく。この外六月より八月にかけ本道南海岸東海岸に現るゝを小鱈と稱し、漁獲前者に比して少し。之を要するに鱈は初春より初夏に亘りて漁獲最も多く、中夏若しくは冬季は、漁區も狭く産額も少し。漁具はおもに産卵鱈に臺網類(行成網角網の二種落網類及び刺網、小鱈に地曳網臺網類及び旋網を用ふ。生鱈は殆ど全部製造品おもに搾粕身缺鱈等)となし、生魚の儘に消費するはその地方に限られ、薄鹽となせるもののみ奥羽地方、近時は關東以西にも販賣せらる、一ケ年生産は年々減少する傾あれども、猶概ね四五千萬貫より二三千萬貫(百萬石乃至五六十萬石、價額五六百萬圓より三四百萬圓の間)に在り。鱈粕の供給不如意がちなるに加ふるにその代用品とも見做すべき豆粕、礦物肥料等の需用著しく増大せしを以て、鱈漁業者中には鱈漁に轉ずるもの尠からず。従つて鱈漁の將來は一般に減少するを免れざる如し。

鱈

鱈 鱈は北方水産物中殊に其味の美なるを以て稱せられ、往時は恰も現時の樺太に於ける鱈の如く、沿岸河川共に到る處に蕃殖し、その漁獲も著しく多大なりしかども、漁撈法の進歩と共に濫獲行はれ、内陸の開発につれて漸次産卵河床荒廢せるものから、近年の漁獲一ケ年平均三四萬石價額百萬圓を下ること多し。全沿岸並に河川には往くとして多少の産を見ざるなしと雖、わけて著名なるは石狩北見根室及び日高を推すべく、おもに河川を溯上するものを漁獲し、石狩川は最も名あり。漁期は地方によりて差あれども、鱈漁の開散期に當り北東沿岸及び千島は九月十月これより少しく後れて十勝日高石狩川は十月上旬より十一月上旬までを最好期とし、その河口に於ける曳網多漁の光景は實に内地人の夢想すること能はざる盛況なり。但し河川に於ける漁期には固より制限下にあり。鹽鱈となし内地に送ることは往時と異らざれども、交通の發達と一般商業の進歩とにより、近來は内地にても遠く關西方面に商區を擴めたり。味の最も美なるは根室西別川産の鱈にして、各地の市場に於て價額常に他の産を凌ぐ。漁具は臺網及び地曳網とす。

鯉

鯉も往時に比すれば漁獲年々減少し、近時一ヶ年平均三四萬石、五十萬圓を下ること尠からず。產地中千島最も顯れ、殊に擇捉最も豊富にして、國後之に次ぎ、根室支廳管轄内の産は殆ど常に本道全産の五分の四を占む。この外は概ね東北海岸南海岸及び津輕海峽方面にして、其他各地沿岸河川共に多少の産を見ざるなし。漁季は鯉漁の終期と一致し、千島は七八月を以て盛漁期とす。種類は北海道鯉の外に冬季より初春にかけて現るゝを口黒鯉櫻鮭とし、尙千島擇捉以北、北するに従ひて漁獲多きを紅鯉と稱す、用途は古來大部分を鹽物となし、その分布は寧ろ鹽鮭よりも廣く、近年に至りては南支那方面の需用を誘發するに至れり。但し樺太及びシベリア沿岸の産市場に現れ來り、その打撃を受くること少しとせず。漁具は鮭と同一なり。

鱈

鱈 寒海の底魚として收益最も多きものは鱈なれども、この漁獲は往時は割合に行はれず、近年に至り著しく好況を呈し、全沿岸いづれの地もこの産あり。只漁季は概ね晩秋より始まりて冬春の間にあるを以て、鯉漁季に重複し、ために漁獲に力を専らにするを得ること多く、殊に盛漁期は海上氣候最も

其他の魚介類

險惡を極め、これが釣漁至難なれば、漁獲高は鯉鮭の下風に立たざるべからず。現時最も多産なるは西岸積丹半島附近、北見の北部根室近海並に渡島半島西南岸なりとす。多く乾鱈(開鱈)捧鱈に製し、捧鱈の如きは内地は勿論年々支那に輸出す。又生鱈若しくは薄鹽物として奥羽關東方面に搬出する量尠からず。以上の外真鱈も多少の産ありて南海岸津輕海峽方面にては夏季より冬季に亘りこの漁獲あり、そのうち膽振日高地方にてバカ鱈と稱するは小鯉なり。鮪鯉の漁業は近時漸く盛運に向ひ、鯉比魚目(ノオトヒョウ)は在來より殆ど固定せる中産魚族と稱すべく、二番柔魚は七月より十一月にかけ、津輕海峽並に渡島半島の西岸に於ける主要産に屬し、夜間數千の漁船燈火を掲げて之を釣る光景は宛がら海上市街の觀を呈す。その他海鼠北寄海扇鮑も磯付水族として隨處に蕃殖し、古來本道の主要産と稱せらるれども、産額は前掲のものに比すれば迥に少し。殊に濫獲の結果此等の製造品の支那に輸出せらるゝものは近來漸く衰運に向へり。されば道廳は此等水族の禁漁期を定め、輪採法を設けて蕃殖の法を講せり。

海藻類昆布

海藻類 海草類には若布石花菜海羅昆布等あり、古來沿岸突角をなし且つ岩礁多き處には大抵孰の地にても此等の産出物を見たりしが、漁業の發達に伴うておのづから天物暴殄の弊に陥り、只管に採取量を増大せんとせしかば、近年益々生産減少の傾向を免れず。このうち最も生産著大なるは昆布にして、年産概ね百萬圓を下らず、本道水産中鱈の次位にあり。その種類頗る多く、従つて需用者の嗜好に従ひ内地向(支那)の別ありて、通例渡島の兩半島岬端附近(殊に龜田半島の南及び東北岸)、北見の利尻禮文二島の産は質佳良にして、その諸種の製品は内地人の歡迎するところとなり。又襟裳岬沿岸殊に日高の東南岸、釧路より根室花咲半島並にその延長の方向に横はれる水晶諸島は、往昔より昆布の發育最も盛なる區域に屬し、幅長き厚き等の人を驚かすに足るもの現時も猶成長し、往々數十尺の長きに達せるものあり。但しこの方面の産は、夏季の天候の如何に由り採取期、日干しの時間意の如くならず、産額製品の成績年によりて差異多し。販賣地は支那を主とし、函館はこれが仲繼場として夙に有名なり。採取の法は簡單にして鍵鎌捻棹等を用ひ、

その期間は七月より十一月までなれども、夏季は東岸一帯濃霧時に著しきを以て年により長短あり。採取後一定時間砂濱若しくは岩礁の上に日干しする様は、宛然京都の加茂碓に染布を運ぬるが如く、而かもその規模は固より大に、北海の偉觀たるを失はず。尙昆布より製品沃度液を造れども少量にして食料供給高とは比すべくもあらず。

重要水産物産額累年表

年次	鱈	鮭	鱈	鱈	鱈	柔魚	昆布
明治三年	一三、九四	一八、九三	一、八四	三、九四	?	?	三、六二
同四年	二七、五八	二九、八七	七、五	九、五八	一、〇四	二	二八、二七
同五年	三九、〇五	六、三三	?	一九、〇八	一、五二	一、六七	八、九、五八
同六年	三、四、四九	五、五八	七、三四	二、四九	一九、八六	三、五九	八、八、六三
同七年	五、六、〇三	三、六、〇七	一、三、三九	九、五、六三	一、七八〇	三、三八	七、七、三六
同八年	四、九、九九	五、〇、二七	八、二、六九	一、七、七、五四	三、三、〇一	五、八	六、八、三、〇四
同九年	七、六、八、六	五、九、二、〇	一、一、〇、三九	一、五、七、五九	二、七、三、七	五、四、七	九、七、二、〇〇

明治十年	七一九,九五七	六二,六一〇	一五,四三三	八八,六五	五,八五六	一〇,六五	八八,七三
同 十一年	六二〇,八一	六九,五二	一三,九三	一九,一八七	二五,五六九	一七,〇八	一四,二五二
同 十二年	七六四,二四四	一〇七,九〇〇	一八,五九五	二四,一一二	一七,八六〇	二九,七	一九,九五四
同 十三年	九二一,八四二	一三三,三三七	一七,七七七	四三,一五〇	二四,八九六	四,三三五	一六,九五四
同 十四年	八七二,〇六七	九〇,六五八	一六,一七九	一九,二八九	一〇,六〇〇	一,三三九	三二,二〇六
同 十五年	九八三,四八六	一〇六,八四四	二,〇〇六	二四,九四九	九,四五六	一,九四七	六九,五九八
同 十六年	七三四,六七七	一〇六,三三六	一六,八二七	四三,八一〇	八,八〇七	二,八〇二	八八,三三二
同 十七年	九五二,七七七	八四,五五八	二四,六三五	三三,四二〇	三,八七〇	一,五四一	三二,二五六
同 十八年	八八六,二七一	九九,三三八	二二,九八〇	二四,三六五	一六,三〇四	二,二〇一	三三,三五六
同 十九年	九〇〇,〇三六	一七〇,五五〇	五,〇九〇	三三,八六九	二,一八〇	四,七五二	一八,七九四
同 二十年	六六六,〇九〇	二二,九九四	三二,八六一	三七,九五〇	九,三〇〇	一,七〇〇	一四,九六七
同 二十一年	九〇二,八〇九	一六八,八四四	四八,二二七	二七,七三六	一〇,四九二	一,二二二	一三,九八二
同 二十二年	八四二,九四三	一七三,一六四	一五,六二八	四二,四九五	二,九六二	三,二七〇	一四,九五六
同 二十三年	九四七,六三八	九四,七九七	六二,三三九	三七,三八〇	一五,一〇二	五,六〇四	一七,〇八五
同 二十四年	一,〇七六,一一四	八三,六四二	二二,三二〇	五八,六四七	二,五二六	三,三三二	一九,五二九
同 二十五年	七九四,八三五	一〇七,九六〇	五七,七四	三九,九九九	一四,三七二	三,〇〇七	一九,八七三
同 二十六年	九二七,三三八	一八,一〇六	一五,三三八	一四,五七二	一八,二九三	六,七五五	二七,四二七
同 二十七年	一,〇四四,四七九	五九,〇六三	六〇,三九六	五六,五九九	一九,二六六	一,四〇八	一五,二四〇
同 二十八年	九九四,三五三	四八,四三三	二二,四三三	三七,五二九	一五,九〇八	三,〇四三	一三,〇六八

同 二十九年	九七六,五五八	五二,七〇八	六五,七二二	六三,五二四	一八,四〇二	六,二二	一四,三八七
同 三十年	一,二五四,〇七五	七〇,三六二	二九,九三〇	三七,四四四	三八,一五九	四,四七六	二〇,九五〇
同 三十一	八三七,二六三	六四,四四四	三三,七四	一七,〇六〇	三四,六七五	六,九九七	一七,九一〇
同 三十二	九〇〇,五六二	三九,一五五	一七,二九七	五三,七五七	二八,九六七	三,八六一	一六,九五九
同 三十三	七九九,七七八	四七,〇五五	一六,五〇八	九四,三三九	四六,二二八	五,一六三	一七,九五二
同 三十四	八八九,八七七	三四,六二二	一七,九六三	五八,五二二	四九,九九二	一八,一八二	三二,七五
同 三十五	八六六,三七六	二八,五九四	一五,二四四	二七,二五四	四六,九五四	二,三三六	二五,三三
同 三十六	一,〇三三,〇四九	四〇,一五六	二五,五五	六二,五二二	四一,〇〇六	一〇,三三二	一六,七六八
同 三十七	七五四,七〇一	三三,九六〇	二二,六〇〇	四六,三七三	五六,六四四	一六,八一九	二六,一八五
同 三十八	六四二,二九五	三九,二六八	三三,七二	四三,六六六	四四,四〇三	一〇,七六六	一五,三三二
同 三十九	五三二,七五三	三八,〇八五	三三,四四八	三三,三三九	三七,五〇六	一四,七七五	一五,四九〇
同 四十	五五七,四七	四二,四七〇	九九,二二八	四二,〇七二	三七,一七九	—	二六,八七九
同 四十一	五〇二,九〇〇	二六,九六〇	二四,三三三	七三,三二二	三三,三〇六	—	一五,〇七三

明治四十一年重要水産物産額及價額地方廳別表

支所	鯧		鮭		鱈		鱒		柔魚		昆布	
	産額	價額	産額	價額	産額	價額	産額	價額	産額	價額	産額	價額
札幌	三,七〇〇	三,四〇〇	三,〇〇〇	五,六六六	一,〇〇〇	二,五〇〇	一九〇	七〇〇	二〇〇	三八〇	—	—

水産養殖

工場を起し、その製品は内地人は勿論外人殊にアメリカ合衆國の需用有望と稱せられ、明治四十四年には同處に十五の該製造業者を見、その産額約百八十萬斤に及べり。尙宗谷附近禮文近海はこれが原料供給地として有望なりといへば、この業の隆盛想像するに難からず。但し罐詰の技術に關しては未だ熟練を缺ける非難あり。以上の外工業用品に魚油あり、おもに鯨油にして他鱈よりも搾取せられ、内外國に出さる。

製鹽

終に臨み水産養殖に關して一言せんに、本道は天然水族豊富なるを以て、未だ内陸河湖を利用してその養殖を試むる必要に達せず。従つて既述人工孵化を除き公私有養殖水面も甚しく少く、成績も内地の多くの諸府縣に下れり。主要養殖物は魚類にては鯉、鰻、介類にては牡蠣マガキと蜆ハマグリにして、厚岸湖の牡蠣は特に有名なり。海藻類にては海苔を擇べども極少の區域に限らる。

製鹽に就きては政府は函館に支局を設け、内地と同例に製造の計劃を立つれども、農商務水産局の發表せる明治四十二年水産統計年鑑に従へば、業務の整理未だ十分に行はれざる如く、製造人員十九名、煎熬釜數六箇、製造高

工業

約六萬五千斤、石炭消費高約百三十八萬斤なりし、従業者數並に製鹽反別を缺けり。但し明治四十一年までは釧路國厚岸郡濱中村に數戸の製造者ありて、同年に八十石の食鹽を製造せりき。

四 工業

本地方の工業は、自餘の産業に於るが如く其發展の初期にありては主として官業として營まれ開拓使は種々の工場を開きて其模範を示し、其漸く振興するに及びて漸次之を民業に移し、之より愈旺盛の域に進み、今日に於ては、工産物はその産額に於て、既に本地方産業中の第二位を占むるに至れり。殊に本道到る處に展開せる豊饒なる平野と森林とは沿岸の海洋と共に無盡藏の天産物と作物とを供給し以て直接間接に工業振興の資料を提供せるを以て一たび十分なる資本の放下と勞力の供給と之に加ふるに交通の便とを以てせば斯業の進捗料るべからざるものあるに庶幾し。されど今日に於ては、所謂殖民地的經濟事情により、各方面に於て未だ隆盛の域に達する能はず、海陸に

製絲

於ける豊富なる工業原料は、徒に原形又は粗製品のまゝにて輸出せられつゝあるは惜むべき限りと謂ふべし。従つて、大工場を有する大工業の發達に比して、家内工業は未だ十分に振はず、農家の子女の如きは、冬季半歳の間殆ど無爲に徒食しつゝあるものなきにあらず。今、順次、本地方に於ける工業について記述するところあらんとす。

製絲 風土蠶桑の業に適し、産繭の堅緻、絲質の優良、他の府縣産に比して、多くの特長を有すれども、其業、今に至つて猶微々として振はず。全く一部農家の副業に留り、器械製絲を爲すものは、僅かに五指を俵ふるに過ぎず。従つて産額また甚だ少く、到底他府縣に於ける蠶業地に比すべくもあらず。本地方の蠶業及び製絲業は、全く保護的狀態の下にありと言ふて過言にあらず。原料及び製品の主産地は、空知支廳管内にして、全道繭産額の二割三分を占むと稱せらる。

製麻

製麻 本道の地味は、頗る麻の耕作に適し、開拓使時代よりこれを奨励しつゝありしが、明治初年より漸次其改良を計り、機械を用ひて、其規模法を

改良し、札幌に一大製麻會社を設け、明治二十年代に至りては、其規模の廣大なる、機械の新式なる、産額の多大なる、本邦製麻界に一大警鐘を與ふるの盛況を呈するに至れり。大阪に大阪麻絲株式會社、大津に近江麻絲紡績株式會社、鹿沼に下野製麻株式會社等起りて、製品及原料の賣買に於て一時相互の競争ありしは、實にその結果たらすんばあらず。三十六年に及び、三社合併して、日本製麻株式會社と稱し、以て札幌に於る北海道製麻株式會社と對抗せしが、四十年七月に至り、更に帝國製麻株式會社の名稱の下に一大合同を試み、今日に於ては、全く本邦製麻業の主權を握るに至れり。而して札幌區北七條にある札幌製品工場は、實に本地方に於ける唯一の製麻工場たり。本道に於ける亞麻栽培地反別は一萬三千百六十餘町歩にして、收穫高五年平均七千七百七萬二千四百四十七斤に達し、これ等は悉くこれを栽培地附近の製線工場に於て製線して以て製品工場に輸送す。而してその製線所は、雁來、琴似、當別、新十津川、栗山、清真布、樺戸、虻田、紋籠、俱知安、帶廣の十二ヶ所にあり。製品は、これを絲、織物の二種に分ち、絲類には、

織物

帷子用細絲、生平用絲、蚊帳用絲、疊縁用絲、疊表及花筵經絲、漁網用撚絲、帆縫、靴縫其他、織物には、艦船用帆布、雨覆ズック、生晒服地用、及び各種のリンネルあり。而してズック及びダックは主として陸海軍及び遞信省の需用に供せられ、網用絲、帷子用絲、其他の絲類は多く一般市場に供給せらる。

織物 本地方に於ける織物業は、松前氏の時代より、農家に婦女の副業を得せしめんと目的の下に奨励を勉め、足利より工女を招き、大野村に機關場を設けて、絹、紬、縮緬等を織らしめ、又、七飯村及び藤山郷に在住せる武州八王子同心にも機械を据ゑ付けて織物を造らしめ、其後、開拓使時代に於ても、道廳時代に於ても、種々奨励の方法を講じたれど、植民地の常態として、勞銀高く、資金の利子高率に、剩へ原料の多くを他府縣に仰かざるべからざるを以て、今日に至るも、未だ著るしき發達を見るに至らず、年々輸入せらるゝ織物の價額七百五十萬圓餘に對し、猶々五千圓内外を製出するに過ぎず。産地は絹織物は札幌區及空知地方にして、其他は上川、龜田、檜山、

造船

岩内、有珠、常呂等に各地は産す。

造船 本地方沿岸の航路の開發に伴ひ造船業亦夙に興り、既に寛政年間に於てその業に従事するものありき。安政年間に及んでは、幕府造船所を函館に設け、外人の指揮を受くることなくして、西洋型帆船を製造したる歴史あり。現今に於ける函館船渠株式會社は、明治三十一年函館造船所を買收して、その營業を繼承したるものにして、一萬噸の艦船を容るゝに足るべき大船渠と一千噸内外の船舶を修理する修船臺とを有し、年々修理船艦にして入渠するもの五萬噸以上、船渠に上りしも二萬四千噸以上に達す。其他、個人の營業としては、函館に鳥野造船所、國永造船所、岩岸造船所、大竹造船所等あり。小樽に小樽造船所あり。木材は最も主要なるチーク材の他、主として檜を用ひ、又檜、松等を用ひ。

器械製造

器械製造 器械製造業も、開拓使時代より漸次に隆盛に赴き、民間各所に鐵工場を起すもの多く、現今に於ては、大は蒸汽機關より小は普通諸器具に至るまで、殆どこれが製作者を缺くことなきに至れり。ことに近來、諸般事

業の發達に伴ひ、在來多くは海外に仰ぎ來りし器械製造の主要原料たる鐵、鋼材の需要を喚起し、それと同時に、船舶の諸機械より鐵道鑛山等の用具に至るまでの總ての器械製作の夥しき需要を充さんが爲め、室蘭に株式會社日本製鋼所の設立あり。其他北海炭礦汽船株式會社の附屬事業として製鐵所あり。全道に於ける鐵工場、鑄物工場は其數三十餘に達し、その進歩まことに料るべからざるものあるに至れり。就中、前掲株式會社日本製鋼所は、明治四十年十一月の創立にして、資本金一千五百萬圓を有し、室蘭町字母戀の一部は、全くこれが事業に提供せらるゝがことき盛況を呈し、其敷地は海岸埋立地十三萬二千七百餘坪、所有地六萬五千五百餘坪の他に官私公有の借地等を併せ、四十萬二千餘坪あり。規模また頗る宏壯にして、工場用地の一角より海中に突出する堤防は長さ千三百呎幅六十呎に達し、その一側なる棧橋は乾潮時水深二十六呎を有し、百噸起重機は電力を使用す。而して埠頭及び御崎の兩點と各工場との間に廣狹數線の鐵道を布設し、以て運輸に便ならしむ。明治四十年以來經營せる大規模の工場は、近年に至り全く竣成し、煤烟常に

窯業

天に漲るの盛況を呈せり。その重なる製品は海陸軍砲身口徑十四吋以下、砲架各種、彈丸、鋼鑄物、鍛鋼物、鑄鐵物、水雷發射管、各種水壓機、鐵道用軸及び車輪、機關車及び運行起重機等なり。九州八幡に於ける製鐵所と共に東洋屈指の一大工場たり。北海炭礦汽船株式會社の經營に成れる製鐵場は、室蘭町附近輪西にありて、敷地坪數四萬坪餘を有し、規模また頗る宏壯なり。この製鐵場は主として本道産の鐵鑛石及び府縣より原料鑛物を仰ぎて、一晝夜五十噸を熔融する熔鑛爐を備へ、専ら銑鐵のみを製出し、以てその原料を日本製鋼所に供給す。

窯業 本道に於ける窯業は、陶磁器、煉瓦及び瓦、硝子器、石灰、セメント及び骸炭の六種にして、陶磁器、煉瓦及瓦の製造は松前氏時代にその歴史を有すれど、セメント、煉瓦、骸炭の三種を除きては、未だ甚だ幼稚なるを免かれず。セメントは、渡島國上磯郡大字谷好村に、北海道セメント株式會社あり。明治二十三年四月創設以來、次第に規模を擴張し、ドイツ製の機械を採用し、輪窯を以つて多額のセメントを製造す。近年更に「セメント」粉砕を

完全ならしめんが爲め、ドイツ製「チューブミル」敷基を備へし爲め、その成績良好にして、製造額日に増大す。現今は三十五萬乃至四十萬樽を容易に製出すといふ。而してその原料たる石灰石及び粘土は、工場を距る四五哩の地に産し、その搬出は凡て輕便馬車鐵道を使用せり。販路は内國の他主として露領樺太及びウラヂポストクに輸出す。煉瓦及び瓦は札幌地方、上川地方を主産地とし、其他各地方に多少の産出あり。今日に於ては、その産額、本道工産中重要な地位を占むるに至れり。製品は煉化石及び屋根瓦を主とし、間々土管、甕、網足を兼ねて製造するものあり。販路は本道の他各府縣及び樺太に輸出す。陶磁器は本道陶土の質甚だこれ其業に適し且つ其業の濫觴遠く安政年間にあるに拘らず、遅々として振はず、年産額僅かに七千圓内外に過ぎざるは惜むべし。しかも本道に於ける陶磁器の他府縣より輸入せらるゝもの年額三十萬圓に達するを思へば、斯業に従事するもの、大に奮起せざるべからず。硝子器は大日本麥酒株式會社の附屬事業なる製罐場を本道に於ける最も大なる模範工場となすの他、五六の工場なれど、規模、製品共に多く記す

へきの材料を有せざるは惜むべし。炭は鑛山業其他機械工業の發達に伴ひ、益々その需要を増加すべきを以て、本道の如き豊富なる石炭産地を有する地は、これが製造上最も好適の地位を占め、前途甚だ多望なるに拘らず、現今に於ては、唯、北海道炭鑛汽船株式會社の追分コークス製造場一ヶ所なるのみ。

製革

製革 本道の中土地未だ拓けざる所少なからずして、山林には野獸の生息するもの多きと共に沿海には海獸の特産に富み又一方には牧畜の進歩の著しく、従て製革業も亦有望なる事業の一つとして、開拓使及び道廳より奨励せられたり。今の函館製革所は即ちその事業の民間に拂下げられたるものなり。同所に之は、専ら毛皮鞣製を主とし、牛馬皮濫製を副とし、併せて靴、馬具等を製造せり。其他札幌に二三の製革所あり。原料は本道産は勿論、樺太露領アジアの各地より輸入し、その種類は、本道に於ては、獵虎、膾膈、膾、水獺、海豹、海馬、熊、鹿、貂、赤狐、黒狐、狸其他にして、ロシア産は獵虎、膾膈、海狸、海豹、海馬、黒白青三毛狐、馴鹿、狼、水獺等なり

とす。而して獸皮の品質は、ロシア領カムチャツカ産を第一とし、樺太産これに次ぎ、本道に於ける北見千島産またこれに次ぐと稱せらる。製品は毛皮、綵製のもの、防寒具用としてその販路海外に及ぶ。豹皮、狸皮は毛に光澤ありて頗る美麗に、且つ重量輕きを以て、貴紳淑女の防寒用外套、洋服の裏地、又はモフに使用せられる。

製油 本道にては、魚油、肝油、菜種油、及び薄荷油の五種を産す。魚油、薄荷油最も盛なり。魚油は、鯨油、鱈油、鱈油その他を含み、一の粗製品にして、工業品として見るの價值少なしと雖も、近年、海外輸出品の一勢力をなし、東京、横濱、神戸、大阪等の地に於て加工精製す。鱈肝油は鱈の肝臓を原料として製せるものにして、薬用として頗る好評あり。菜種油は原料に使用すべき莖莖及亞麻種が本道の氣候に適應し到る處生育せざる處なきを以て、産額従つて多く、其業又盛なり。工場組織を以て斯業を營むものに、北海製油株式會社、小樽製油株式會社の二あり。原料は主として本道石狩の産を用ゆ。販路は本道各地、東京、大阪、其他の各地に亙る。薄荷油は明治二

十五年石狩國上川郡永山村に住せる一私人が、その主産地なる山形縣西村山郡より薄荷種苗を輸入し、これを栽培製油せしに始り、爾來漸次増殖の機運に向ひ、本邦産地中、比較的秩序なる發達を遂げつゝあり。されど製法は尙ほ甚だ幼稚にして、纔かに粗製品たる取卸油を製出するに過ぎず。原料たる薄荷の産地は北見を第一とし、石狩これに次ぎ、十勝またこれに次ぐ。

製澁 檫樹皮より製出する澁液、即ち單寧エキスは、製革用及び漁網用として年々その需要を増加す。本道にては、膽振國勇拂郡安平村字早來に、日本皮革株式會社製澁所あり。年平均額八千百餘樽を製出す。

石鹼と沃度 石鹼業は由來微々として振はず。函館、小樽に二三の工場を有すれども、記するに足らず。沃度は昆布、海草の類を用ひてこれを製す。根室地方を主産地となし、花咲村にその工場を有す。

製紙 本道に於ける製紙業の歴史も、また決して成功の歴史とは言ふべからず。或は製造場を設け、或は楮苗を植付け、或は札幌區監獄の囚人をしてこれに従事せしむるなど、道廳はあらゆる奨勵をこれに加へたれど、未だそ

製紙

石鹼と沃度

製澁

の十分の効果を収むる能はざるは惜むべし。然るに、近年民業として、木材より製紙原料たるバルブ並ひに諸洋紙類を製造するもの、紙屑を原料として漉返し紙を製造するもの起り、稍々斯業の見るに足るに至るものあり。而して富士製紙株式會社はその代表的製造所にして、第四釧路工場、第五札幌江別工場、第六空知工場の三箇所は、本道に於ける斯業の冠冕を爲すの趣きあり。各工場とも、各々その附近の御料林官林の椴松、蝦夷松を使用して、その原料となす。製品はハトロン紙、地券判紙、双旗連紙等の種類あり。主として第四釧路工場にて製造す。第五江別工場にては、新聞紙、模造紙、包装紙を製す。而して第六金山工場にては第五江別工場に供給すべきバルブを製造す。製造法は、椴松及び蝦夷松の長丸太材を約二尺に截斷し、皮剝機械を以て外皮を除却し、割材機械にて約三四寸に縱斷して、腐蝕の部分を削り、節あるものは、節取機械にてこれを除き、これを截斷機械に投じ、適當の木片となして蒸釜に詰込み、藥液を注入して絶えず汽熱を送り、約十六七時間にしてこれを蒸解す。之に對して、王子製紙會社は又明治卅九年を以て、膽振

勇拂郡苦小牧村苦小牧川畔に工場建立を計畫し、四十年六月より着手し、四十三年に至りて、略々その建築を終り、頗る刮目するに足るの工事を開始し、機械の動力は支笏湖の水を利用せる電力を用ひ、現今に於ては、その産額却つて富士製紙工場を壓するに至れり。製品は原料バルブ、諸洋紙、及び新聞紙の巻取等にして、一ヶ月の製出高約三百萬封度に及ぶといふ。其他、紙屑を利用して製紙の業を起せる函館製紙合資會社あり。蒸汽力應用の製紙機械を用ひて主として漉返し紙を製造し、函館郊外龜田村千代ヶ岳にその工場を置けり。其他小樽區新富町に小樽製紙場あり。前者と同じき機械を用ひて漉返し紙を製す。

燐寸 本道は軸木に富みたれば、頗る有望の事業なれども、明治初年にこれが製造を試みたるもの、失敗せる後、再び事業の振興を見る能はず、荏苒、明治三十六年に至り、漸く函館に函館燐寸製造所の設立を見、三十八年に至りて小樽に共進舎燐寸製造所の設立を見るに至れり。原料は日高産の白楊軸木を使用す。

燐寸

醸造品

醸造品 醸造品は清酒、麥酒、酒精、葡萄酒、味噌醬油等にして、本道にては、清酒、麥酒、葡萄酒の多大の産出あり。殊に、麥酒業はその規模の宏大たるに産額の多大なると、品質の良好なるを以て、その名聲天下に籍甚たり。本道に於ける清酒業は、各府縣の輸入品に壓せられ、一時殆ど衰頽に傾かんとしたりしも、近年漸次その事業を恢復し來り、現今に於ては、十萬石餘の醸造高を示すに至れり。されどその製品は未だ本道需要の全部を充すこと能はず、府縣より輸入するもの猶八萬石三百五十萬餘圓の多きを示せり。醸造場は造石額一千石以上のもの、札幌に五ヶ所、小樽に五ヶ所、函館に三ヶ所、旭川に三ヶ所、増毛に二ヶ所、江別に一ヶ所あり。原料の米は越後、越中、佐渡の産を第一とし、秋田、庄内、津輕等これに次ぐ。本道産のものは、大野村又は上川地方のものを用ゆれど、概して甚だ少量なり。販路は概して本道内にあり。蓋し本道は氣候寒冷なるを以て、勞働社曾にありては酒精分を多量に含有する酒類を嗜好する傾向あり。従つて需要の盛なるによるなるべし。麥酒は本道特産の名聲を天下に博したる札幌ビールあり。その沿

革は開拓使農事獎勵の際、大麥及び葎草耕作の本道の地質に適合せるを見、麥酒醸造を企て、明治九年、始めて札幌に醸造場を建設し、久しくドイツに遊びて斯業に經驗ある中川某をして、アメリカ種大麥を原料として、ドイツ法によりて、先づ二萬石を醗酵せしめしに濫觴す。翌十年これを東京に出せしに、頗る好評を博せるを以て、爾來益々事業を擴張し、ドイツ、アメリカ兩國より種子を輸入して官園に播下耕作し、漸次一般農家にも配附して、その原料の豊富ならんことを期せり。十九年に至りて、その業道廳より民間に歸し、二十一年、僅かに資本金七萬圓を以て始めて札幌麥酒株式會社を組織し、二十三年、更に資本を増加し、新式の器械を購入し、工場の組織全く舊觀を改め爾來、事業益々進捗し、一方原料大麥の改良を試むると共に、製品の、改善に銳意努力し、又漸次其資本を増して遂に三十七年に至り百萬圓とし、第二醸造所を東京本所に、第二製麥所を石狩札幌郡苗穂村に設立せり。三十九年、更に資本金を百五十萬圓に増加するに當りて、東京に於ける日本麥酒株式會社(資本二百六十萬圓)大阪麥酒株式會社(資本百五十萬圓)と一大合同

の約成立し、三月、資本金五百六十萬圓を以て、今日の大日本麥酒株式會社を設立するに至れり。而して本道にある該工場は札幌工場名稱の下に札幌支店の下に置かれたり。工場の規模宏壯、まことに人目を駭かしむるものあり。原料は總て本道産を使用するを以て、同社はこれが耕作につき、大に意を用ひ、夙に海外より純良の種子を輸入し、耕作改良を奨励せし結果として、近來、品質著しく優等に赴き、歐米産と比肩して毫も遜色なきに至れり。而してその産地は主として札幌附近の農村三十餘ヶ村に亙り、その種類また頗る多種に岐れたり。製品は本工場に於て製造せるものは、二大合同後も依然札幌ビールの名稱を存し、種類は札幌ビール及び札幌黒ビールの二種を出す。販路は内國各地は勿論、朝鮮、南滿洲、支那、ロシア沿海州、殊にウラヂホストク、及びハルビンなり。

葡萄酒は、清酒、麥酒に比して甚だ振はず。本道の地、葡萄の栽培に適し、開拓使、道廳の保護奨励ありしに拘らず、札幌に札幌葡萄酒醸造場の一工場あるにとどまれるは憾みとすべし。酒精製造は神谷酒精合資會社なるもの旭川

製粉

にありて、本道産の馬鈴薯及玉蜀黍を以て原料とし、其成績見るべきものありと云ふ。

製粉 本道に於ける製粉業の主なるものは、麥粉、澱粉、及び晒餡にして、麥粉は札幌製粉會社の事業殆んどこれを代表し、澱粉は膽振國山越郡に於ける農業の副業を最とし、晒餡は函館地方を主産地となす。札幌製粉會社は開拓使時代より創業奨励せられし製粉官業の民間に移れるものにして、三十二年現今の工場を増設し、三十二年資本金十萬圓の株式會社となし、以て今日の盛況に達せり。原料は主として石狩國附近の小麥を使用し、品質精良の好評を博せり。澱粉は本道産の馬鈴薯を用ひてこれを製し、今日に於ては、管だ一地方の副業たるに止まらざるに至れり。而してその主産地は膽振國山越郡にして、全道産額の二割強を占む。石狩國空知郡これに次ぎてその一割五分を産出す。其他膽振國虻田郡、石狩國上川郡相次いで共に本道澱粉の重要産地たり。就中、山越郡に産せるものは最も優等にして、管に本國輸出品の主要部を占むるのみならず、夙に本邦中央市場に於ける聲價を保てり。晒餡

鑛業

は漸次隆盛ならんとする状況あり

●**罐詰** 本道開拓の初期にありては山野に鹿群あり、河川に鮭族多く、此等は専ら罐詰の原料となり、多く内地に送られしが、前者は疾くに盡きて後者は猶今日罐詰原料の大宗をなし、其工場は是等水産地の漁獲地多き地方に在す。此他各種の魚介蟹の類亦多く罐詰として作らる。千島、根室等の沿岸、殊に之に従事するもの多く、根室の藤野製造所は其産の大なるを以て知らる。

五 鑛業

總説

北海道は各種の天産物に富み、殊に鑛物はその中重要な部分を占め、石炭硫黄等の非金屬鑛物を始めとし、其他金銀銅滿俺等の金屬鑛物に至るまで、何れも相當の産額あり。就中、金屬鑛物に於ては膽振の幌別鑛山の金の如き、後志の國富後志鑛山の金銀銅の如き、最も主要なるものあり、砂金は殆ど本道特産の如き觀ありて、往年の盛時に比すれば、稍衰へしと雖も尙年産額三

鑛業

四十貫匁あり。滿俺に於ては第一に後志の美利加を推すべし。非金屬鑛物に於ては石炭を主とし、九州に次げる大炭田を有しその産額も亦甚大にして本道鑛産物中の最も重要なものたり、炭田中石狩の夕張炭田地方最も其豊富なるを以て知られ、北海道産出の石炭の大部を供給す。硫黄に至りてはその産額寧ろ本邦内に無比にして後志の古武井の如きは一山にして年産額二千六百餘萬斤を出せり。之を要するに、本道の鑛業は土地の面積に比較して、諸種の鑛産未だ以て饒多なりと稱する能はずと雖も、今や近き將來に於て益發展せんとする機運に遭遇し、本邦の斯業界に漸く重きを致さんとするの傾向あり。殊に近年農商務省は特に本道に於ける鑛床調査の業を起し富源の發見に盡瘁するもの少なからず、以下録する所各地鑛床の記事其報告に據る所多きを特筆せずんばあらざるなり。

次の一表は明治四十三年末に於ける北海道廳の調査に係り這般の囑望の程度を推するに足るものあるを以て茲に之を掲出す

稼行鑛區數及坪數並に試掘鑛區數(明治四十三年末月) 北海道廳調査

國名	採掘區數	採掘坪數	砂鑛(金)區數	砂鑛(鐵)區數	試掘區數
渡島	二八	一六八、九六八	六	一	五九
後志	二九	七、八七、六四八	六	一	四
石狩	一九	五、三、八、八、一	二	一	四
天北	二六	六、三、〇、三、八	二	一	三
北見	三六	一、〇、七、三、〇	二	一	三
膽振	三三	一、三、五、二、八	二	一	三
日高	二	八、七、四、一、四七	一	一	二
十勝	二	三、三、六、三、五	一	一	二
釧路	一	三、六、〇、七、〇	一	一	一
根室	一	一、六、一、一、五	一	一	一
千島	二	一、七、四、八、三	一	一	一
合計	二〇九	九、五、七、五、八、六	一五	一	五五

(※印現時稼行)

尙重要鑛産物を地方別により一表に示せば次の如し。

國別	金	砂金	銀	銅	滿俺	石炭	硫黃	石油
渡島	一、一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
後志	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
石狩	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
天北	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
北見	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
膽振	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
十勝	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
釧路	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
千島	一、〇	〇、〇、〇、〇、〇	六、〇、一、三、七	五、八、七、七	一、〇、三、三	一、五、七、六	四、一、一、九、七	一、七、六
合計	八、三、三	三、九、七	九、三、三、三	一、一、〇、六、八	一、八、〇、三、三	一、五、一、六、五	五、一、一、〇、四、八	一、八、九

今前表に據り聊か之が補説を試みんに、膽振並に後志に於ける金と銀とはよく全道のすべてを包含し、砂金の木道に於ける産量は本邦砂金總産額の九割餘に當り、之を山金に合すれば本邦産金額の約一割を占む。然るに銀に於ては總額九百廿二貫餘にして之を本邦總産額三萬七千七百六十餘貫に比すれば、極めて少量なりといはざるを得ず。砂鐵は住年地方に稍著るしき産量を

示ししと雖も明治四十三年度に於ける北海道廳の調査に據れば、渡島に九百貫、膽振に六千七百貫を産出せしのみなるを以て、之を本邦總産額九十八萬貫餘に比すれば百分の一に足らず、未だ以て特筆すべき價值なきが故に之を表の中より省けり。滿庵は後志の産量十八萬貫を算すと雖も本邦總産額三百餘萬貫に比すれば未だいふに足らず。石炭に於ては全産額百九十餘萬噸ありて、之を本邦總産額の一割餘に當り、本道産額の約二分の一を占め、その總量の九割四分は石狩一國に産するを見るべし。硫黄はその産量併せて五千一百餘萬斤に達し本邦總産額の約七割を占め後志の如きは一國にして四千餘萬斤を領し古武井鑛山はよく一山にして全國總産額の過半を産出せり。その豐饒たる世界に名あり。石油は多少産するも之を本邦總産額百六十餘萬石に比すれば殆どいふに足らざるが如きも全く望みなきにはあらざるべし。

以下主要なる鑛山の狀況を略述すべし。

(イ) 金屬鑛類

金銀山

金銀山 後志鑛山 本鑛山は、後志國余市郡赤井川村字中の澤に在りて余市川の支流、白井川の左岸に位し、函樽線銀山驛を距ること東方四里餘、海拔三百餘米の處に在り。本山の發見の時代は詳ならざるも、明治二十九年頃より採鑛を初め今日に至れり。地質は第三紀層に屬する角礫凝灰岩、石英粗面岩及び富士岩にして、主要なる鑛脈は富士岩中に胚胎せり。鑛床は含金銀石英脈にして、現時採掘せらるゝもの高島、島津兩鍾名あり。一溪流を左右に挾んで斷層によりて切斷せらる。同一の鑛脈にして、略東西に走り北方へ七十度内外急斜す。厚さ二尺乃至五尺、延長約六百尺に亙り、最も厚き處は七尺に及ぶ。別に新鍾ありて走向相似たり。殆ど直立し、幅一尺乃至三尺を普通とす。鑛石の品位は、金十萬分の〇七五、銀十萬分の二十三内外なり。其産額次の如し。

	四十一年	四十二年	四十三年
金、	九〇九六匁	三二八四匁	五四五四匁
銀、	一二二七八三匁	一〇五七四二匁	一八五四五七匁

然別鑛山 本鑛山は、後志國余市郡大江村に屬し、然別川の一支流ボンシカリベツの上流に位す、然別停車場を距ること一里餘に在りて、車馬よく通じ交通至便なり。本山の發見は明治二十三年にして漸次發展して一時は頗る盛況を呈せり。鑛床は角礫凝灰岩中に胚胎せる鑛脈にして、金銀を含有す。脈石としては石英及び菱滿俺鑛あり。鑛脈の數は頗る多く走向は一般に東西乃至東北東に向ひ、何れも南方へ六十度乃至八十五度傾斜せり、脈幅は概ね二三尺にして、時に五尺に達するものあり。大日方理學士に従へば、鑛脈は多くは走向に沿ひて、その延長二百五十尺内外を限度とするが如く、傾斜に沿ひては、比較的深く稼行するに堪ふるが如しといふ、鑛石の品位は、金十萬分の〇四五、銀十萬分の三十乃至六十を示せり。現時に於ては本山はその活動微々たるも、往年に於ては、甚だ盛況を呈し、金銀塊年産額一千五百貫以上(明治三十一年)に達せしことあり。思ふに本山の如きは、その鑛脈の今尙豊富なると、その地理の頗る便利なるとは、今後の方針如何によりては、大に望みを將來に囑すべきものならんか。

本鑛山の支山には、その北方約半里、一嶺を隔て、砥ノ川鑛脈あり。北西約三里半にして古平郡澤江村宇稻倉石地内には稻倉石鑛山あり。共にその地方を構成する富士岩中に胚胎せる鑛脈に屬し、その狀況多くは然別鑛山のものに相似て何れも合金銀なり、皆往年盛なりし活動の跡のみを残せり。

轟鑛山 本鑛山は、後志國余市郡赤井川村にあり、函樽線銀山驛の東方五里餘、後志鑛山より東へ里許を隔つ。明治三十年の發見に係り、一時は大に振ひしも、今は、唯僅に採鑛に従ひ、鑛石のまゝ、その本山たる國富鑛山に搬出せらるゝのみ。鑛床は石英粗面岩質角礫岩中に胚胎せる合金銀石英脈にして、鑛脈の數の數甚だ多く、就中優越鍾大越鍾著名なり。走向は一般に北東乃至北々東にして北西に五十度乃至七十度斜下す。鑛脈の幅は五尺乃至七尺延長二百尺乃至百六十尺に及ぶといふ。鑛石の品位は平均金十萬分の〇六乃至一二、銀十萬分の三〇乃至四〇を示せり。其産額次の如し。

金、	明治三十八年	同三十九年	同四十年
	八、六三二 <small>々</small>	八、六四二 <small>々</small>	八、二三三 <small>々</small>

金銀銅山

銀、六四八、五五九 五七二〇七〇 五〇二、五五五

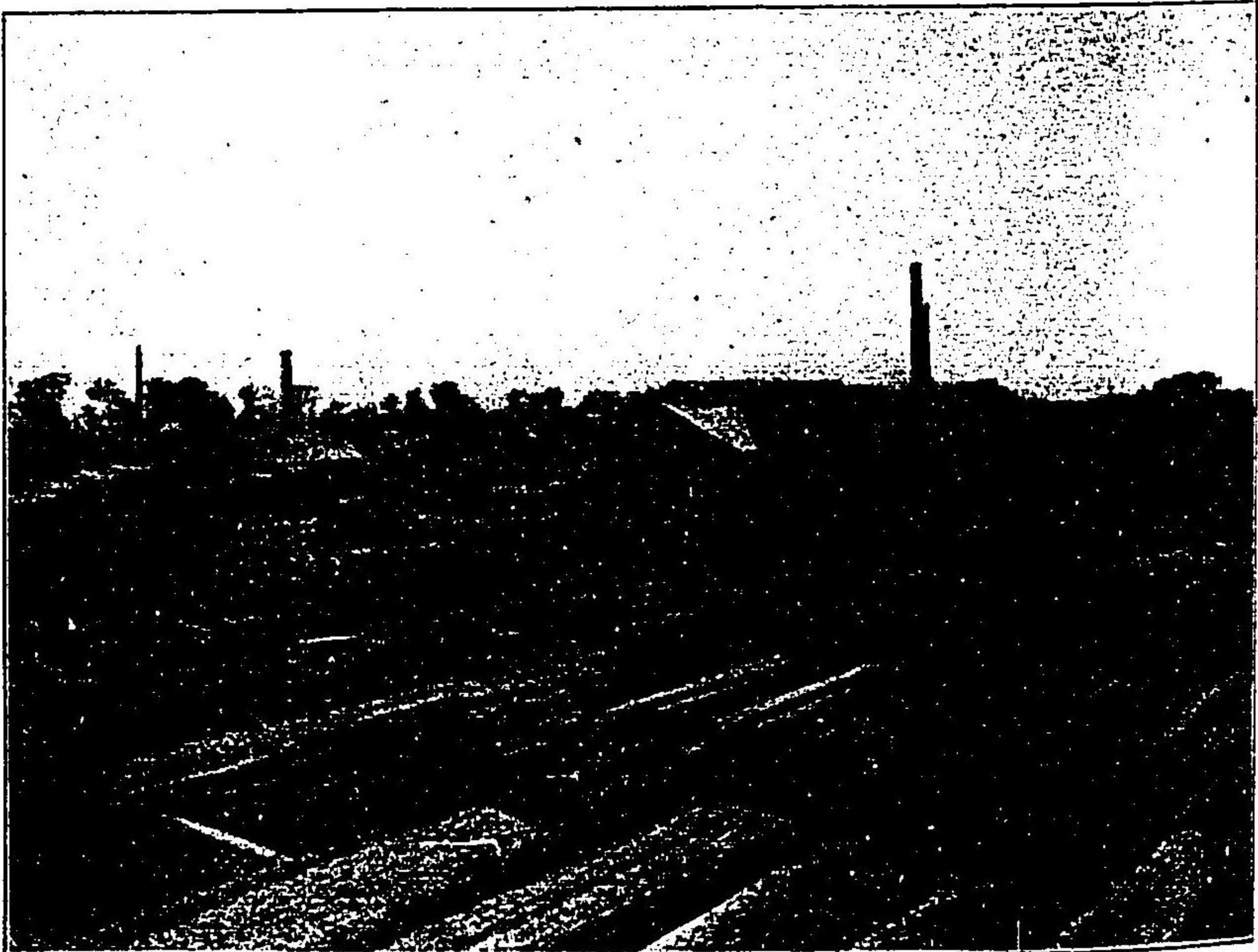
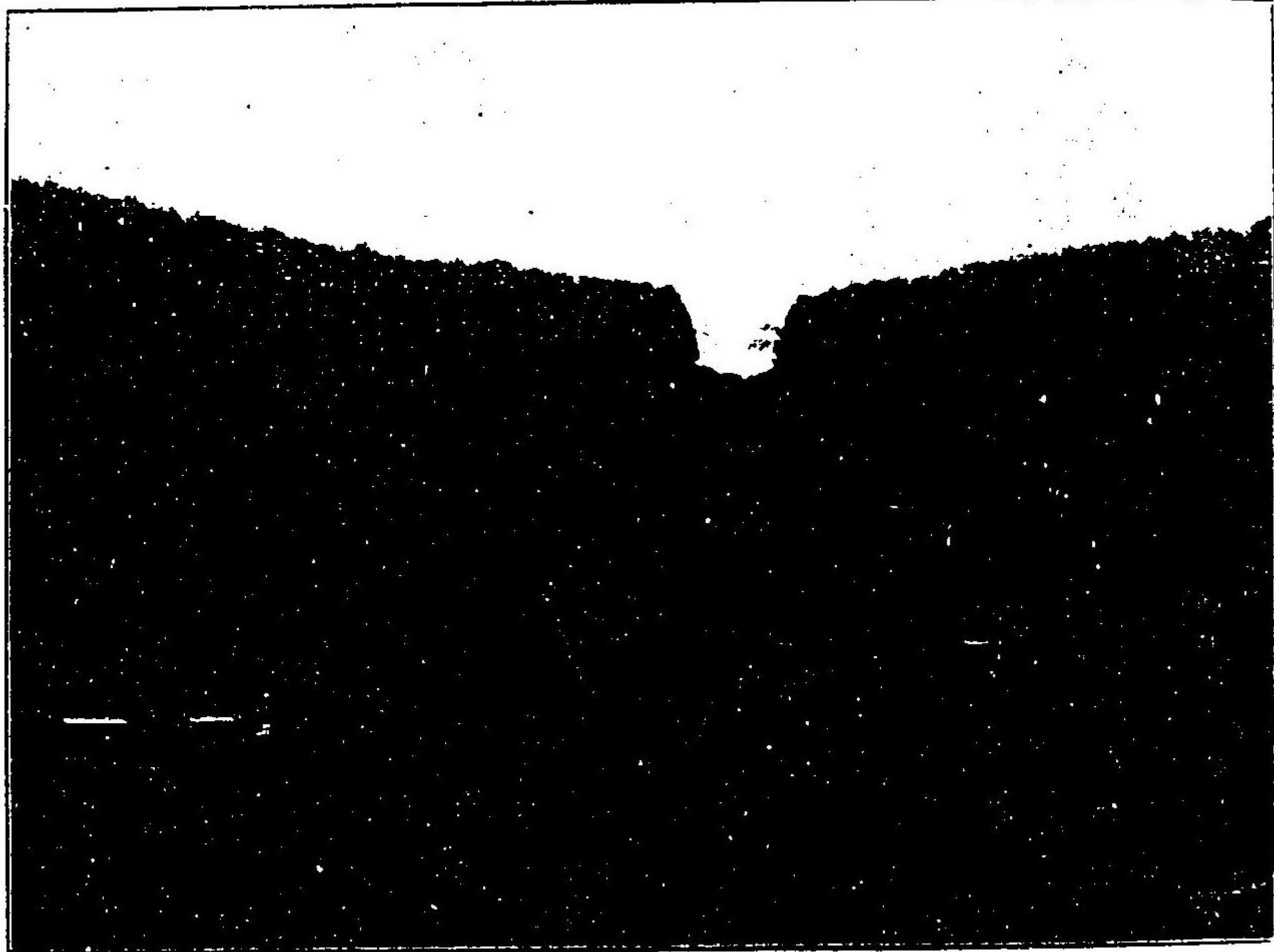
金銀銅山 國富鑛山 本鑛山は、後志國岩内郡小澤村にありて、函樽線

小澤驛を北方へ距る僅に一里餘の處、平坦なる道路を通じ、車馬自由に來往する至便の位置にあり。現時は蘇鑛區を之に合併し、盛に稼行せり。地質は第三紀層及び之を貫きて噴出せる輝石富士岩石英粗面岩より成り、殊に最後のものは、各所に岩脈をなして常に鑛床を伴隨す、鑛石は所謂黑鑛にして、或は層狀をなし、或は塊狀をなし、極めて不規則なり。その内大なるもの三個處あり、即ち東方より數ふれば、瀬戸瀨坑第一新坑第二新坑是なり。

瀬戸瀨坑は、平地より高さこと六十一米、巨大なる石英粗面岩の岩脈は、略東西に走り、此の北縁に接し第三紀凝灰質泥板岩との間に、鑛床を胚胎す。その北及び東側は石英粗面岩を侵蝕して交代作用をなし、鑛石は、不規則の網狀をなし次第に諸岩に遷移せり。鑛石は暗黒色又は黝黒色をなし、その上部に於ては銅分に富み、土鑛と稱すべきもの極めて少し。

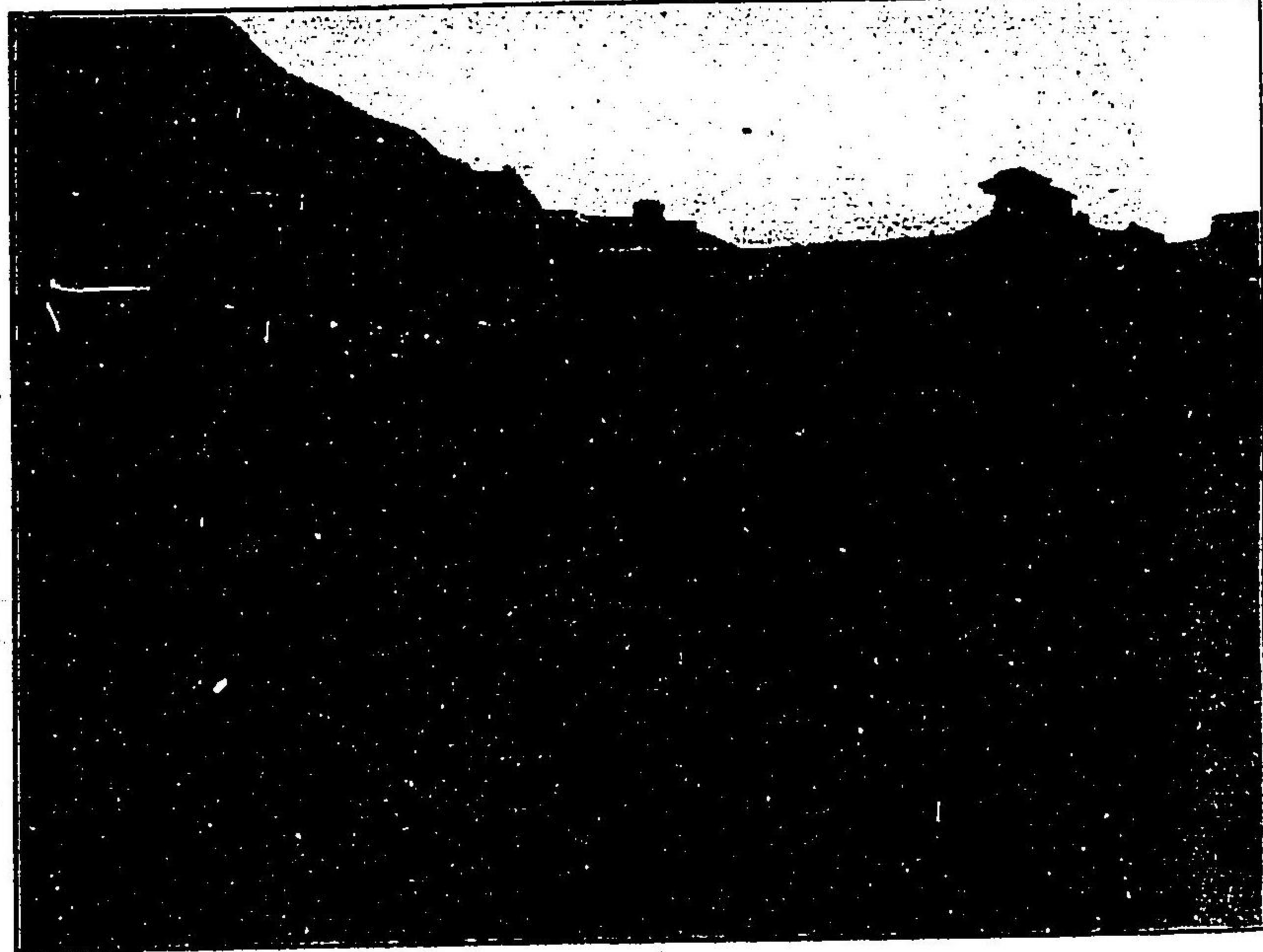
第一新坑字柏谷にあり。第三紀凝灰質泥板岩を貫き幅五六十尺ある石英粗

林造村田角幌札 (甲)

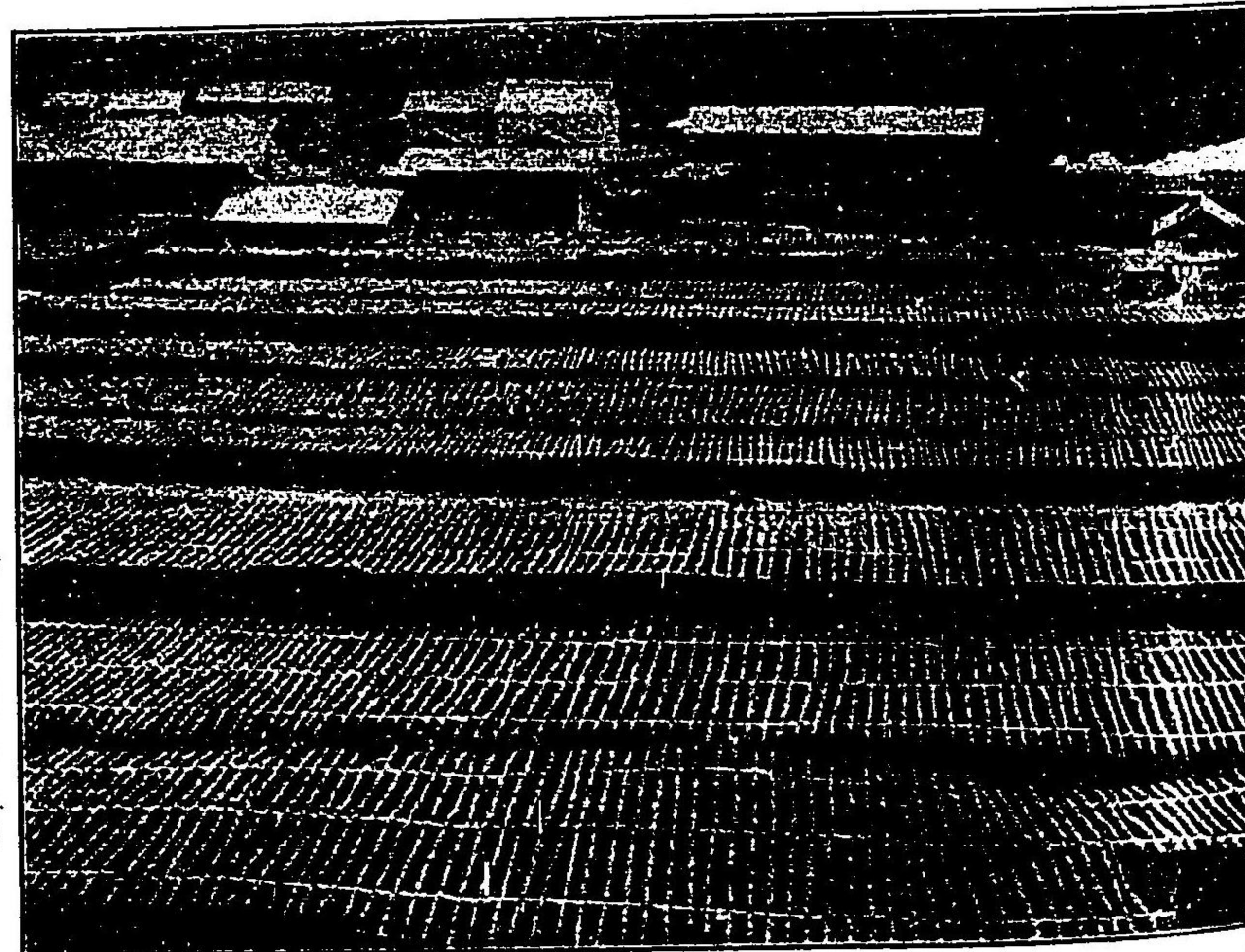


場工木川砂井三郡知空狩石 (乙)

鮓 乾 の 鮓 (甲)



場 漁 鮓 市 余 志 後 (甲)



場 干 の 鮓 欠 身 (乙)

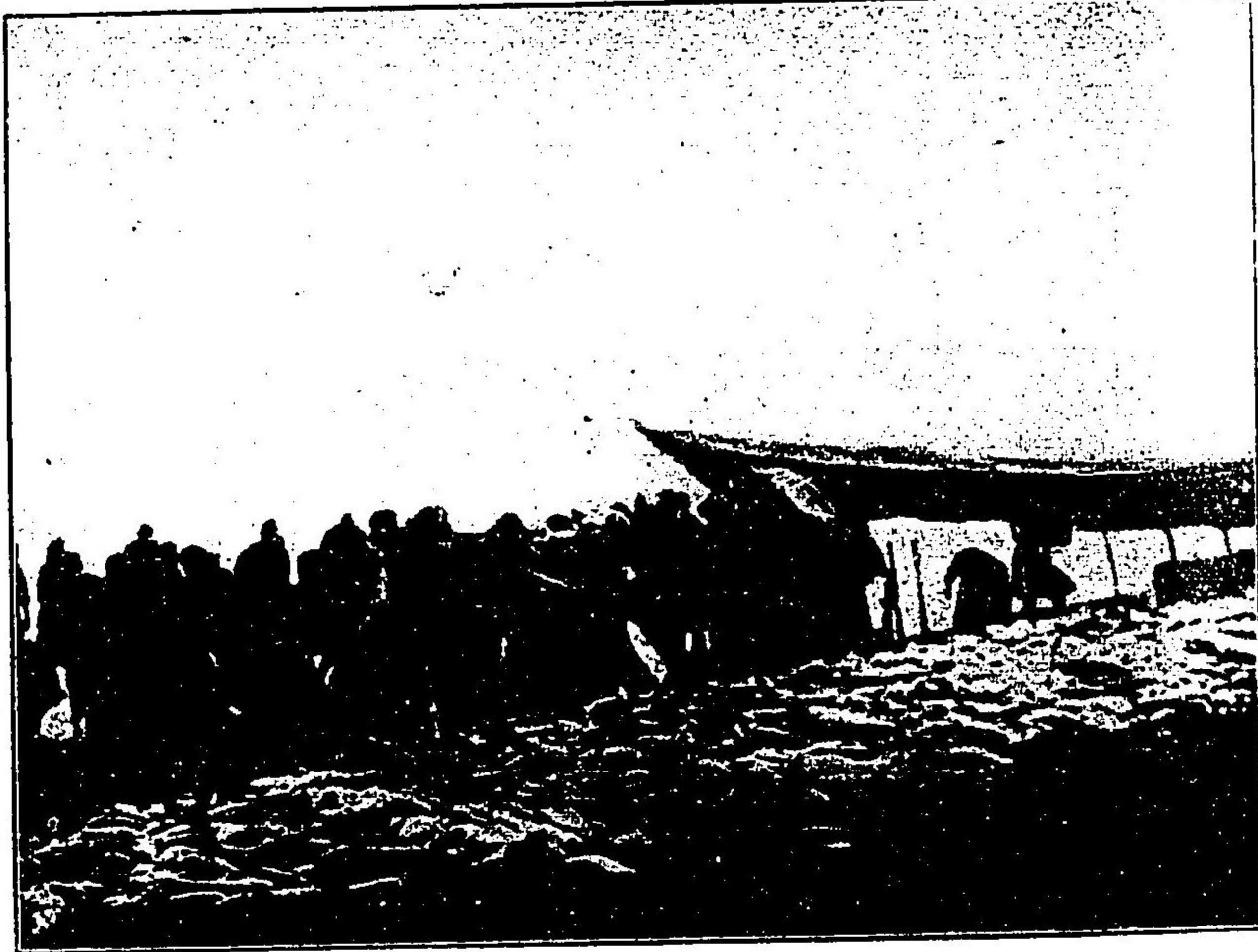


景 光 の 漁 鮓 (乙)

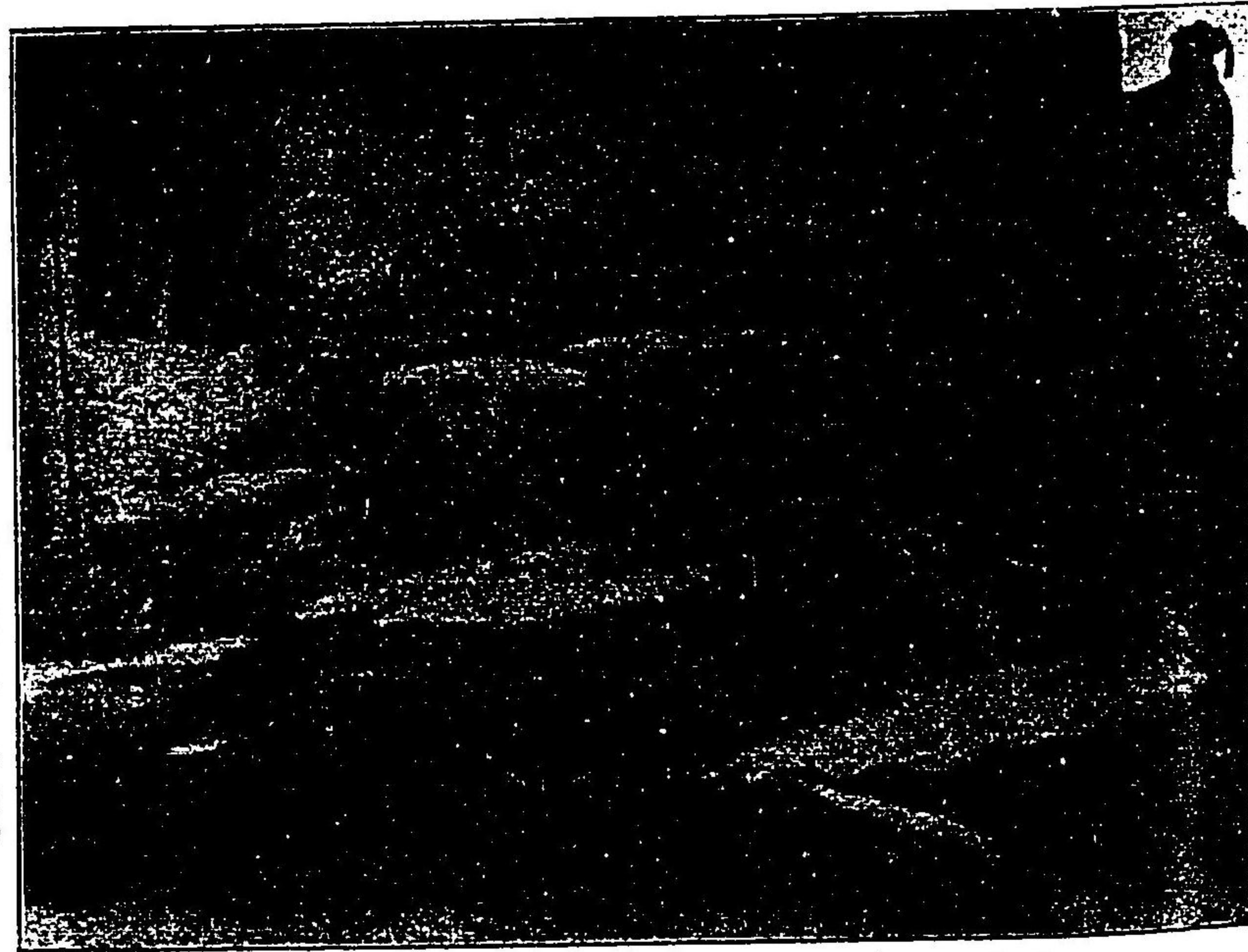
(第四十圖)

(第三十九圖)

場 漁 鮭 狩 石 (甲)



景光の引網漁鮭るけ於に岸海狩石 (甲)



(第四十二圖)

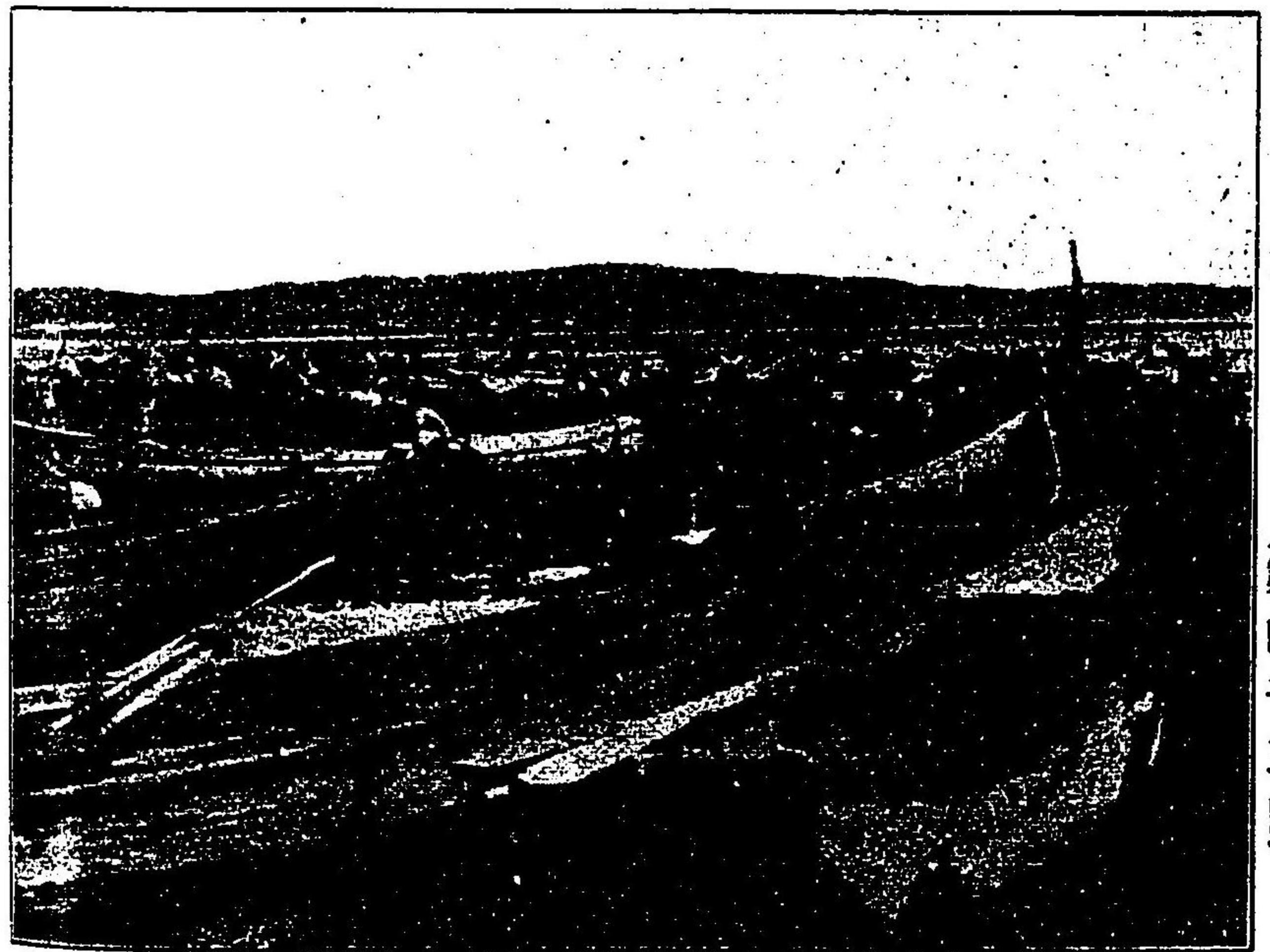
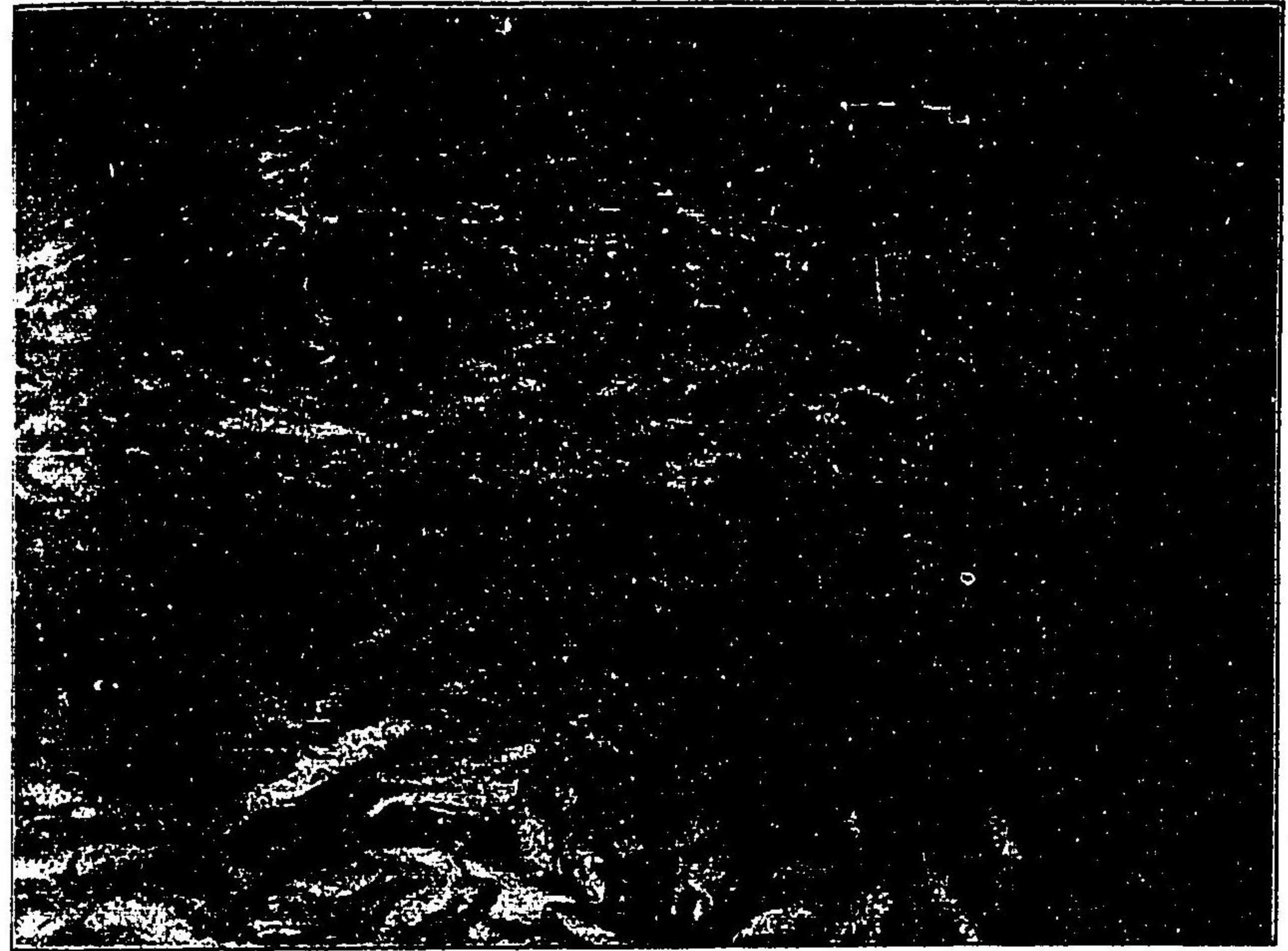
景光のれ入屋納場漁るけ於に岸川狩石 (乙)



(第四十一圖)

・景光の池化解然天鮭町那紗 (乙)

漁鱈の島文禮 (甲)



(第四十三圖)

收採貝りさあ内湖蠣牡岸厚 (乙)

面岩の岩脈は略東西に走り、北方へ緩斜す。此の岩脈の南北兩側に接し、且一部は該岩中に浸蝕して茲に鑛床を胚胎す。その南側面の鑛床は、銅分乏しく黝色をなす。岩脈の北側面即ち上盤の鑛質は、下盤に於けるよりも遙に佳良にして特に黄銅鑛に富む、而して蛋白石及び他の硅石を伴ふこと少からず。本鑛床はその坑内に於て第三紀層との境に介在するを認め得べし。

第二新坑、小澤村の北方ベシケサマツケ澤より西に向へり、前者の如く亦石英粗面岩を夾み、その南北に存す、北側のものは鑛層状をなして、走向は略北三十五度西を示し、東北に四十度斜下す。その厚さ三十餘尺、三層に分れ、下層程銅分に富有なる黒鑛となれり。南側のものは主に硅質硫化鐵より成り、之に伴ひて赤色鐵石英出づ。鑛石の品位は一定せざれども平均金十萬分の〇・一乃至〇・二、銀十萬分の〇・三乃至一・四、銅百分の二乃至五五を示せり。其産額左の如し

金	明治四十一年	四十二年	四十三年
	一五四匁	五七一五匁	八七二七匁

銀	一〇、九三八匁	三三八、七一七匁	四一六、〇六〇匁
銅	一六、二八五斤	五四四、二五五斤	九五八、七四七斤

但し此の内約五分の二は、鑛石のまゝ、本鑛山の支山轟鑛山及びルベシベ鑛山より搬入せられしものを含めり。

ルベシベ鑛山 余市郡大江村ルベシベ川の上流にありて、銀山驛の西方一里の處に位す。鑛床は石英粗面岩・石英質凝灰岩中に胚胎せる鑛脈にして黃銅鑛を含めり。前記國富鑛山の支山たり。

幌別鑛山 本鑛山は膽振國幌別郡幌別村幌別川の上流にありて、室蘭線幌別驛より北方約三里餘、幌別岳の東麓海拔約百米の地に位す。道路平坦、一里半許鐵軌を敷設して、鑛石諸貨物の運搬に資し、交通至便なり。本山の發見の時代は不明なるも、明治四十一年初めて採鑛に着手し、爾來急促なる發展をなして現今に及べり。地質は第三紀の青色の凝灰岩中に胚胎せる鑛脈にして、金黃銅鑛・輝銀鑛方鉛鑛・黃鐵鑛を含み二條相並列せり、その走向は東西にして北方へ四十度乃至五十度傾斜す。鑛脈の幅は、不規則にして五六寸より六十尺に及ぶ、脈石には石英あり。鑛石の品位は、平均金十萬分の四三・八銀十萬分の四三、銅百分の一・二五にして其の製産額次の如し。

り六十尺に及ぶ、脈石には石英あり。鑛石の品位は、平均金十萬分の四三・八銀十萬分の四三、銅百分の一・二五にして其の製産額次の如し。	明治四十一年	明治四十二年	明治四十三年
金	五四、六六〇匁	四五、二九八匁	六八、二一一匁
銀	五五、二四六匁	二六九、九三四匁	三二〇、八五六匁
銅	一一六、九七一斤	一七一、四二六斤	一八一、九四一斤

(備考) 明治四十二年産額中銀は、支山後志國然別鑛山より鑛石を搬入して、製鍊し之を加算したるものにして、その額約二百二十貫に達せり。

砂金

砂金 砂金は本道に於ける鑛産中、稍注目すべきものにして全道各地に少量を産し、去る明治四十二年中にはその産額四十六貫以上に達せり。今その主要なる産地は日高山脈地方、北見國枝幸地方の二者を推すべく、其他稍名あるものには渡島國知内江差地方、後志國余市郡内、石狩國樺戸郡シベツ川上流・同國夕張郡夕張炭山附近、天鹽國天鹽川上流等あり、されど産額は何れも甚だ少く殆ど記するに足らず。

り六十尺に及ぶ、脈石には石英あり。鑛石の品位は、平均金十萬分の四三・八銀十萬分の四三、銅百分の一・二五にして其の製産額次の如し。

日高山脈地方 本地方の砂金産出のことは古くよりよく知られたる所にしてその採取の年代も亦古し。近年交通の便稍開くるに及び、漸次之を採取する者も多數に達し、益、その産額多からんとする傾向あり。地質は古生層に屬する粘板岩砂岩輝綠凝灰岩若しくは中生層に屬する泥板岩より成れる處に多し。然れども本山脈中に入る處の河川に其の少量を認め得ざることなし。今茲に本地方に於ける主要なる砂金産地を列記し、次にその景況の概略を叙説すべし。

(甲) 日高山脈西側(日高國)

幌別川筋、元浦川筋、染退川筋、新冠川筋、沙流川筋、鶴川筋、空知支流、トナシユベツ川筋、

(乙) 日高山脈東側(十勝國)

ヘルブネー川筋

幌別川筋 日高國浦河郡の南東側を殆ど南北に貫流するものを幌別川とす。河口より上流數里にして三又あり、此の邊は曾て盛に砂金を採取せし處なる

も今はその産額極めて少し。三又の最も東なるをシユンベツといふ。その上流古生層の粘板岩の裂罅又は劈開中に砂金の存在するを見るべく然れども其産額今は多からず。

元浦川筋 元浦川は浦河郡の北西側を殆ど南北に貫流す、中流二又の邊に入る處、砂金を胚胎せしも往時盛に採取せられし結果、現今は僅に上流西方の一支流ニシユオマナイを上ること一里餘の地に於て多少採取せらるるに過ぎず。

伊木理學士に従へば此地は古生層に屬する粘板岩帯より成り、砂金は多くその河床に産す、金粒は多少石英を混するものあり、俗に之を石喰と稱す、品位稍、幌別川産のものに劣れり。

染退川筋 靜内郡を北東より南西に貫流する染退川は曾て到る處に砂金を産せしも今は多く採り盡されたるもの如し。その支流各地に於て、少量の砂金を下部中生層に屬する泥板岩の裂罅中に認むることあり。

新冠川筋 新冠川は新冠郡の東側を南西に貫流す、岡村理學士に従へば支流アブカサンベ・ピン二川及びボロアカンベツ川の處々に於て、河底砂礫層下

の輝綠凝灰岩の片狀劈開中に少量の砂金を發見せりといふ。

沙流川筋 沙流川は沙流郡の北西部を南西に貫流する大河にして本流及び支流共に常に多少の砂金を産するを以て名あり、古生層に屬する粘板岩及び砂岩の河床を被へる礫層厚く水流一般に急にして砂金採取に適せざる場處多し、唯支流ウサツの一小支流ヌブリ、バ、オマナイに於て現時少量を採取するものあり。岡村理學士に従へば砂金は古生層粘板岩及び砂岩の裂罅中に含有せらる。

鵝川筋 鵝川上流トナム村は膽振國勇拂郡の北東端にありて本地方に於ける唯一の砂金産地として知らぬ。明治四十年より同四十一年に亙り、砂金の年産額三貫目餘に及びしも、その後多少の盛衰あり。一般に本地方産の砂金の品位は九十%以上を算す。小林理學士に従へば本地方の地質は悉く古生層に屬する粘板岩より成り、内に石英脈及び方解石脈を胚胎し、俗にバラスと稱する礫層之を被へり、砂金は實に此のバラスに包藏せらる、砂金の量は概ねバラス中の石英礫の多少に比例するの傾向あるを以て見れば、粘板岩中の

石英脈に大なる關係を有するもの、如し。砂金は概して(イ)地層の走向が流れる方向に直角なる時、(ロ)河流の彎曲部 (ハ)溪流の併合點にその産出量比較的に多し。

空知川支流トナシユベツ川筋、トナシユベツ川は石狩國空知郡の南端夕張山脈の東側に位し、前記鵝川の水源地と一分水嶺によつて境す、現今は往時よりも稍減退せし觀あるも尙盛に採取せらる。山根理學士に従へば、本地域の地質は河成段丘地にして中生代砂岩及び泥板岩累層の殆んど水平なる削削面上に堆積せる礫層粘土層及び火山灰層ありて、砂金はその段丘堆積の下部即ち中生代砂岩及び泥板岩の裂罅又は削削面に包藏せらる、こと最も多く、或は中洲又は河原にも多少之を産出す。

ベルブネー川筋、ベルブネー流域は砂金の最も著名なる産地なり。十勝國の南部を東に貫流するベルブネー川の上流に當り廣尾郡の北部に於て、ヤオロマツブルツツルマツブヌビナイの三支流合一す。岡村理學士に従へば、此等三支川の流域は概ね古生代砂岩及び粘板岩より成り、砂金は専ら北方及び

中央の二支流即ちヤオロマップルウツルマップに産し、何れもその河床の砂礫を除き地層の裂罅又は削剝面に沈着せるものを採取すること上述の諸地方と略同様なり。南方の支流ヌビナイに於ても河床の處々に多少の砂金を藏すといふ。

北見國枝幸地方 枝幸砂金地は今を距ること十餘年以前の發見に係り、一時はその産金年額百六十五貫餘明治三十三年に達し、大に世人の耳目を聳動せしめたることありしも、今は昔日の盛觀なし。本地域は枝幸郡の一部にして東はオホーツク海に接し、北及び西は頓別川並にその支流ヘイチャン川及び頓別原野によりて限られ、南はヘイチャン川及び幌別川によりて境せらる、南北凡そ六里、東西凡そ五里の地方に跨がる。福地理學士に據れば地質は古生層中生層第三紀層第四紀層及び新古兩種の火成岩より成り古生層は秩父古生層中部に相當するもの、如く山地の脊梁を作り、その兩側には第三紀層及び新火成岩發達し、頓別原野幌別原野及び諸河流の沿岸地には第四紀層の堆積せるを見る、中生層はその分布著しからず。古生層は約南北に走る褶曲山脈

をなし、その中央にはポロヌブリ大背斜層あり、此の附近古生層中には到る處裂罅を充填して金鑛を含有する石英脈あり。是れ實に砂金の根源をなすものなり。又古生層中及びその附近の山地を流る、川には皆第四紀に屬する河成堆積層ありて多くは古生層の砂礫より成り、その内には上述の金鑛脈の崩壞したるもの混入して所謂砂金をなす。今次に本地域に於ける主なる採金地を略記せん。

ウソタンナイ川上流 採金地はウソタンナイ川の上流にあり、此の邊の河流は山脈に平行せる縦谷多し、主なるものはウソタンナイ本流及びその支流中ノ川ナイ川馬道ノ川等にしてポロヌブリ背斜層上に當り何れの河流も頗る砂金に富めり、就中支流が本流に聚合する處は産金概ね豊富なり、有名なるババコロシと稱する地は此の邊にあり。

バンケナイ川上流 バンケナイ川は幌別川の上流にしてその水源地附近はポロヌブリ背斜層近傍に當り富金地の一に數へらる。
ヘイチャン川上流 ヘイチャン川は頓別川の上流にしてポロヌブリ背斜層の附

近に縦谷をなして走れり 中流以下は横谷に變ず、ペイチャン小川はその産金の豊富なるを以て最も有名なり。

其の他、ウンタンナイ川の支流ブーレピラウンナイ頓別川支流イチャシナイ、ピラカナイ及びオネンカラマブ等の上流には可なり豊富なる採金地あり。

尙ほ渡島國上磯郡知内川河口より字市の渡まで五里許の間の河成段丘地、後志國瀬棚郡利別川河口より溯ること二十里許の上流等は本道に於ける砂金産地なり。

白金及びイリドスミン 石狩國夕張炭山及びトナシユベツ(空知川支流)砂金地に於ては砂金と共に少量の白金及びイリドスミンを産す。尙ほ白金は日高國三石郡三石川上流の支流バンベツの小枝ソーシユナイの川口より稍下流に於て砂金中に少量づゝ混在して産出す。(此の項岡村理學士に従ふ)

鐵山

鐵山 虻田鐵山 本鐵山は、膽振國虻田郡虻田村にありて、海拔約五十七米、村は室蘭を北西に距ること十二里餘、海路約十九里あり、船車來往至便なり。本山は明治二十五年頃の發見に係り同三十八年初めて採掘に着手し

漸次發展して一時は大に盛なりしかども、近年に至り稍衰勢を示しその業を休止するに至れり。鐵床は地質學上最近の成生に係れる洪積層中に胚胎せる褐鐵鐵の一種沼鐵鐵々層にして、少しく隔たりて二個處にあり。その厚さ平均六尺乃至十數尺に達し略、水平の位置を保ち層理は概して不明なれども、時に泥板岩狀の構造を有し、北西に四五度傾斜する處あり。本鐵床は蓋し噴汽作用によりて岩石中より分離せられたる鐵分が褐鐵鐵となり泉水と共に湧出し地上に沈澱したるものなるべく現にその鐵區内には鐵質冷泉の湧出し褐鐵鐵を沈澱成生しつゝある處あり。枝光製鐵所の分析の結果によれば鐵石の品位は、鐵分百分の五十七餘を含有せり。去る明治三十九年より同四十二年まで四年間の平均年産額約一萬二千餘噸にして、その大部分は鐵石のまゝ之を製鐵所に送附せり尙最近に地質調査所にて分析せし平均の結果は次の如し。

比重	二・三〇	硅酸	二九・〇	酸化第二鐵	七四・三	礬土	一・五	滿庵	痕跡	カルシウム	痕跡	硫黃	〇・四	無水磷酸	〇・九	灼熱減量	二・三六
----	------	----	------	-------	------	----	-----	----	----	-------	----	----	-----	------	-----	------	------

函館本線俱知安驛の東方六里にしてワッカタサップに虻田と同種の鑛層あり、ワッカタサップ川の岸に沿ひ數尺乃至五六十尺の厚さを以て千餘尺の長さ互れり。鑛床は此の附近の臺地をなせる洪積層中赤土と粘土との間に介在し屢粘土層の挟を有せり。鑛量少からず、鑛質亦劣等ならざれども交通の便未だ開けざるを以て稼行するに至らず。尙大日方理學士の研究に據ればワッカタサップ鐵山の北に隣れるペーペーナイにも略同様の鑛層を認め又洞爺湖岸にも蛇田鑛山の外次の數箇處に亦同様の鑛床ありと云ふ。

(イ) 有珠郡壯瞥村大字仲洞爺の赤川(東岸)

(ロ) 同郡と虻田郡との界なるボロベツ川筋(北岸)

(ハ) 虻田郡虻田村字ボロヘイ(西岸)

而して何れも其の鑛質相似たるも鑛量夥多ならざるが如し。

石狩川の下流花畔シナヅメにも亦同様の鑛床ありと云ふ。

砂鐵は渡島國森町シナヅメノ木邊より膽振國八雲山越内黒岩に至る海濱、北見國

斜里郡ウナベツカムイベツ海岸、同國網走郡能取附近、國後島東海岸等に産

砂鐵

すと雖も、渡島膽振を除く外はその産額何れも多からず。北海道廳の調査に據れば明治四十二年に産出せし砂鐵の量は次の如し

渡島國 九六五貫

膽振國 一、二六三、六一五貫

尙近年の調査によれば渡島膽振海岸の砂鐵産地は茅部郡砂原村、同郡森驛及鷲ノ木崗、同濁川河口より落部川河口間並に山越郡野田追川及山越驛間、又山越驛より遊樂部川河口間、及びその以北十二町許の間等にして、何れもその鑛床の厚さ數寸乃至三四尺に達し、幅は處によりて異なれども概ね七八尺乃至三十尺の間に居り、稀には七八十尺より二百尺に及び、露頭の延長實に三里半餘に達せり。同砂鐵につきて地質調査所に於て分析せる結果に據れば鐵分含量五九・八四%なりといふ。

辰砂及び水銀鑛 辰砂を産出せる地方は日高國シベツ似郡新シベツ似附近北見國枝幸砂金地、及び後志國然別鑛山等にして、何れも極めて稀に産するのみ。山根學士に従へば新シベツ似に於てはエサマンベツ川の上流に露出せる古生代の石

灰岩中に鑛脈をなして辰砂並に自然水銀粒を胚胎し、鑛石の品位は水銀僅に三〇一%なりといふ。

滿・俺・鑛・山 美・利・加・鑛・山 本鑛山は後志國瀨棚郡利別村にありて、函館本線國縫驛の北西四里の處に位す。鑛床は粒狀角閃花崗岩上に横はれる第三紀凝灰質砂岩泥板岩及び礫岩中に胚胎する鑛層にして、北七十度東に走り北西に二十五度傾斜す、その厚さ一尺乃至三尺あり、洪積世の砂礫層は直接に本鑛床を含める岩層を覆ひ、その砂礫層中にも往々瘤狀の滿俺鑛ありて、時には礫面を被覆し、時にはその間に生ずる植物根に接して存在せり。嘗て枝光製鐵所に於て本鑛山所産の鑛石を分析せし結果に據れば次の如し。

滿	俺	鐵	硅	酸	硫	黃	燐	銅	水	分
五、〇	三、〇	六、九	痕	跡	〇、二	痕	跡	七、九		

北海道廳の調査に據れば明治四十年より同四十二年迄三ヶ年間に於ける平均年産額(鑛石のま)約四千百餘噸に達す。

此の他尙同村には目津府鑛山あり、明治四十二年の創業に係る、又同國島牧郡江泥邊村には千走鑛山等あれども未だ盛なるに至らず。
ク・ロ・ーム・鐵・鑛 膽振國鶴川及び沙流川上流に於て河床漂砂となり、又は蛇紋岩中に團塊狀をなして少量づゝ存在するを認むるのみ。

(口) 非金屬鑛類

石炭

石炭は現時本道に於ける鑛産中の生命ともいふべきものにして、

其産額は鑛産全額の約九割に當り、加之のみならず本道は實に本邦中九州に次いで最も大なる炭田を有し本邦全産炭額の約一割五分を産出す。本道の炭田は數多ありてその分布も廣し。之を地方別に從ひて分類すれば凡そ次の如し。

- 一、石狩炭田 夕張、幌內、幾春別、美唄、空知、
- 二、天鹽炭田 留萌、羽幌、
- 三、北見炭田 宗谷、

- 四、釧路炭田 厚岸、釧路、白糠、
- 五、日高炭田 幕別、
- 六、膽振炭田 穂別、鵠川
- 七、茅沼炭田 茅沼、幕別

尙此等の炭田はその分布上並に地質上の關係より、釧路茅沼を除くの外は、後編に説く所の樺太炭田の連続とも見るべく、就中石狩炭田はその最大なるものにして實に本道石炭全産額の九割以上を占む。以下逐次各炭田に就て詳説する所あるべし。

石狩炭田、本炭田は、石狩川中流の東方に於て南北約二十一里東西約五里を有する廣大なる地方に分布せる多くの炭田を總稱せるものにして、北は空知川に限られ、空知炭田此の附近に位し、南は夕張岳より發源する夕張川に界せられ、夕張炭田此の近傍に擴まる。此等の間には美唄、幾春別、幌内等の石狩川の諸支流東より西に貫流し、同名の諸炭坑南北に羅列し以て豊富なる石狩炭田を作り。本炭田は記述の便宜上次の五部に分つ。

- 一、夕張炭田地方
- 二、幌内炭田地方
- 三、幾春別炭田地方
- 四、美唄、奈井江炭田地方
- 五、空知炭田地方

一般に、本炭田の地域は石狩平野の東邊に當り、空知炭山の東端より夕張炭山に達する殆ど南北に連互せる夕張山脈の西側に位し、炭田は此の地方に發達せる第三紀層中に含まれ略山脈に平行して帶狀をなせるものゝ如く、諸水概ね之を横ぎつて西流し皆石狩川に入る。此の溪流の間に於て炭田よく發達す。而して本炭田の各部へは鐵路悉く通じ、小樽、室蘭の諸港へ數時間にして到達すべく、水利の便も亦少からず。

夕張炭田地方 夕張第一炭坑、本炭坑は石狩國夕張郡登川村にあり同國空知郡栗澤村に跨り、鑛區約千二百萬坪を有す。室蘭港より鐵道室蘭本線により追分に至り夕張分岐線に乗換ふれば、東方約三十哩にして直に採炭所に至

るを得べし。本炭坑は明治九年開拓使雇米人ライマン氏北海道地質調査の成績を報告するに當り、夕張地方に石炭の存在することを明言せることにより初めて知られ二十二年に至り漸く試掘開始せられ北海道炭礦鐵道會社(後ち同汽船會社)之を經營し、爾來着々進歩擴張せられ以て今日の盛運を見るに至れり。大井上理學士に従へば地質は第三紀に屬し夾炭層は泥板岩及び砂岩にして炭層三枚あり。その最上層は厚さ四尺に近くそれより下方約百八十尺を隔て、二十四尺層あり、之を本層といふ。本層は厚さ五寸乃至三尺の夾雜物層二枚を有す。最下層は本層より約二百八十尺下方にありて厚さ四尺餘あり。抑も本炭層を夾む各地層は地質學上同一の累層にして皆同様の變動を受け略相等しき走向傾斜を有し互に整然として成層せり。即ち本地域の北部は層位概ね西北に走り東北に傾くこと三十度内外なり、中部は略之と直角の走向を有し東南に斜下す。南部は再び西北に走り地層稍混亂してその傾斜三十五度乃至六十度に及べり。炭質は一般に良好にして色黒く光澤強く堅緻にして粉碎すること少し。發焔すれども揮發物に富み骸炭も豊富なれば瓦斯又は骸炭

製造に最も適す、左に分析表を掲げん。

比重	石炭百分中			骸炭百分中			灰 色	骸炭の 狀 態
	水分	揮發物	該 炭	灰	硫 黄	固形炭素		
一、三三	一、二八	四、三	五、五〇	四、五七	〇、四七	九、六六	七、五七	〇、四七
							薄赤色	粘結性

本炭坑に於ける明治三十七年以降四十三年まで七ヶ年間の平均年産額は四十九萬噸内外にして、販路は多く小樽室蘭方面にありて専ら鐵道により之を搬出す。

新夕張炭坑 本炭坑は上述の夕張第一坑と同村字鹿ノ谷にありて其南方に位し、鐵道室蘭線夕張支線鹿ノ谷驛を距る約一哩の處にあり。地勢は一般に峻峻にして海拔約四百米を有す。鑛區大約五十萬坪を占む。東京瓦斯株式會社の經營に係り、近年著しくその發展を見るに至れり。本炭坑は大體東西二部に分たる、西にあるを新夕張第一礦と稱し、東にあるは稍高く海拔約五百米を有し新夕張第二礦と稱す。兩者の距離約四哩あり。大井上理學士に従へば地質は上述の夕張第一坑に於けると同様にして第三紀に屬する泥板岩及び

砂岩より成り、その内に夾まる、炭層も亦上記の炭坑より連続せるものと見做すべきものなり。即ち夕張川の一支流シーホロカベツの東側に南北に走れる一大断層は、その炭層露頭の位置を南北上下に異にせしめしものに外ならず。走向は一般に西北—東南を示し西南に傾き、その南端に近き新夕張第一坑に於て著しく混亂するも、此邊にては走向概ね北六十度乃至八十度西にして八度乃至四十五度の角度を以て北或は南に傾斜せり。炭層は上下の兩群に分れ、その懸隔數百尺乃至千五百餘尺ありと雖も、元と同一の炭層が断層の結果その位置を轉移せしものなることは、その層位成層の順序性質岩種化石及び炭質並にその附近の状況等によりて知るを得べし。上群の炭層は上部四尺層極めて薄き夾み物多し及び本層より成る。本層は六尺炭三寸の泥板岩及び一尺五寸の石炭質泥板岩あり八尺炭全部塊炭及び十尺炭全部塊炭の三層に分たる。下群のものもその炭層の排列状況厚さ等、上群と殆ど同様にして第一礦と稱し第二礦と稱するものは専ら上群の炭層を目的として採掘せり。炭質は佳良なる瀝青炭に屬し、何れも塊炭となる。分析の結果次の如し。(百分中)

炭層	比重	水分	揮發物	固形炭素	灰	硫黄	發熱量 (カロリー)
六尺炭	一・一〇	一・四〇	四三・〇八	四九・四六	三・九六	〇・二二	七・八〇
八尺炭	一・一六	一・五五	四七・一七	五〇・〇九	三・一九	〇・二五	七・九〇
十尺炭	一・二六	一・三三	四三・三	四七・八九	六・六九	〇・二八	七・四八〇

明治三十九年以降同四十三年に至る五ヶ年間平均年産額十四萬噸内外あり。室蘭小樽函館等の諸港へ搬出す。

●夕張第二炭坑 本炭坑は、石狩國夕張郡登川村にありて眞谷地及び楓の二方面に分かる。眞谷地は海拔約二百三十米、北海道鐵道線夕張枝線沼の澤驛より馬車鐵道線に沿ひ東方一里半の處にあり。楓は同枝線紅葉山驛より馬車鐵道線路に沿ひ正東一里半許にして同線の終點楓驛のある處にあり。兩地は南北に約一里半相隔つ。三十八年八月北海道炭礦鐵道株式會社(今の同汽船會社)之を譲り受けてより、今日の盛況を見るに至れり。地質は主として前述の夕張第一坑及び新夕張炭坑につける第三紀の砂岩及び泥板岩より成り、炭層も亦その連續に外ならず。即ち夕張川本流の北側に横はれる清水澤より東

方へ向へる大断層の南側に位し、夕張川を挟み遙に南部に延長せるものなり。一般に走向は南北にして東方へ二十度乃至七十度斜下す。夾炭層も亦殆ど同様の走向傾斜を有す、但、本地域の西部に於ては稍北東に走れり。凡そ本炭坑の地域はその夾炭層の位置により東西兩區に分たる。東區に屬する炭層は、地域の東方に位するクルキ山脈に近く露出するも、各層は厚薄常なく採炭に堪ふべきもの殆ど稀なり。西區に屬する炭層は一鞍状をなして東西兩翼に分かれ、西翼は夕張川の一小支流パンチャヤを南北に横きり、溪流の兩側に露出す。上層第一番層は十五尺の炭質泥板岩を隔て、二十尺及び十二尺の炭層相接し、坑内にては炭質泥板岩は全く石炭と變じ厚さ四十尺に達する處あり、その東方には更に良好なる八尺層第二番層九尺層第三番層二尺層砂岩又は泥板岩の間に現はれ西區炭田の主層をなせり。實に眞谷地楓兩方面の各炭坑は之を掘採するに外ならず。鞍部の東翼は遙に南東方なる夕張川の支流シークリキ近傍に露はれ、一般に炭層厚く十二尺乃至二十尺の間にありて殆んど夾みを有せず、走向は略北東を示し、傾斜は南東に三十五度内外なり。而して

此等の炭層は南下するに従ひ、漸次その厚さを減じ又は消滅する傾向あり。膽振國勇拂郡サヌシベ川に露出するものは此の炭層の連続と見るべきものゝ如し。西區の炭層は之が連続たる上述の夕張第一坑新夕張炭坑のものゝ相伯仲し、一般に品質佳良にして灰分に乏しく、且硫黄も多からず、發烟熔合性にして良好なる骸炭を製することを得べく、その他瓦斯製造にも適せり。今その分析表を示さん。

比重	石炭百分中				骸炭百分中				灰の色	骸炭の 状態
	水分	揮發物	固形炭素	灰分	硫黄	固形炭素	灰分	硫黄		
一・四三	一・三九〇	四・六三三	五・〇七	一・五〇	〇・三三	四・八六	四・七三	〇・三六〇	淡褐	粘結性

明治三十八年より同四十三年に至る六ヶ年間の平均年産額は九萬餘噸にして漸次増大するの傾きあり、何れも鐵路直に小樽室蘭に輸送せらる。

以上の外本地域の東方には所謂大夕張炭山あり。大井上理學士に従へば前記の夕張第二炭坑の北部に當りその炭層の連続にして、夕張川の本流に沿ひて河の北側に東西に走れる大断層によりて境せらる。本地域に於ける炭層は

大約三群に分たる、就中その稍著名なるは唯一にして所謂大夕張炭層群是なり、下層二尺五寸、中層四尺五寸、上層十五尺の三層は何れも夕張河畔に露はれ泥板岩中に介在し平均走向北二十度西を示し東に四十度傾く。一般に本炭層は膨大若くは消失を免かれず、又往々數條に分岐し或は合一することありて常に一定する所なし。概して炭層の南部は良質の石炭を有し北部はその品位劣れり。本炭層に於ける十五個處の石炭を札幌鑛山監督署に於て分析せる平均の結果次の如し。

比重	水分	揮發物	骸炭	灰分	硫黄	灰の色	骸炭質	發熱量
一、三五	一、四〇	四、三三	五、八七	七、九〇	〇、二九	淡き褐、赤、又は灰	粘結且膨脹す	七、三三

幌内炭田地方 幌内炭坑 本炭坑は石狩國空知郡三笠山村にありて夕張炭田の北部に位し札幌の北東十數里の處海拔約百米の地點に在り。小樽港より鐵路五時間にして達し得べく交通至便なり。本炭山は明治六年米人ライマン及び佛人モンロー兩氏初めて之が地質を調査し、同十六年以來専ら官業とし

て經營せられしも、明治二十二年に至り北海道炭礦鐵道株式會社(今の同汽船會社)之を譲り受け、遂に今日の如き盛運を見るに至れり。本地域の地質は殆ど夕張炭田地方と同様にして第三紀層に屬する粘土砂岩及び泥板岩より成り、炭層は主に泥板岩中に介在せり。地層は本地域に於て一大鞍狀をなし、その背斜軸は略北東より南西に向ひその延長約一里に達し。南東又は北西に十八度乃至七十度傾斜せり。大小二十餘個の炭層ありと雖も採掘に堪ふる炭層は凡て五層にして厚さ三尺乃至五尺五寸あり。皆稼行せらる。炭質は一般に發焔非粘結性にしてその分析の結果は次の如し。(日本鑛業誌)

比重	水分	揮發物	骸炭	灰分	硫黄	灰の色	骸炭質	發熱量
一、二七	二、二六	三、六二	五、九六	四、二四	〇、五九	淡赤色	粘結せず	

明治三十七年より同四十三年迄七ヶ年間の平均年産額は約十九萬噸なり、多くは小樽室蘭に輸送す。

市來加炭山は幌内に於ける鞍狀層の南西十餘町の處にあり、周邊多くは泥

板岩より成ること前者と相似たり。但、幌内炭礦地域に於ては殆んど之を見ざる礫岩層が本地域には稍豊富なると、一般に夾炭層薄く且つその層序相似ざるとにより此の兩地域の炭層は恐くは同一のものにあらざるべし。炭質概して良好なれども皆薄層にして且つその區域極めて狭小なるが如く隨て採炭の望み多からざるものゝ如し。

幾春別炭田地方 幾春別炭坑 本炭坑は石狩國空知郡三笠山村字幾春別に在り、海拔約七十米、地勢北方は丘陵相連り南方は一帶の平原にして幾春別川は東より流れ奔別川北東より來り會する地點に位す。前記の幌内炭坑より北東數里を隔て岩見澤の分岐點より鐵路一時間を要するのみ。本炭坑は明治十三年の發見に係り、同十四年米人ポッター之を調査し二十二年十二月北海道炭礦汽船株式會社の有に歸し、今日に至れり。

地質は概ね第三紀層に屬する砂岩砂質泥板岩及び泥板岩の累層より成り、炭層を含める地層は幾春別川を中間に夾み南北凡そ一里東西約四町に亘れり。地層の皺曲は單斜層をなし、川の北側は層位南北に走り、東に五十度乃至六十度傾斜せり。川の南側は層位漸次西に偏して北西に走り、全體の地層は弓形をなす、故に上部は傾斜稍緩にして北東へ四十五度斜下すれども下部に至るに従ひ漸次急となりて七十度に達する處あり。炭層の採炭に堪ふるものは四層あり、就中五尺三寸のものと三尺四寸のものをその主要なるものとす、炭質は一般に幌内炭と相似たり、發焔非粘結性にして瓦斯又は骸炭の製造に適せざれども船舶暖爐等の燃料に適す、その分析の結果を示せば次の如し。

(日本鑛業誌)

比重	水分	揮發物	骸炭	灰分	硫黃	灰の色	骸炭の狀態
一・二五	一・七	四七・六	四二・五	七・四	〇・二六	薄茶色	粘結せず

明治三十七年より同四十三年迄の七ヶ年間に於ける平均年産額は約八萬噸にして産炭の多くは鐵路小樽室蘭等に搬出せらる。

本地域より幾春別川を遡ること凡そ二里許の處に於て南西より來りて本川に會する溪流あり、之を盤の澤といふ。其上流に炭層の露出あるも採掘に堪

南區(十二種平均)	一三九	四二	四二五	五七五	一一	〇三	七四〇	粘結す
北區(十八種平均)	一三四	三九	三八六	四九六	八〇	〇三七	六八五	粘結す

奈井江炭田は美唄炭田の北部に隣接し、後節説く所の空知炭坑の南西數里の處に在り。地勢概ね美唄炭田地域に似て東方に高く西方に低し、奈井江川本地域の中央部を北東より南西に貫流す、大築理學士に従へば地質も亦前者と相似たり、但東方の一局部山地に於ては砂岩及び泥板岩より成り、石炭を含まざる所謂下部岩層發達し、石炭を夾有する上部岩層は専ら本地域の中部以西に發達せり。本地域は地層の層位上、東西の兩部に分つ、即ち東部は本地域の中部を南北に縦斷する大斷層の東側に位する六個の炭層之に屬し、地層一般に褶曲多く傾斜の角度種々なれども十二度乃至三十度のもの多し。西部は大斷層の西側に位する層位整然たる六個の炭層之に屬し、何れも走向南北を示し西方へ六十度内外傾けり。東部の炭層は一般に炭質堅實良好なるも西部に對するものは多くは炭質中等に位す。地質調査所に於て分析せられたる結果は次の如し。

東部(五種平均)	西部(四種平均)	比重	水分	揮發分	骸炭	灰分	硫黃	發熱量(カロリー)	炭の狀態
一二五	一二四	一三六	二七六	四一五	五〇五	六〇〇	〇三三	七五五	膨脹粘結す
一二五	一二四	二七六	三八二	五〇五	七一〇	〇三三	七三三	膨脹粘結す	

北海道廳の調査によれば、奈井江炭坑に於て去る明治四十二年産額約壹萬四千噸に及べり。

空知炭田地方 空地炭坑 本炭坑は石狩國空知郡歌志内村に在りて札幌の北東凡そ二十里の地に位し、石狩川の支流歌志内川を遡ると數里の處、石狩炭田の最北部を占む。近傍の地勢概して平坦にして交通至便なり、小樽港へは鐵路七時四十分を要す。本炭坑の發見は安政年間において明治七年米人ライマン之を踏査し、爾後多少の變遷を経て同二十三年四月北海道炭礦鐵道株式會社(今の同汽船會社)の有に歸せし後初めて開坑に着手し、爾來鐵道を敷設し益々規模を擴張し以て今日の盛況を見るに至れり。本炭坑の地質は夕張幌内、幾春別美唄等の諸炭田の北部に當り、其の連續たる第三紀層にして、主に泥板岩及び砂岩より成り炭層は皆前者の間に挟まれること既に上述の各炭坑と

相似て、その走向の如きも略南北に互れり。本地域に於ては概して地層の變動著るしく、大小鞍状の隆起各處にあらはれ、無數の斷層その間に存在し層位錯雜を極め、傾斜亦概ね急峻にして五十度乃至八十度に及び、三十度以下のもの極めて稀なり。現時採掘中に屬する炭層の數は十有餘に及び、その厚さ二尺八寸より九尺までの間にあり。各層の炭質概ね大同小異にして特殊のものなし。發焔粘結性にして特に瓦斯製造及骸炭原料として優良なりとす。分析の結果左表の如し。(百分率) (日本鑛業誌)

比重	水分	揮發物	骸炭質	灰分	硫	黄	灰	色	骸炭の 状態
一・三三	一・六二	三〇・〇五	六〇・五	七・五〇	〇・二六	淡	褐	粘結性	

明治三十七年より同四十三年迄七ヶ年間平均年産額は約二十三萬噸に達せり。

此の他本炭田地方には歌神炭坑(歌志内村)を初め數個の炭坑あり。北海道廳の調査に據れば、去る明治四十二年に於て此等諸炭坑より産出せる石炭の總

計約四萬噸に達せり。

天鹽炭田 本炭田は石狩炭田の北部に當り、天鹽國留萌及び苫前兩郡に跨り留萌川の上流より北は等別川に達し、南北十二里餘東西三里餘の地を占むる區域にして留萌羽幌の兩炭田此の内にあり、就中前者は本炭田中最も主要なるものなり。

留萌炭田 本炭田は留萌郡の東部に位し、石狩國雨龍郡との境に當り小平薬川及び雨龍川の支流ポロニタチベ川の^{ユラベ}上流地域にして南北約五里東西三里半あり。(以下本炭田及び羽幌炭田の記事は西山正吾氏に従ふ)。本炭田を構成する岩石は主として第三紀の泥板岩にして介砂岩之に次ぎ礫岩亦諸處に厚層をなすものあり。本地域は炭層露出の地方により大略之を五區に分つ。

小平薬區は小平薬川上流五里許、海拔高距百八十餘米の地に在り、採掘に堪ふべき炭層四ありて、厚さ三尺六寸乃至二十尺に及ぶ、各層一大鞍状をなして存在し、傾斜三十度乃至六十度あり、炭質一般に可良なり。

ケネブツ區は小平薬川の支流ケネブツを遡ること二里許の處、上記の小平